
クタビレ荘の生活

チラリズム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クタビレ荘の生活

【Nコード】

N7974A

【作者名】

チラリズム

【あらすじ】

とんぼ町・阿修羅商店街・西口を出てすぐにあるアパート「クタビレ荘」を舞台に主人公「此似手完助」（これにて・かんすけ）とクタビレ荘の住民が繰り広げるコメディ！

1話「クタビレ荘へいらっしやい！」

俺の名前は此これにて・かんすけ似手完助

警察署長の父と一流ファッションデザイナーの母をもつ19歳。

将来の夢なんてコレっぽっちも無い大学生だ。

両親が金持ちなだけあって俺と12歳の妹、此これにて・あわり似手終羽里は裕福に暮らしていた。

しかし……仕事で忙しい両親は家に居ることはまず無い。

休みになると家に顔も出さずに海外旅行へLet's GOである。

痺れを切らした俺と妹は家を飛び出した。

これじゃ駄目なんだ……自分に厳しくなれ！今思うと働くということが何なのかもよくわからない。

バイトをしよう！自分で稼ぎ自分で授業料も払い俺が妹を食わしていくんだ！

……と、勢いだけで隣町まで来たものの……。

「道に迷ってしまった……」

すでに妹は白い目で俺を見ている。

「おかしいな……とんぼ町の阿修羅商店街はこの近くのハズなのだが」

何日か前に見つけた激安売り物件のチラシを頼りに地図を見るが……クソッ！暑い！汗が目に染みる！これほどメガネが邪魔だと思っただことはない！

そーいえばもうすぐ夏休みの時期だったな……。

炎天下の中で地図を持ち続けるのも限界に近づいてきた。

とりあえず二人分のジュースを自販機で買って日陰に休み、これから先のことを考えることにした。

しかし普段おとなしい性格な妹もついに口を開いた。

すると車椅子に乗った女性と金髪ショートヘア＋タバコ＋黒スーツのガラの悪そうな女性がアパートの前に立っていた。

「はじめまして……103号室に住む管理人の間じゃ」あいだ

澄んだような瞳で車椅子の女性が言った。

「はぁ……どうも」

俺は手を差し出した。

「きさまぁぁ！」

金髪の女性の迷いのない蹴りが俺の顔面にめり込んだ。
ドスッ！！

「ぎゃぁぁぁぁ！」

「お止め！結衣！」

車椅子の女性が止めに入る。

「しかし間様！こやつ間様に触れようと」

「触れるくらいよい、何事も警戒しすぎじゃ結衣」

「も……申し訳ありません」

結衣という女性も彼女には頭が上がないといった様子だ。

「私から謝ろう完助殿……彼女は私の付き人で忍者の星崎結衣じゃ」ほしざき・ゆい

「忍者？ってか何で俺の名前を？」

「お主のお父上から連絡は受けておる」

何者だ！ウチのオヤジは？家でコッソリ物件チラシを見ているのを見られたのかな？

「完助殿！」

「はい？」

「ようこそクタビレ荘へ」

「はぁ……」

まだ正式に入居すると決めてないけど。

ま……いいか。

「完助殿と終羽里殿の部屋は201号室じゃ」

そう言つて間様は俺に部屋の鍵と回覧版を渡した。

「回覧版？」

「今週のゴミ出しの日にちが変わったから連絡ついでに住人に挨拶してくるとよい」

間様は笑顔で言った。

「は……はい」

こうして俺とクタビレ荘の人々との生活がはじまった。

2話「回覧板・チャールズ家編」

突然……

そしてアツと言う間に決まったアパート暮らし。

運がいいように思えた俺だが……しかし！

これは破綻の始まりでもあった。

101号室

チャールズ家

「うぐっ！さっそく嫌な予感……」

チャイムを押すことをためらう俺を無視して妹はチャイムを5回鳴らす。

何故5回なんだ？

ピンポンピンポンピンポンピンポン……

……カチャ

戸が開く音によく似ているが、これは銃を構える音！ズドドドドドド……

「うおおおおお！」

玄関の戸に無数の穴が空いた。

銃の弾丸が一発……俺の頬を掠める。

家の中から一人の軍服を着た男が戸を蹴破り俺を片手で押し倒してマシンガンを頭に押しつけた。

「戦場ならキミは死んでいル……」

チビった……俺は約500mlチビった！

っーか出た！

「私は軍を作るため、有益で優れた者が必要なのだ……しかしキミ

は不合格だナ」

軍服の男はサングラスを外し俺に言った。

「そんなこと知るか！アーールドシュワルツエネッガーみたいな顔しやがって……俺は新しく201号室に住むことになって挨拶かねて回覧板を渡しに來ただけだ！」

「む…… 本当かね鈴木二等兵？」

アーノード似の男の背後に貧弱そうな体の男が立っていた。

なんでコイツは軍人として合格なんだよ…… 明らかに俺の方が強そうじゃないか。

「ハッ！チャールズ軍曹…… この者は嘘はついていません！探知機に反応無しであります！」

「そうか…… なら信じよう、私としたことがキミを敵のスパイと勘違いしたようダ」

敵って誰だよ！

「ぬおオ！」

ガチャン！

……と、いきなりチャールズと言う男は驚きのあまりマシンガンを落とした。

「なんと優越な…… キミこそ我が軍にふさわしい！」

チャールズの瞳の先を見ると、妹が弾丸を3発…… 指の間に挟んでいた。

身の危険を感じて弾丸を指で止めたようだ……

お前は本当に俺の妹か！？

「スバラシイ！ミラクルな瞬発力ダ！」

俺のことは完全に無視……

チャールズは終羽里を軍に勧誘し始めた。

「すみませ〜ん」

一人の男がチャールズ家を訪れた。

「鈴木さ〜ん！注文の品をお持ちしました〜」

「ああ東野^{しのぶ}さん待ってたツス……」

どうやら運び屋のようだが、胸ポケットに書かれてる文字がスゲー気になる。

『やりすぎ宅急便』

何を！？

運びすぎということか！？

それとも一般的に運ばないような物でも運んでいると言うのか？

「チャールズ軍曹！注文の‘C4爆弾’手に入りました！」

「よし！すぐに次の作戦に移るゾ！」

「イエッサー！」

犯罪者がココにいる！

「すまないがお嬢さん！入隊の件は後日と言うことで失礼する！」

「……はあ」

……ボタン……

戸を閉めるのを確認して東野という男は走り去った。

「妹よ、まさかとは思うが入隊の話……」

「うん興味はある」

ハハ、汗が止まりそうにないな。

プロフィール

101号室

チャールズ

年齢……約30歳

戦争好きの男

鈴木良平

年齢……17歳

チャールズの部下

高校生

3話「回覧板・立花家編」

なるほど……このアパートは容易な考えで生きていけそうになさそうだ。

すでに101号室でアレだからな……

まだ回覧板も何故か俺が持つてるし、

「なんとかなるよ」

と妹に励まされるし。

102号室

立花家

ピンポン……

「は、はい！」

戸を開けて現れたのは普通の女の子。

髪を二つに括り、右目に眼帯……料理をしたのかエプロン姿で制服、たぶん女子高生だな。

そして恥ずかしがり屋なのだろう、モジモジしながら俺を見ている。

「どちら様ですか？」

「あ……え」と今日から201号室に住むことになった此似手完助と妹の此似手終羽里です」

「よろしくお願いします……私は立花恵理華たちはな・えりかです」

いや、可愛らしい女の子だな。

それも二人も……

……二人??

立花恵理華が二人いる！後ろに！立花恵理華の後ろで刀持って鬼のような形相で俺を見ている……

あゝよく見れば眼帯は左目に付けているけど。
もしかして双子姉妹ってヤツなのかな？

「ストーリーカーね？」

「え？」

「あなた恵理華のストーリーカーですわね」

「……はい？」

彼女は刀をゆつくりと抜き始めた。

「ちょ……姉さん違うの！この人は空き部屋だった201号室の」

刀女は恵理華ちゃんを押し退けて俺の方に向かってきた。

「黙りなさい恵理華、ちょうど通販で購入した私の102本目の名刀『藻紋牙』の試し斬りがしたかったところですよ」

刀も通販で買える時代ですか！？

「やめて！麗華姉さん！」

すでに麗華は恵理華の声など聞こえない。

「チャールズとかいう男に101号室を取られてイライラしていたところでしたの……ストーリーカーさん、この子（刀）に血を吸う快感を味あわせてくださいな……」

刀からオーラが見える！そして麗華が悪魔のような笑みを浮かべた……その瞬間！

「チエエエエストーリーー！！」

「うがあああああ！」

気持ち悪いくらいブサイクな避け方で避けた俺は尻餅をついた。
「あわわわわ……」

「よく避けましたわね……しかし！」

再び麗華は刀を振りかざした。

「立花流奥義！怒羅魂・土裸射舞！！（ドラゴン・ドライブ）」

結局は俺に刀を振り下ろすだけで技でもなんでもない！

「う……うわあああ！」

俺は死を悟って体を丸くした……もうダメだ！

「……………？」

あれ？俺死んでないぞ？

上を見上げた俺が目にしたものは！

妹が片手の指二本で刀を止めている姿だった！

この場でも見せた妹の人間離れした身体能力！

刀はピクリとも動かない！

「は、離しなさい！」

「離したら兄さんが死ぬから無理」

「生意気な！ググググ……」

麗華が更に力を加えたその瞬間！

……………ベキッ！！

見事に藻紋牙が折れた。

「私の藻紋牙あああああ！！」

放心状態になった麗華を抱き上げて恵理華ちゃんは俺達にお辞儀をして家の中へ入っていった。

また回覧板渡しそこねた……

プロフィール

102号室

立花麗華

年齢……16歳

双子の姉。左目に眼帯。刀好き。何故か101号室の座を狙う。

立花恵理華

年齢……16歳

双子の妹。右目に眼帯。姉の世話で大忙しな少女。

4話「回覧板・一撃家編」

俺はこのアパートに来て数分で二度死にかけた。
そして妹をこれほど頼りに思ったことはない。
次も頼むぞ妹よ！

202号室

一撃家

情けない話、すでに姓でビビる俺。

……ピンポーン

バアアン！

チャイムを押したらドアが飛ぶ……

それが当たり前のように。

ドアは飛んで遥か後ろでボコツと鈍い音がした、確認したいが後ろを振り返るのが恐ろしい。

「門下生が来よったー！」

甚平を着たヒゲ長ジジイが俺に抱きついてきた！

ボキボキボキ……

「ぎゃああー！」

ありとあらゆる俺の骨が砕けた。

そのままジジイは俺を離さない。

「本当ですかお父さん」

シブい声で逞しい体、そして何よりメガネが似合っていない男性と……

……とても若くみえ、束ねた髪が魅力的な女性が現れた。

どー見ても夫とその妻である。

「お、お願いですから離して下さい……俺は隣に引っ越してきた此
似手という者です」

「あのーお父様、このお方はお隣さんのようですが」

「なにに！」

ようやく俺は地獄の抱擁から解放された。

「門下生ではないのか？」

「そのようですね、お父さん」

「うゝむ、ワシの夢はいつになったら実現するのじゃ」

「……夢？」

「うむ……我が抹殺真拳一家の夢はカメ〇メ波を覚えることじゃ！
ああゝこのジジイ無駄な人生歩んでるな。

「もう少しで夢が叶うハズなんじゃ！」

「なんか根拠でもあるんですか？」

「うむ……すでにエネ〇ギー波は習得しとるよ」

前言撤回！コイツすげえ！

それにこの家族に、もはや門下生は必要ない……と思うのは俺だけか？

「とりあえずワシは君をいつでも我が抹殺真拳の入門を歓迎するよ」
俺よりも優れた門下生が背後に立っていることは黙っておくことにしよう……

「ではワシらの家族を紹介しよう」

いきなり急展開

いちげき・ともぞう

「ワシの名前は一撃友蔵202号室の主じゃ！趣味は一日家訓！」

「家訓？」

「そうじゃ！見よ！今日の我が家の家訓じゃ！」

友蔵が取り出したのは「弱肉強食」と書いた紙だった。

弱肉強食とは……弱者が強者の餌食、犠牲となり強者が栄えること。

このジジイが書きそうな家訓だな……

とりあえず俺と妹は拍手をしておいた。

「えゝ私はその息子の光太郎です」

こいつたろっ

「光太郎さんの妻で愛子です」

あいこ

さらに二人の男の子が家から出てきた。

「ワシの孫で長男の拳使郎と次男の恥芽じゃ」

けんしろう

はじめ

恥芽は愛子さんの後ろに隠れてお辞儀した。

長男の拳使郎はと言うと……

「ドキーン！」

いきなり妹を見て叫んだ。

そして顔を赤くして妹を指差し言った。

「お、お、俺が一目惚れなんてダサイことするかバーカ！修行に行くぞ恥芽！」

「ま、待つてよ兄ちゃん」

わかりやすい……そしてバカだ。

階段を降りて兄弟は走り去った。

ジリリリリ……

一撃家から目覚ましがなる。

「ぬ……光太郎！愛子さん！修行の時間じゃぞ！」

「オッス！」

そして三人も家の中へ……

正直この家族が隣に住んでいると思うとこれから疲れそうだ。

「ゴミ共ばかりね……」

それは言い過ぎだぞ妹。

ところで玄関のドア……直さないのかな？

それにだ……門下生の入門「カメ〇メ波習得できるとか全然意味わからんわ！

しつかりしろ！一撃家！

プロフィール

202号室

一撃友蔵

年齢……63歳

抹殺真拳一家の祖父。家訓好き。得意スタイル 柔道。

一撃光太郎

年齢…… 35歳

一撃家の父。得意スタイル プロレス。

一撃愛子

年齢…… 34歳

一撃家の母。得意スタイル 空手。

一撃拳使郎

年齢…… 14歳

一撃家の長男。戦闘の才能あり。終羽里に惚れる。得意スタイル

ボクシング。

一撃恥芽

年齢…… 10歳

一撃家の次男。戦闘の才能なし。得意スタイル 特になし。

5 話「回覧板・飛美家編」

さあ最後のお宅へ参ります……

このアパートの住民達に翻弄される哀れな男、此似手完助19歳！
回覧板は最後まで俺の手に……もうゴミ出しとかどこでもいい感じがする。

203号室

飛美家

ついに恐怖のあまり妹を盾にチャイムを鳴らす。

……ピンポーン

「僕に何か用ですかピョン？」

二足歩行で紳士の格好をしたウサギ……

身長約2メートルが俺の隣に立っていた！

「うおお！いつから居たんですか！？」

オーバーリアクションに慣れてしまった俺。

「ん？お嬢さん迷子？家出？それとも駆落ですかピョン？」

「いいえ、あなたを殺しにきたの……」

主旨間違ってるぞ妹よ！話をややこしくするな！

「え、え」と俺は201号室に引越してきた此似手完助、そして妹の終羽里です」

「ふゝん、僕は飛美ピョン太だよ……とび・びよんた化学者として大学の教師をしながら最近黒魔術にハマってるピョン」

最後の最後まで変なヤツばかりだ……。そしてウサギの授業を受ける大学生が目に見え……。

「ところで完助とやら……今、僕はミイラを生贄に人を呪い殺す黒魔術を研究中なのだが……協力して欲しいピョン」

「俺にミイラになれと……絶対にお断りです！」

まったく……まともなヤツはいないのか。

「じゃあ……妹さんをお願いするピョン」

ぶっ殺すぞウサギ！

つーか妹に手を出すとテメエの方が死ぬわ！

……落ち着け俺、平常心だ。

「冗談やめて下さいよ……はいコレ」

そう……回覧板をコイツに渡して終わりだ。

「コレは何ですかピョン？」

ピョン太は回覧板を見て顔色が徐々に変わっていく。

「僕は今、黒魔術のことしか頭にないピョン……ゴミ出しは黒魔術に関係ないピョン、僕をバカにしないでくれピョン」

……ガッ……

ピョン太の投げた回覧板が見事に俺の額に当たった。

「コラア！ウサギでめええ！」

俺はピョン太の耳を掴んで言った。

「あー！僕を怒らしていいのかピョン！黒魔術の恐ろしさを教えてやるピョン！」

ピョン太は両手を掲げて叫んだ。

「飛美ピョン太の名の下に！いでよ！不思議の国のア○ス召喚！」

あゝやっぱり……ドアの周りの飾り付けは不思議の国のア○スをイメージしてたのか……。

何もない地面から約10センチの扉が現れた。

……ギイイ。

扉は開き、中からドレスを着た小さなブス女が出てきた。

……グチャ

いきなりブス女を踏み潰す妹。

「アーーー〇ーースーー！」

見事だ！妹よ！

「待っているア〇ス！今すぐ回復術で治してやるピョン！」

慌ててピョン太はア〇スを掬い上げ、しばらく沈黙……。

そしてピョン太は気づいた。

「しまったー！僕は回復術を覚えてないピョン！完助君！ア〇スのために今すぐ生贄に！」

「近寄るなウサギー！」

逃げる俺！

追うウサギ！

そしてウサギの耳を掴む妹！

「兄さん、今晚はウサギの肉鍋ね……」

ピョン太はアッサリ肉片と化した。

読者は心配しなくても、次回までには再生してる………はず。
もちろん食べてません、てか食べられません。
ここまでなると逆にピョン太に同情します……。

こーして俺と妹のクタビレ荘での初日は幕を閉じた……いつの間にか回覧板も見当たらない。

後から聞いた話によると結衣さんが回収したらしい。

ハア……………くたびれそう。

プロフィール

203号室

飛美ピョン太

年齢……不詳（本人は一応「永遠の20歳」と主張）

化学者。大学教師。黒魔術にハマる。不思議の国のア〇ス全治2ヶ月。

6話「買い物へ」

クタビレ荘で一夜を過ごし、妹は学校へ……。

隣町のため少しばかり距離が遠くなり、妹は普段よりも早めに家を出た。

一学期も今日で終わり、いよいよ夏休みが始まる。

間様は一人で外出……。

「あれ？結衣さんは？」

結衣さんは庭にいた。

「結衣さん何してるんですか？間様どっか行っちゃいますよ？」

「ああ……間様は絵を描きに出かける時だけは一人になりたいそう
だ」

「絵……？風景画ですか？」

「いや……抽象画とかいうやつだ、俺は絵のことはわからん」

「へえ〜不思議なお方ですね」

「謎多きお方だ……ところで完助」

「はい？」

「修行に……付き合え」

結衣さんの右手にはクナイが握りしめられていた。

「遠慮します」

《昼過ぎ》

家具などを揃えるために買い物に出かけることにした。

金は昨晚、母が伝書鳩で送ってきた……母も十分意味不明キャラである。

つーかよく届いたものだな……

途中、仲良く歩く双子の女子高生を発見。

「やあ！麗華ちゃん恵理華ちゃん学校からの帰りかい？」

「はい……姉さんと今から買い物に」

「俺もだよ」

「言つときますけど妹に何かしたら承知しませんわよ」

「ま、まだ何もしてないじゃんか!」

「じゃあ、これからするんですの? ストーカーとか?」

麗華ちゃんは睨みながら腰に差した刀を手をする。

「コレクシヨンNO.67『黒矢薙鉄子』は切れ味が最高ですわよ」
か……勘弁してくれ。

にしても、どーして101号室の変人も含めて銃刀法違反で捕まらないのだろうか?

麗華ちゃんをなだめていると、恵理華ちゃんが俺の肩を軽く叩いて言った。

「完助さん……あれ愛子さんじゃないですか?」

恵理華ちゃんが指差す小さな果物屋に一撃家の主婦、愛子さんの姿があつた。

「本当だ……」

「一撃家の若妻ですわね」

3人はコツソリと愛子さんに近付く……愛子さんは気づいていない。果物屋のお婆さんが愛子さんに話しかけた。

「何にするんだい?」

「そ〜ね〜?」

愛子さんはスイカを片手で持ち上げた。

……グシャ!

スイカを握りつぶした!

「ありゃ?」

「ちよつとお客さんなんてことしてくれるんじゃない!」

「ご、ごめんなさい……硬さを確認しただけなんですう」

愛子さんの恐ろしい握力!

「うがぁぁ!」

怒り狂った果物屋のお婆さんは持っていた杖で愛子さんに殴り掛か

った。

……ベキッ！

容赦なく杖を握りつぶす愛子さん。

「ストップ！」

俺が後ろから愛子さんに抱きついて止める。

「あら？完助君どーしたの？」

「愛子さん……とりあえずココは謝りましょう」

4人で果物屋のお婆さんに謝り、その場を凌いだ。

《家具屋前》

愛子さんも加わって家具屋へ。

愛子さんはニコニコしながら俺達の先頭を歩く。
ちゃんと反省してるのだろうか？

「悪魔みたいな女ですわ……」

麗華ちゃんはボソツと呟いた。

麗華ちゃん……あんたも十分悪魔ですよ。

「麗華ちゃん……ちよつと」

俺は麗華ちゃんを手招きし、耳元で言った。

「悪気はないのだろうけど、また愛子さんが止まらなくなったらお願いできる？」

「仕方ありませんわね」

「姉さん頑張つて」

家具屋に入り愛子さんは辺りを見回して言った。

「私にまかせて、安くて丈夫な品を見つけてくるわ」

愛子さんは笑顔で指をポキポキ鳴らした。

さつそくきた！

「麗華ちゃん！」

麗華ちゃんは素早く刀を抜いて愛子さんに斬り掛かった！

「若妻成敗！立花流奥義！蛇留魔斬り！（たるまぎり）」
行け！ただの横斬り！

……パキーン！

折れた。

殺気を感じて振り向いた愛子さんの手刀でアッサリと鉄子は折れた。
2日連続で麗華ちゃんの名刀コレクションが折れた。

シヨボいぞ！

シヨックでその場に倒れる麗華ちゃん。

「姉さん！しっかり！」

駆け寄る恵理華ちゃん。

腰を抜かす俺。

……この日、家具屋の家具は壊滅状態になった。

7話「恐怖のカレーライス」

ミンミン……

夏到来！

朝、パジャマのままで外へ出て大きく息を吸う。

今日も頑張るぞ！っという気持ちになれる。

そして、いつも朝は必ず庭にいる間様に挨拶をする。

「おはようございます」

「あはよう完助殿、もうココには慣れたか？」

「ええ……まあ」

「面白いじゃろ？ココの住民は」

俺には面白いよりも恐ろしいです。

「何か私に質問があれば聞くぞ？」

間様は笑顔で言った。

俺はしばらく考えて質問した。

「間様は何故101号室じゃなくて103号室に住んでるんッスか？」

「変か？」

「なんとなく……」

「103号室の小窓からは庭に植えた花を観察できるからじゃ……」

「なるほど……花ですか」

「少しずつ成長していく花を観察するのが私の日課になったらるんじや」

間様とのお喋りは安らぐな。

「あと一つ質問、聞きにくいんスけど……」

「ん……遠慮するな」

「間様って、おいくつ……ですか？」

「いくつに見える？」

「20代……前半？」

「500歳じゃ」

「嘘でしょレ」

「じゃあ600歳」

「‘じゃあ’って何スカ！しかも増えてるし！」

「はっはっはっ、完助は面白いな」

バカにされてるな……俺。

そして、やっぱり……神出鬼没なヤツが上から降ってきた。

「うりゃ！」

……シユタタタ

俺は飛んできた手裏剣をギリギリ避けて地面に刺さる。

「間様！大丈夫ですか？」

でた！星崎結衣！

「コラッ……完助殿は敵ではないと言い聞かしたであろう結衣」
ムツとした顔で結衣さんに注意する間様。

「……しかし」

結衣さんのタバコの煙が俺の口に入る。

「ゴホッゴホッ！結衣さん！タバコの煙なんとかしてくださいよ！
つか結衣さんタバコ吸っていい歳なんですか？」

「失礼な！俺は20歳だ！堂々と吸える年齢だ！」

‘堂々’……つまり昔から吸ってたな。

「邪魔が入ってしまったの完助殿、では失礼するよ……私の年齢は
また今度教えてやろう」

いつになるかな？

「は、はい」

間様の後ろ姿を見届ける俺をしばらく睨む結衣さん。
女性の年齢を聞くな無礼者……といった顔で。

俺は恐る恐る部屋に戻った。

すると朝からカレー‘らしき’匂いが部屋中を充満していた。

「お帰り兄さん……もうすぐ朝ご飯だから、それまでにレポート終わらしたら？」

エプロン姿で髪を括った妹。

妹の唯一の趣味である料理。

しかし……妹の料理は恐ろしいほど下手である。

「終羽里……朝ご飯は俺が作るから」

「ダメ、今週は私が料理当番だから兄さんはおとなしくレポート済ませて……」

おとなしくしてられるか！

朝からカレーライスとはにかく我慢しよう、しかしソレは果たしてカレーか？

まず何故に紫色なのだ？

ナスか？ナスでも入れたのか？

俺は大学のレポートが置いてある机に座ってはいるが、カレー‘らしきもの’が気になって仕方がない。

「あの〜」

俺はゆっくりと妹に近づく。

振り向いた妹の右手には包丁。

回れ右して机に戻る。

本気で妹にビビる俺。

……グツグツ。

カレー‘らしきもの’が完成に近づく中、俺はあることに気付く。
妹が左手に持っている料理雑誌が開いているページには、八宝菜の

作り方’と書かれていた。

え……八宝菜ですか？カレーですか？
どっち？

たまらず俺は妹に駆け寄る。

鍋に何か浮いている。

……スリッパ！

どーいう成り行きでカレーにスリッパが入るのだ？

「終羽里……何を作ってる？」

ついに聞いた俺！

「カレー」

ファイナルアンサー！？

恐怖のあまり机に座って神に祈る。

まだ俺は死にたくない……

徐ろに壁を見る俺。

そこには‘生殺与奪’と書かれた紙が貼られていた。
生殺与奪とは……どうにでもできるという意味。

クソッ！妹よ……202号室のジジイにもらったのか？

捨てる！本気で怖いから！

「はい……兄さん」
きた！

妹は‘カレーライス’を机の上に置いた。

言葉にならない悪臭。

何故に平気なのだ妹よ！

誰かガスマスクを寄越せ！

部屋に入った時は‘まだ’カレーらしき匂いがしたが今は違う！

「食べて……兄さん」

断りたい！

しかし妹は追い打ちをかけるかのようにスプーンを手に取り‘カレー

ーライス’を掬い俺の前に！

まるでスプーンを持つ妹の手は毒手のようだった！

……そして

……パクッ

5分後……俺は救急車に運ばれた。

8話「ピョン太の部屋」

‘カレー’を食べ、腹痛で入院した俺は3日後に退院した。

妹は入院中に毎日見舞いに来てくれて住民達からの見舞いの品を持ってきてくれた。

何故か住民達は直接来てくれなかった。

もはや見舞いではない。

チャールズからは手榴弾……もちろんいらない。

麗華ちゃんからは名刀コレクションNO.36『魅頭妖感』みずよつかん

この刀を握ると、どんな病も治るらしい……何度握っても腹痛は治らんし、普通に水ようかんをくれた方がマシだ！

そして自分のコレクションを易々と他人に渡すな！

恵理華ちゃんは花束、普通かと思ったがギャグなのか本気なのか菊の花束は縁起が悪い……死んでないぞ俺。

うっかり間違えたことにしておこう。

一撃家一同からは

「筋トレ特別メニュー」

の本……悪いが俺は普通の人間だ！入院中にできねーよ！

ピョン太からは大量の特性頭痛薬……はじめから期待してなかったし俺は腹痛だ！

……唯一まともだったのは間様が作ってくれた折り鶴くらいだな。

クタビレ荘に戻って……まずは妹に料理を作ることを禁止した。

趣味をもつことは素晴らしことだが、とりあえず料理以外の趣味を見付けてもらうことにしよう。

「そーいえば」

「ん？」

「兄さんが退院したら203号室に来てくれってピョン太さんが言ってた」

「ウサギが？」

嫌な予感がする……。

よりによって一番会いたくないヤツに。

俺は渋々203号室へ向かった。

……ピンポーン

「入っておいでピョン」

……ガチャ

……シュシュシュ

「だあああ！」

無数のメスが飛んできた……避けるのは少しばかり慣れてしまった俺。

「いきなり何すんだ！」

「ちい……」

「あ！今舌打ちしやがったなウサギ！」

「まあまあ今のは忘れてくれピョン」

危うく実験体として捕獲されそうになって簡単に忘れてたまるか……。

「こっちは病み上がりなんだからな」

そして部屋の奥へ入ると薬瓶や謎の機械、魔法の本など俺には到底理解できない物が散乱していた。

「少しくらい片付けてたらどーなんだ？足の踏み場の無い」

部屋中を見回していると、部屋の隅にもう一人の俺が立っていた。

「俺？」

「ああ……これはクローン人間だピヨン、前に君が挨拶に来た時に髪の毛を一本抜いておいたピヨン……髪の毛一本で君のクローンは簡単にできたピヨン」

世界の平和のために今ココでコイツを殺しておくべきか？

「ちなみに君の妹さんの髪の毛も取得済みピヨン……これで強くて無表情、冷静かつ残酷な君の妹が作れるピヨン」

「テメエ人の妹で何企んどんじゃ！」

「でも君と違って拒絶反応がヒドくて妹さんが全然作れないピヨン」
よくわからんが俺は妹に負けているということか……いろんな意味で。

とりあえず妹は作らなくていいぞ。

「いいから本題に入れ」

「うむ……本題はコレだピヨン」

ピヨン太が手にしているのは目も口も無い一羽のフクロウ。

「なんだソレ？」

「このシメフクロウは人間の魂を吸う貴重なフクロウだピヨン、今朝やつと宅配で届いたピヨン」

たぶん東野さんだな。

「このフクロウと完助君を合体させて鳥人完助を作るピヨン」

やっぱりきた！

ふざけるな！実験体になってたまるか！

しかも何故シメフクロウなんだ？他の鳥でも作れそうだが……。

俺は玄関の扉を開けて逃げようとした。

「逃がさないピョン！飛美ピョン太の名の下に！いでよ！不思議の国のアース！」

「そいつは今ケガしてるんじゃないのかよ！」

「う……そーだったピョン！……ならば」

ピョン太は杖を手にした。

「くらえ！大魔法ファイアショット！」

やばい！燃やされる！

俺はその場にしゃがんだ。

……ん？燃えない？つか体が動かないぞ？

「ヒヨヒヨヒヨ引つかかったピョン……実はファイアショットは相手の体の自由を奪う魔法だピョン」

くっ……紛らわしいうえにムカつく！

「さてと、実験を開始するピョ……？アレ？シメフクロウは？」

部屋を探し回るピョン太。

「そーいえば玄関から出ていくの見たぜ」

「うがああ僕のシメフクロウが！」

外へ出て走り回るピョン太。

《一方201号室》

「やった……フクロウ捕まえた、小腹が空いてきたし兄さんにバレないうちに鍋にして食べよう」

説明しよう！妹は何故に魂を吸われないのか、それは妹がシメフクロウの頭部を掴んでいるからだ……シメフクロウは頭部を掴まれると魂を吸うことができないのだ！

……ザシュ！グチャグチャヌチャブチュ！

《あまりにグロテスクなため203号室へ》

「クソッ！こーなったら予定変更、完助君をミイラにして黒魔術の生贄になってもらうピヨン」

その件が残っていたか！

……ん？体が動くぞ？

「しまったピヨン！魔法の効果は2分15秒で消えてしまっただピヨン！」

微妙な魔法だな。

とにかくコレで逃げれる！

「逃がさないピヨン！くらえファイアシヨ……！」

「させるか！」

ピヨン太が魔法を唱える前に俺はピヨン太の机の上にある黄色い液体の入ったフラスコをピヨン太に投げつけた。

……ガチャーン！

「ぎゃああ！」

ピヨン太は見る見るうちに小さくなり、消しゴムほどの大きさになった。

コイツこんなまで作ってたのか。

俺はピヨン太を掴んで瓶に入れてフタをした。

「だ……出してピヨ〜ン」

「拒否する！」

そして俺はピヨン太の部屋を出た、二度と203号室には行かないことを心に誓いながら。

夜……結衣さんがピヨン太を瓶から出した。

そして間様は実験の件でピヨン太に注意したらしい。

とりあえず一件落着だな。

9 話「クーラー」

暑い夏……。

欠かせないのがクーラーである。

そんなクーラーが8月になって201号室から消えた。

《201号室》

「暑い熱い厚い……でも寒い……終羽里君、熱いコーヒーを入れてくれないかね？」

「兄さん、暑さのあまり頭のネジが溶けてるわ……」

「うう……誰だ、我が家のクーラーを持っていったウ○コ野郎は？」

「兄さん、暑さのあまり禁止用語が自然に出たわ……」

とりあえず冷蔵庫を開けて涼しんでからコーラを1本取り出して飲むことにした。

「兄さん、それは刺身醤油よ……」

「うがああ！どーして冷蔵庫には刺身醤油と鶏肉しか無いんだああ！」

……ん？鶏肉？

少しずつ冷静になっていく俺は妹に聞いてみた。

「妹よ……前にピョン太が人間の魂を吸うフクロウを逃がしてしまったのだが、もしかして食べたんじゃないだろうな？」

「うん、食べ……知らないわ」

食したなコイツ！

しかも冷蔵庫に堂々と保存！

「あ……後で本人に聞いたんだが、そのフクロウを食べた者はどん

な魂も吸う能力を覚えるそうだ」

すると開けていた窓からネコが入ってきた。
そして妹の横を通り過ぎると……。

「うにゃああああ！」

魂を抜かれたかのように倒れた。

「兄さん、朝食が手に入ったわ……」

ああ……妹がさらに強くなってしまった。

……ピンポーン。

「ん？誰だ？」

玄関のドアを開けるとチャールズが立っていた。

「此似手完助！君に極秘任務の参戦を任命すル！」

「……は？」

いきなり戦場ですか！？

訳も分からないまま俺はチャールズに首根っこを捕まれて101号室へ……。

妹も後ろから付いてきた。

部屋の中はまるで軍の会議室……壁にはマシンガンなどが飾られ、机の横には大きな地球儀。

「極秘任務とはコレである！」

チャールズが指す床には見慣れたクーラーが。

「あー！MYクーラーじゃねえか！テメエが盗んだのかチャールズ！」

「失敬ナ！盗んだのではない！クーラー型爆弾を作ろうとしたが失敗して爆弾を取り外せなくなっただけだ！」

よーするに盗んで勝手に爆弾を取り付けたバカ軍曹ってことだな。

「兄貴！恥を承知で頼みます！一つの国を買えるほどの値段はする爆弾なんです！取り外しに協力を！」

鈴木が俺の背中に抱き縋る。

この軍曹が国を買えるほどの金を持っているとは到底思えんが……。

「何で俺なんだ！ あんたらプロじゃないのかよ？」

「我々は設置専門のため取り外しは論外ダ！」

バカとしか言いようがない。

「他の人に頼んだ方が？」

「住民の皆さんは外出中です！」

タイミング良すぎだろ！

「兄さん……」

そうだ！ 妹がいたんだ！

「なんだ妹よ！」

「頑張つて……」

こんな時だけ応援側ですか！？

マジ断つて逃げたいが、俺にマシンガンを向けるチャールズ。

すでに選択肢は存在していなかった。

「残り5分ダ」

時限式！？

「や…… やっぱ無理だ！ 俺にはできん！」

俺の肩に手を置く妹。

「末代まで呪うわよ兄さん……」

「頑張らせていただきます」

しかし何をすればいいのだ？

刻々と時間が迫る。

…… バアアン！

101号室のドアを蹴破つて立花姉妹見参！

もちろん蹴破つたのは麗華ちゃん。

「今日こそ101室は頂きますわ！」

bad timing !

死地におもわいてしまった！

「姉さん、お願いだから大人しく102号室へ帰りましょ？……ね？」

がんばれ恵理華ちゃん！姉を止める！

「恵理華！女にはやらねばならない時というものがありましてよ」

「そ……そーなの？」

まさかの納得！

「フッフッフ見なさい、この素晴らしい波紋を……あまりの破壊

力の恐ろしさで今は作られていない名刀コレクションNO・103

『花鳥戦光』！今日はこの子（刀）の試し斬りに持って来いですわ」

「受けて立ちましょウ！サムライガール！」

バトル開始！……と思いきや、俺と目が合う麗華ちゃん。

「あら？居ましたの完助」

「できれば居たくありませんでした……」

「見たところクーラーの故障のようですわね、私に任せなさい……」

こんなの私のチョップ一発で直りますわよ」

事態は最悪！

そして、さようなら俺！

「立花流無刀奥義！機械襲利！」
きかいしゅうり

……ガン！

チュドーーーーン！

この物語はフィクションのはずです……。
そして

「クタビレ荘の生活」
はまだまだ続きます。
気合いとノリで……。

10話「プール」

奇跡の塊……それがクタビレ荘。

前回、クーラー爆弾によってアパートが崩壊。

しかも！

間様の謎の権力によって24時間で

「クタビレ荘4号」

が建てられた。

住民は無傷、まず有り得ない……。

そして過去に2回崩壊していた事実。

間様に聞くと……1回目は愛子さんが料理中、不注意によるガス爆発。

2回目はピョン太が誤ってドラゴンを召喚して崩壊。

間様が言うに

「楽しければ崩壊を許可する」

らしい。

住民が住民なら管理人も管理人だな……。

……そして今回の舞台は市民プール。

夏休みも残り数日、アパートの住民があまり外出しないのを見兼ねて、間様の提案でプールに行くことになったのだ。

「冗談じゃありませんわ！海へ行くとってお気に入りのビキニを持ってきたのに庶民プールだなんて……庶民の分際で私のビキニ姿を見るなど汚らわしい」

「市民よ姉さん」

「キサマも歴とした庶民だバカ」

「な……今なんて言いまして？結衣！」

「庶民」

「キーーー！こんなことならピョン太と一緒にアパートに残るべきでしたわ！」

ピョン太は大学の都合上で部屋で実験に明け暮れているので欠席である。

《一撃家のグループ》

「いいか恥芽！俺と水泳で25メートル競争だ！負けたら腕立て百回だ！」

「無理だよ！僕泳げないし、まず足が付かないもん」

「言い訳するな！」

拳使郎は恥芽をプールに突き落とした。

…ドボーン！

「うがばったす……助けばっ！」

何故か水着の代わりにフンドシを巻いている友蔵はソレを見て笑う。

「はっはっはっ、精進せいよ恥芽！」

そー言っつて毎度お馴染みの家訓が書いてある紙を溺れる恥芽に見せる。

今日の家訓は‘粒々辛苦’

意味は、コツコツと苦勞を重ねて励むこと。

無茶があるな……。

父の光太郎さんは息子に見向きもせずに素晴らしいクロールでプー

ルに来たお客の注目の的。

母の愛子さんはプールに来たお客さんとお喋り。

どーしようもない家族である。

プールに沈む恥芽を終羽里が助けた。

「お……女！俺達の修行の邪魔をするな！」

モジモジして恥ずかしがりながら拳使郎は終羽里に言った。

咳き込む恥芽の背中をさすりながら終羽里は言い返した。

「死んだら修行にならないわ、まずは泳げるようになるための修行をするのね……」

ごもつともだ妹よ！

「くっ……」

しばらく拳使郎と終羽里の睨み合いが続いた。

《チャールズのグループ》

チャールズと鈴木は水中でホフク前進をしていた……。

バカだコイツら。

声をかけにくいのでパス。

《立花姉妹のグループ》

プールサイドで立っていた恵理華ちゃんに話しかけようとした瞬間

……麗華ちゃんの刀が俺の両肩に乗る。

「このまま首を跳ねてもよろしくて？」

「今日は二刀流ですか？麗華ちゃん？」

「プールなどの肌をさらけだす場所は妹に色目を使ってくる男が多いのよね」

確かに何故かスクール水着の恵理華ちゃんに目がいくのは当然だ。

「いい加減にして姉さん……」

呆れる恵理華ちゃん。

「あなたのことを思つてですわ恵理華！耐水効果のあるコレクションNO・55『真墜飛出騎』とNO・18『荒威具魔』を手に入れるのにどれだけ苦労したと思つてるの！特に真墜飛出騎なんて……」

……と麗華ちゃんと恵理華ちゃんが言い争っている間に両肩の刀を退けて俺は二人から離れた。

《間様のグループ》

プールで泳ぐ人々を遠くから眺めている間様に近寄ると彼女の方から声をかけてきた。

「完助殿は泳がんのか？」

「泳ぐ気がなくて……」

とても泳げる状況じゃない。

「皆をプールに連れてきて正解じゃな、私も足さえ動けば泳げるのにな」

少し俯く間様は寂しそうだった。

「そーいえば結衣さんは泳がないんスカ？」

すると急に間様は笑顔になって言った。

「よくぞ聞いた完助殿！実は結衣はカナヅツ……」

とつさに結衣さんは間様の口を塞いだ。

「間様……いくら間様でも私の弱点を完助に言えば承知しませんよ」

すでに自分で弱点って言っちゃってるし……。

「結衣さんカナヅチなんですか？」

「修行をすればすぐに泳げるようになる」

結衣さんは少しばかり照れながら言った。

立花姉妹と愛子さんの水着姿も良かったけど、この二人の水着姿も見たかったな。

悲しきかな男の性。

「きゃあああ！」

恵理華ちゃんの叫び声！

俺はすぐに駆けつけた。

「どーしたんだ恵理華ちゃん？」

「プールにサメが……」

そんなバカな？

俺はプールを見渡すと確かにサメの背鰭が見えた、アナウンスでお客様に全員プールから出るように指示がでる。

「どーしてサメが？終羽里、知ってるか？」

「友蔵さんが修行のためにプールに放したの……」

「バカじゃねえか teme！迷惑考えろや！つーか何処から持ってきた！」

「当然海に決まっとるじゃろ？」

バケモノかよジジイ……電車とかだと、すぐに警察に捕まるからコツソリと海からココまで己の力だけで持って来やがるとは……。

今までバレなかったのが奇跡だな。

続々と集まるクタビレ荘メンバー。

「間様、暗殺の許可を」

……と、結衣さん。

「何枚に下ろしましょうか？」

……と、麗華ちゃん。

「一撃で倒せるかしら？」

……と、愛子さん。

「おいしそう……」

……と、妹。

間様はひたすら笑い、ちゃっかり恵理華ちゃんも姉の応援。

女性陣が怖い。

男性陣は誰がサメを仕留めるか、賭を始めた……その中にジジイの姿もあった。

責任とれやジジイ！

……ピーポーピーポー。

警察が来た。

ホッ……これで安心だな。

「君かね？サメをプールに放した犯人は？」

俺に問いかけてきた警察官。

「……え？」

すでに俺以外のクタビレ荘メンバーの姿は無かった。

あゝいゝつゝらゝ！

《警察署》

詳しく事情を話して、俺の疑いは何とか晴れた。

ざまーみるジジイ！

しかしアパートに帰るのが怖い。

バケモノ達の巣には帰りたくない。

「どーした？帰らないのか？」

「すいませんが今日1日だけココに泊めてもらえませんか？」

「よくわからんが若いのに苦労してるんだな」

「すみません……」

俺は生まれて初めて警察署で一夜を過ごした。

11話「花火大会」前編」

もうすぐ夏も終わる。

……夜。

都会から少し離れた場所にある、お墓の密集地に集合することになったクタビレ荘メンバー。

今日は花火大会の日である。

一番最初に俺と妹が到着した。

「俺達以外は誰もいないな？」

「……うん」

待つ間に近くの自販機で俺はお茶、妹はオレンジジュースを買って飲む。

「ジュース零すなよ、間様から借りた浴衣だからな」

「……うん」

今日は間様が子供の頃に着ていたらしい浴衣を妹が借りて着ている。間様の子供時代、かなり……いや！超気になる！

想像をふくらます俺に近付いてくる双子の姉妹。

「ここから花火を見れば十分じゃない？わざわざ人の多い出店とかに行くと妹の身が心配ですわ……」

相変わらずだな麗華ちゃん。

……おや？

今日は一人多いぞ？

「初めましてー！この双子の2つ年上の友達で大坂晶子おおさか・しょうこって言うねん、よろしくな」

「……ども」

関西弁を喋る元気な女性だな……浴衣も似合っていて美人だ。

「学校で仲良くしてる友達を連れて来ちゃいました、よかったですか完助さん？」

「うん……全然いいよ恵理華ちゃん」

《10分後》

「待たせたの」

間様と結衣さんが到着。

紫色が魅力的な浴衣の間様とスーツの結衣さん。

暑くないのかなスーツ？

しかし結衣さんの浴衣姿も見なかったな。

「私の浴衣の着心地はどうじゃ終羽里殿？」

「大丈夫、色も好き……」

「それはよかった」

間様と終羽里……並ぶと、最強の文字が二人の背後に見えてくるようだ。

そろそろ花火が上がる時間なのに他のメンバーは遅いな。

俺は間様に聞いてみた。

「間様、他のメンバーは？」

「……ん、さつき愛子殿から連絡があつての……宴会の場所取りをしてくれてるそうじゃ」

「じゃあ私達も早く移動しましょ、虫が多くてかないませんわ」

文句を言う麗華ちゃんを先頭に俺達は花火大会へと向かった。

「麗華ちゃん、なんだか今回の刀は違うね」

いつもガンガンにオーラが出ている刀ばかりなのに今回は少し短くスゴく綺麗な刀だった。

「これはNO.1『咲夜華』……家宝ですわ」

「家宝！？気合い入ってるね、折れたりしない？」

「心配無用、コレは特別ですよ」

「なんで家宝の刀を持ってきたの？」

「今日は私達姉妹の誕生日ですよ」

へえ……そーなんだ。

「だからプレゼントの代わりに一人くらい狩ってもいいかなーと思
いまして特別に持つてきましたの」

やっぱり理由は殺戮系か……。

「とりあえず二人とも誕生日おめでとう」

なんだか今夜は事件の臭いがプンプンするな。

《川沿い》

木の下にブルーシートを敷いて友蔵とピョン太が騒いでいた、近く
にビールの缶が大量に転がっている。

「お！来たか完助君！こつち来て一緒に飲まんか？」

「僕と一緒に魔法について語ろうピョン」

「まだ未成年なんで遠慮しときます、魔法にも興味ありません」

なんだ？ジジイとピョン太は飲み仲間なのか？意外だな。

「妹さんはスゴく興味を持ってくれたピョンよ？」

「何！本当かよ終羽里！」

「うん、ピョン太さんが2年かけて覚えた魔法の数々を2日で覚え
たわ……」

その瞬間ピョン太は口からアワを吹き出して倒れた。
妹の才能に相当ショックだったらしい。

「飲み過ぎですよ」

愛子さんが友蔵を心配して言った。

「大丈夫じゃよ愛子さん、大体ワシは酔わないように体を鍛えてあ
るんじゃ！」

ベロベロに酔いながら言うセリフじゃないな……しかも前回のプー
ルの件で捕まったハズのジジイが何故にココにいるんだ？

一方、間様は……。

「では頼んだ結衣、期待してるぞ」

「おまかせください……では行って参ります」

結衣さんはカメラを片手に闇へと消えた。

「間様、結衣さんに何を頼んだんスか？」

間様はニコツと笑って話し始めた。

「私は花火大会に来る人々や景色の絵を描くのが好きでな、結衣に頼んで毎年いろいろと写真に撮ってもらってるのじゃ」

「へえ……」

「特に子供の笑顔を描くのが好きじゃな」

やっぱり間様は清らかな一面もあるようだ。

……ん？なんか人が増えてきたぞ。

人だかりに近付いて見ると、何かを囲むように人が円になっていた。

中心には拳使郎と恥芽が喧嘩をしていた。

どーやら恥芽の綿菓子も拳使郎が奪おうとしているらしい。

間様が求めている子供の絵は決してコレではないのは事実だな。

「ヒドいよ兄ちゃん！さっきも僕の林檎飴を食べたじゃないか……
焼きそばも」

「うるせえ！いいから寄越せ！」

一方的に拳使郎に殴られる恥芽。

馬乗りにされてボコボコになる……周りで見ている人達からは悲鳴
などは聞こえるが喧嘩を止める者は誰もいない。

なんとなくわかる気もするけど……バトルオーラが漂ってるのが見える。

すると光太郎さんが拳使郎の拳を止めた。

そして恥芽を無視して拳使郎に暑苦しい抱擁。

「ナイスファイトだ拳使郎！」

次男に対しては歪んだ愛情だな。
マジで恥芽が可哀想だ。

「整列だ！鈴木二等兵！」

「ハッ！チャールズ軍曹！」

あゝ忘れてた、チャールズ達も来ていたんだな。

つか一人しか隊員がいないのに整列はどうかと思うが。

「今回の任務は花火とやらを奪うことだ！打ち上げられる前に全て
いただく！アレは我が軍にとって必ずや戦力になる武器だ！」

「ボードの用意は出来てあります軍曹！」

「よし！行くゾ！」

二人はボードに乗って川を渡り花火強奪作戦を開始した。
いつまで子供の心を持っているんだ、あの二人は……。

バカ二人を見送った俺に駆け寄る晶子ちゃん。

「なあなあ完助君、君もウチらと一緒にに行こうや」

晶子ちゃんと立花姉妹は出店の方へ行くようだ。

「そーだなあ、終羽里も来るか？」

「……うん」

「間様はどうします？」

「私は遠慮しておく……楽しんでくるとよい」
ちよつと残念だな。

「本堂の近くで御輿がやってるらしいねん、行ってみよ！」

賑わいを増す出店の方に向かおうとした瞬間。

……ドーン！ドーン！

花火が始まった。

同時にチャールズ達の任務は失敗したようだ。
しばらく俺達は花火を見とれていた。

11話「花火大会」前編」（後書き）

……あ！そうそう、今回の「クタビレ荘の生活」は初めて後編があるのです。

12話「花火大会」後編」

賑やかな夜更け。

空を見上げると綺麗な月が俺達を優しく見守ってくれているように見えた。

祭りは続く、花火も今は少し休憩しているようだ。

出店を転々とする俺達。

眠たいのか、妹は目を擦りながら俺達の後ろを付いてくる。

「終羽里……間様達の所に戻ったらどうだ？」

「……大丈夫」

人間離れな妹とは言え、一応、子供だからな、普通に可愛いところもあるもんだ。

絵理華ちゃんが気がつき、終羽里の手をつないで歩く。

《金魚すくい》

晶子ちゃんが次々と金魚をすくうのを隣で見る俺達。

「結局出店に来ちゃったね麗華ちゃん」

「絵理華や晶子がどうしても行きたいって言うもんだから仕方ないですわ」

髪を掻き分ける麗華ちゃん。

うつ……普段恐ろしい子も可愛く見える仕草。

妖艶な真紅の浴衣、麗華ちゃんが着ると貫禄もあるけど……。

一方の絵理華ちゃんはピンク色の可愛い浴衣。

さすが美人姉妹、雑誌の表紙を飾ってもおかしくない。

「あの……完助さん、あまり見つめられると恥ずかしいです」
上目遣いで絵理華ちゃんが聞いてきた。

「え？あゝゴメン、あまりに可愛らしつ……！」

明らかに感じる殺気に言葉が出なくなった。

俺の背後にピッタリくっつく麗華ちゃん。

「あら……？私の誕生日プレゼントは完助かしら？」

鞘から刀を抜く音が微かに聞こえた。

「完助君どないしたん？スゴい汗やで？」

金魚すくいを終えた晶子ちゃんが聞いてきた。

あのね晶子ちゃん、今俺はこの場で首と体がお別れして周りで祭りを心の底から楽しんでいる子供達に赤い血をぶちまけちゃうかもしれない状況にいるんだよ……。

情けないが救いを求めてチラッと妹を見る。

妹は絵理華ちゃんと手をつないだまま、歩きながら寝ていた。

おゝい！

……ドン！

「痛っ！」

晶子ちゃんの肩にぶつかる長身の男、そして走り出した。

「なんやねん！ム力つくな！」

そー言つて浴衣の袖に手を入れる晶子ちゃん。

「あゝ！ウチのサイフがない！」

叫ぶ晶子ちゃん。

「さっきぶつかったヤツに盗まれたんや！お気に入りやったのに……」

……

「行きますわよ絵理華！」

麗華ちゃんと絵理華ちゃんは走つて男を追いかけた。

絵理華ちゃんが手を離しても終羽里は立ちながら寝ていた。

晶子ちゃんに終羽里を任せて姉妹を追いかける俺、やはりココは女性に任せる訳にはいかないだろ！俺がサイフ泥棒の男を捕まえてや

る！

「誕生日プレゼントのターゲット変更ですわ！」

すぐに男に追いつき高くジャンプする麗華ちゃん。

「絵理華！スタンバイ！」

すると絵理華ちゃんは袖に手を入れて桜の花びらを取り出して撒き散らし、麗華ちゃんが叫んだ。

「立花流コンビ奥義！裂倉腐武器！」

ドスッ！

見事な峰打ちが首に命中して男は倒れた。

ただ桜の花びらを撒く担当の麗華ちゃんは少し恥ずかしそうである…… たぶん麗華ちゃんに無理矢理やらされたんだな。

しかも相当リハーサルをしたのだろう、桜の花びらと麗華ちゃんが素晴らしいくらいマッチしている。

周りからは拍手。

俺は何も役に立たなかった。

刀を鞘に収めた麗華ちゃんに駆け寄る。

「やっぱり麗華ちゃん、殺さないって信じてたよ」

「チィ……間違えましたわ」

……はい？聞き間違えかな？聞き間違えであってほしいな……。

「ありがとゝ麗華！さっすがやなゝ！」

麗華ちゃんは男からサイフを取り上げて晶子ちゃんに渡した。

「安いよ安いよゝ！」

遠くから聞き慣れた声、俺は声の聞こえる方を見た。

なんでも売る運び屋の東野さんが普通に出店で本物の車を売ってい

た。

「あ！完助さん見ていってくださいよ……安いですよ！」

ツツコミを入れたら負けだ……無視だ、久しぶりの登場だが悪いな東野さん。

祭りで車を売る神経がわからん。

さすがに一般のお父さん方も引くわ……。

一獲千金を狙ったのだろうが明らかに失敗である、つか車を用意するのに金使って逆に自滅している可能性が高いぞ……。

気付け！東野さん！

東野さんをスルーして、射的をしていた光太郎さんと息子二人に合流した。

恥芽の顔には包帯が巻き付かれていた、愛子さんに治療してもらったのだろうがなんとも痛々しい。

そして花火の休憩も終わる頃だと思いい川沿いへ移動した。

川沿いには花火を見ようと人が集まっていた。

「うわあ、これじゃ身動きがとられへんやん」

晶子ちゃんがムツとした顔で言った。

確かに人が多すぎる。

「これじゃ宴会場まで戻れないな」

「心配いりませんわ完助、斬り倒していけばいいだけの話……」

もちろん瞬時に絵理華ちゃんと晶子ちゃんが殺戮マシーンを押さえる。

「コラッ！離しなさい！」

野放しにしたら惨劇を見ることになるから却下。

……ドーン！

再び花火が打ち上がり、周りから歓声があがる。

そして動き回る人混みに流されて麗華ちゃん達と離れ離れになって

しまった。

「うがああ！」

人とぶつかって拳使郎が転けそうになった。

……ガシッ！

いつの間にか起きていた終羽里が拳使郎の手をつかんだ。

「……大丈夫？」

「お……おうよ！」

トマトのように顔を赤くして声が裏返る拳使郎。

マンガで例えるなら拳使郎の周りには

「ドキーン」

の描き文字が出ているだろう。

そして俺は見た！

妹の底知れぬパワーを……！

拳使郎を起こそうと引つ張った妹。

……ドキューン！

飛ぶ拳使郎！

「ああああああ！」

……ボチャーン！

数メートル飛んで頭から川に落ちた。

「拳使郎！」

「兄ちゃん！」

慌てて追いかける光太郎さんと恥芽。

たぶん妹には悪気はない、普通に起こそうとただけなのだろう。

「終羽里……手加減と言う言葉を知っているか？」

「私には不要な言葉よ兄さん……」

母さん、立派過ぎる女の子を産んでくれましたね。

「完助殿、終羽里殿」
間様と結衣さんだ。

「他の者はどうしたのじゃ？」

「たぶん宴会場に帰れたと思うんすけど」
ふん、とした顔で間様は空を見上げた。

「夏が終わるの……」

「そうですね、結局この夏休みの間に両親に会ってないな」

「いいのか？」

「ハハッ、いつの間にか両親もアパート暮らし認めてる感じっすよ」
……心配もしてないと思います」

「そうか」

「また来年も皆で花火大会に来たいですね」
「……うむ」

花火も綺麗だが月もスゴく綺麗だった。

13話「幽霊」

残暑キビしい中、今日から俺も妹も学校が始まる。
あつという間に夏休みが終わってしまった……。

夏休みを迎えるなりカレー食って死にかけたり、鳥人間になりかけたり、クーラー爆弾で吹っ飛んだり、警察に厄介になったり……。ろくなことなかったけど、それ以外は至って平凡ではあった。たまに大学へ行かないといけなかったし、そー考えると夏休みがあつという間に終わったのも納得かもしれないな。

昼になって俺は大学の門の前でバスを待つ。

今日の授業は午前中で終わり、別に学校に残る必要もない。

早く家に帰って寝るとするかな。

……バスが到着し、窓際の席に座る。

日差しを直接浴びて体が火照り、ポカポカと気持ちよくなってきた。
「ううゝ眠たい……見るんじやなかったかな、夜中のバラエティ番組」

アパート近くのバス停から歩いて3分くらいで

「クタビレ荘」

が視界に入る。

「よし……もう少しだ」

2階へと階段を上がりながらポケットから部屋の鍵を探す。

「あ！」

すっかりポケットから鍵を落としてしまった。
拾った後に部屋の前を見ると、先程まで居なかったはずの白い着物を着た十代半ばくらいの女の子が立っていた。

明らかに俺を見ている。

髪に綺麗な花を付けているのが印象的だ……そして体が透けているのも印象的。

うん？あはは……透けてるぞ。

もしかして幽霊かよ。

俺は額から出る汗を手で拭きながら彼女から目を逸らす。

「私が見えてますね？」

「いえ！全然見えてません……」

しまったー！！

返事してしまった！

俺はチラッとだけ彼女を見た。

彼女はウルウルと涙を流していた。

「はうう、待ち望んでいました……私の姿が見える人、しかも声まで聞こえるなんて」

うっ！正真正銘の幽霊だ！

浮いてるし！

しかもアパートに住み着いているとなるとテレビの心霊番組とかでたまに聞く地縛霊とかいうヤツかな？

……でもメチャクチャ可愛い！おろおろした癒し系、そして泣いてる姿は愛くるしい……。

「幽霊？」

「はい！私は幽霊です！」

「なんで昼間から幽霊が？」

「えっ！？幽霊って夜に出るものなんですか！？」

「たぶん……夜によく出るって聞くけど」

「そんなあ」

「…………邪魔」

学校から帰ってきた終羽里が幽霊少女に迷いのない見事な蹴り！

「ふやあああ！」

…………ドキューン！

幽霊少女は上空へ飛んでいき、しばらくして帰ってきた。

「な…………何するんですか！ヒドいですよー！」

「邪魔だから蹴っただけよ…………」

やはり妹はスゴい。

幽霊を見ても驚かないし蹴ることもできる。

「の…………呪っちゃいますよ！」

「…………消すわよ」

「と…………取り憑いちゃいますよ！」

「…………地獄へ落とすわよ」

「こ…………殺しちゃいますよー！」

「…………内臓抜き出して刻んで鍋にぶち込んで弱火でジックリとグツグツ煮込んでからタレに漬けて食うわよ」

「はわわわ…………ごめんなさい！」

幽霊少女惨敗！

人間に口で負けた。

幽霊界もビックリだな。

「外だとなんだし、家に入ってよ」

とりあえず俺が先導して部屋に入れた。

動揺してるのか、俺は冷蔵庫からお茶を取り出しコップに入れて幽霊少女の前の床に置いた。

「の……飲む？」

「はうう……気持ちだけ頂きます」

彼女は泣きながら言った。

「とりあえず名前とか、何故ココにいるのとか聞こうかな？」

「はい……私は寿（しゅふき）と申します、何百年も昔にココにあった橋から滑り落ちて川で溺れて死んじやいました」

……ドジ子！

「幽霊になっていろんな場所に行ってから1年前にココに来ました」

「いろんな場所って？」

「えへへ……生きてた時に夢みてた日本全土ぶらり旅です」

……ちゃっかり子！

「外国には行かなかったの？」

照れながら寿さんは言った。

「行こうと思っただんですけど、私……英語が話せなくて」

まず見えねえよ！

「旅を終えて私が死んだココを住み処にしようと思って住民の方々に挨拶してまわったんですけど皆さん私を蔑ろにして……」

「みんなは無視なんかしてないと思うよ、見えてないだけだよ」

「いいえ！絶対に見えてます！何度も目が合ってるし、102号室に居る獰猛そうな女性だって明らかに私を使って刀の試し斬りを……」

……」

麗華ちゃん……幽霊相手に何やってんのさ？

……ガチャ。

「完助殿！かき氷を持ってきたぞ……まだ暑いからな、一緒に食べよう」

間様と結衣さんがノックもしないで部屋に入ってきた。

「……ん？寿殿も居たのか、供えるから一緒に食おう」

俺と寿さんは口を開けたまま固まった。

「間様……寿さんが見えるんですか？」

「うむ……アパートの皆が見えてるし声も聞こえているが」

全員！？

なんて存在感なんだ寿さん。

もはや幽霊と言えるのか？

「なんで無視してたんスか？」

「たぶん……面白くなさそうだったからかな？」

……ガーン！

寿さんショック！

本当に1年間喋ってもらえなかったらしい、しかも理由がボケキヤラじゃなさそうだから……。

「はううゝ死にたい……」

君は死んでるよ……寿さん。

こーして幽霊少女の寿さんがアパートの住民に加わった。
俺は

「今度から無視されないように頑張って」
と励ますことしかできなかった。

プロフィール

アパートの屋根などに住む

寿さん【本名〓（じゅんぎ・すけみ）寿千鶴】

年齢……享年15歳

幽霊。ドジ。アパートのマスコットキャラの座を狙う癒し系。

14話「黒い悪魔」

秋……読書、食欲、いろいろある。
そして俺の目の前にはアイツがいる。

「終羽里……ドコへ行くんだ？」

「……学校の友達と遊びに行くの」

「その前に……お願いが」

「……怖いのがキブリ？」

「ぐはああ！その名前を言うなバカ！コイツは悪魔だ！黒い悪魔！」
動けない、今朝アレを台所で見てから俺は動けない！

怖い……昔からアレだけは苦手なんだ俺。

せつかくの日曜日なのに朝から気分が悪いぜ。

「ほら……コイツの魂抜くなり魔法をかけるなりして殺してくれ終羽里ちゃん」

「……かわいそうだから無理」

そー言って遊びに出かける妹。

こんな時だけ普通の小学生になるな！

……カサカサ。

「うおっ！冷蔵庫の下に入りやがった！」

助けを呼びに外へ出たいが、素早いアイツが俺の足元まで来るかと思つと怖くて玄関まで行けない……。

……ガチャ。

「失礼すル！」

チャールズ！鈴木！よく来た！

「完助ボーイ、任務のためにトイレットペーパーを分けてもらえる

力？」

何故にトイレットペーパーが必要なのは今は問うまい！

「はい！いくらでもあげますからコイツなんとかしてください！」
地面を這う悪魔に気づくチャールズ。

「うむ……小さくて素早い敵だな、明日まで待つてくれれば最新型
ライフル銃が手に入る」

待てるかつちゅーの！

別にライフルじゃなくてもいいじゃないか！

「では失礼すル」

「頑張ってください」

ちやかリトイレットペーパーを手にして立ち去るチャールズと鈴木。
クソッ！いつの間に……仕事できるタイプだなアイツら。
そして二人も絶対苦手なんだアレが。

このままじゃ埒が明かない……なんとかしなくては。

するとドアの向こうから双子姉妹の声が微かに聞こえた。

「うおおお！麗華ちゃん！絵理華ちゃん！」

俺は精一杯に叫んだ。

……ガチャ。

「うるさいですわ完助！」

「どうしたんですか完助さん？」

俺は沈黙のまま床を指差した。

「あら……悪いわね完助、私も絵理華も気味悪い系はアウトですわ」

「そこをなんとか……その刀でズバツと」

「NO・50『衣莉表山音虎（いりおもてやまねこ）』はゴキブリを
斬ることができない刀ですよ」

そんな都合のいい刀があるかよ！

「ゴキブリごとき己の力だけでなんとかしなさい！行くわよ絵理華
！」

「ごめんなさい完助さん」

……バタン！

ごとき？アレごとき？

己の力で？

……半端じゃない生命力のアレと戦えというのか！

……カサカサ。

「くっ……やってやろうじゃねーか」

俺は足元にあった新聞紙を棒のように丸めて構えた。

【俺の体力…… 1000】

【アレの生命力…… 1000】

俺の頭の中でゴングが鳴った。

……カ〜ン！

「先手必勝じゃ〜！うりゃあああ！」

台所付近を這っていたアレ目掛けて新聞紙を叩きつけた。

……バシッ！

飛ぶアレ！

「ああああ！」

アレは俺の耳元を掠めて窓際に移動。

「はあああ……野郎おお！」

どーやらアレも戦闘態勢、やる気満々らしい。

「乱れ打ちじゃ〜！」

……バシッ！バシッ！バシッ！

「さらに！見様見真似……立花流奥義！怒羅魂・土裸射舞！」

……バシ〜ン！

「ひやははは！ざまーみやがれ！」

人間は興奮すると性格が変わります。

……カサカサ。

「何っ！全て避けたのか！」

コイツ戦闘慣れしてやがる……手強い！

【俺の体力…… 650】

【アレの生命力…… 700】

なんか作者好みのバトルになってきやがったぜ。

アレの戦闘力も飛躍的すぎる。

「長期戦はマズい……くらえバケモノ！オラアア！」

……バシッ！

「アタタタタタタ！」

……バシッバシッバシッバシッ！！

俺の後ろに回り込んだアレは再び俺目掛けて飛んだ！

空中で叩き落とす俺！

「アチヨー！」

【俺の体力…… 200】

【アレの生命力…… 200】

「ゼエ……ゼエ……そろそろケリをつけようぜ」

ドラゴ○ボールの○空とベ○ータ並の戦いだっただが○ジータは決して悟○には勝てない！

そして俺が○空……キサマがベジ○ーだ！

俺は冷蔵庫から栄養ドリンクを取り出し飲み干した。

「プハァー！」

【俺の体力…… 500】

「卑怯者だと？フン……勝ちやいいんだよ卑怯でもな」
人間は追い込まれると卑怯者になります。

聞こえないハズのアレの声も聞こえたりします。

「俺は残りの体力を使ってキサマを倒すぞ！黒い悪魔！」

覚悟を決めたのかアレはロケットのように飛んできた！

とっさに俺は窓を開けて新聞紙をフルスイング！

アレと一緒に新聞紙も窓の外へ飛ばした。

……ドキューン！

「地球外まで飛んでいきやがれ！」

【俺の体力……限りなく0】

【アレの生命力……0】

「はぁ……勝った」

戦いは終わった。

完全勝利だ！

「ふう〜、シャワーを浴びて汗を流すとするかな」

俺はタオル片手に風呂場へ向かう。

……カサカサ。

再び頭の中でゴングが鳴った。

15話「キャッチボール」

平日の夕方。

大学から帰宅した俺は終羽里に夕飯の買い物を頼んだ。

俺は洗濯物を干して、前に間様から借りた小説を返しに玄関を出ると庭で拳使郎と恥芽がキャッチボールをしていた。

「恥芽！カーブいくぞ！」

「うん」

……シュ！

……パン！

明らかにストレートだな。

恥芽は素手でボールをキャッチしたが、硬球ボールなのに痛くないのかな？

「次はフォークだ！」

……シュ！

……パン！

ストレートだな。

アイツは変化球を投げる気がないのか？

「ストレートだ！」

……シュ！

……クイツ！

……パン！

ものすごい勢いでボールがカーブした。

カーブがソレだよ拳使郎！

「おゝい！完助ゝ！お前も一緒にやろうぜ！」

「間様の所へ行かないといけないんだ……悪いな」

「その必要はないぞ完助殿」

間様の声が1階から聞こえた。

下を見ると間様と結衣さんが庭の花壇に水を与えていた。

俺は階段を降りて間様のもとへ向かう。

「あの……借りてた小説を返しにきました」
本を間様に渡す。

「うむ……他にも読みたい小説があればいつでも言ってくれ」
そー言つて間様は結衣さんに本を渡した。

「よし完助！3人でキャッチボールやるぞ！」

「仕方ない……少し付き合うか」

そう言つて俺は拳使郎と恥芽の頭を撫でた。

「よし来い！」

俺が両手を上げて合図した。

「くられ完助！」

……シュ！

意外に遅いぞ、体を鍛えまくつてる一家でも子供は子供だな。

……パン！

……メキッ！！

「がはっ！重っ！」

……ドサッ！

俺はボールの重さに耐えきれず、その場に倒れた。ボールから手を離しても地面を転がらずに、少しだけめり込んでいる。

「い……いったい何キロあるんだよ！このボール！」

「えーと？恥芽、何キロだっけ？」

「200キロだよ兄ちゃん」

少しでも普通の子供と思った俺が情けない。

どーやって作られたんだ？このボール？

「情けないぞ完助！」

「うるせー！俺は一般人代表だ！テメエら人間兵器と一緒にするな！」

拳使郎は倒れている俺に近寄り、ボールをヒョイと片手で拾う。

「じゃあ間の姉ちゃんとキャッチボールするか」

拳使郎は間様に目掛けてボールを投げた。

「……ん？」

間様がボールに気付いた時にはすでに距離は約3メートル。

しかしボールは間様には当たらずに結衣さんが片手で軽く止めた。

「貴様〜！」

結衣さんは拳使郎を睨んで言った。

そりゃ怒るわな……。

「なんだよスーツ女？」

「間様に向かつてボールを投げたうえに、間の姉ちゃん、など気安く呼びやがって……覚悟できてんだろうなガキ」

両手をポキポキ鳴らして結衣さんは戦闘モード。

「もうよい結衣、すぐに気付かなかった私も悪いのだ」

「……甘すぎます間様」

なんか重い空気になってきたな。

「フン！ 謝んねーぞ俺は」

謝った方が身のためだと思いがな。

ようやく立ち上がる俺の背中に感じる寒気。

「わっ！」

幽霊の寿さんの透けた両手が俺の体を貫通して胸から出てきた。後ろから脅かそうとしたのだろうが実に妙な光景である。

「何してるんですか完助さん？」

「キャッチボールだよ」

「きゅっちぼーる?」

めんどくさいが俺は寿さんにキャッチボールを教えた。

「はうう、面白そうですね、きゃっちぼーる、拳使郎さん、私も
まぜてください」

「おう！いくぞ幽霊！」

シュ
ユ
！

もちろんボールは寿さんの体を貫通して地面に落ちた。

しばらく庭にいたメンバーは沈黙になる。

結衣さんはハア〜と溜め息をついた。

どーやら拳使郎を怒る気も失せたようだ。

寿さんの目には涙が浮かんでいる。

「はっす」

哀れだ……。

「き……気にしない気にしない！ 身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれです！」

アンタ死んでるだろーが！

「……ただいま」

いつの間にか隣に立っていた終羽里。

「お……おう、お帰り終羽里」

キラーンと目を光らした拳使郎。

好きな子には余計イジメたくなる実に判りやすい性格の拳使郎は終羽里に目掛けてボールを豪速球で投げた。

「あぶない！終羽里！」

……パシッ！

余裕でキャッチ。

この妹に大して警告など杞憂でした。

「……なに？」

拳使郎を睨む終羽里。

額から大量の汗を流す拳使郎。

……マズい！拳使郎が睨み殺される！

「終羽里！ただのキャッチボールだ！ただの……」

妹を止める俺。

「兄ちゃん謝って！早く！」

拳使郎を止める恥芽。

俺と似たもの同士だな……恥芽。

「いいか終羽里、拳使郎に軽くボールを返せばいいんだ……軽くフワツと」

俺は終羽里の両肩をポンつと叩いて言った。

「ええ……わかったわ、兄さん」

……シュ。

ボールは弧を描いて拳使郎の真上に……。
「ヒヤハハハ！ やっぱり女は弱いぜ！」

軽く投げた終羽里をあざ笑うバカ。

易々とボールをキャッチした拳使郎だが。

……ズズズン！

同時に地中に沈む拳使郎。

「兄ちゃん！」

おそらく終羽里がボールに重力魔法をかけたのだろう。

1時間後……拳使郎は地中から救出された。

16話「アルバイト」

クタビレ荘で暮らす此似手完助19歳。

とんぼ町にある大学に通い、帰りの大学前にあるコンビニに週4回から5回はアルバイトをしている。

夏休みの間はほぼ毎日だった。

今日は1人で店を任せられている……というのも、もう1人のアルバイト定員が原因不明の腹痛で家から出られないらしい。

……最悪だ。

早く代わりのヤツ来い！

つか店長は何処だ！？

……ピロリンピロリン

「いらつしゃいま……」

「やあ完助君！頑張ってるかピヨン？」

ピヨン太と友蔵、そして光太郎さんが来た。

アパートの女性陣ならまだ嬉しいのだが、何故にこの3人なんだ？
すごく嫌な予感がする。

他に客がいらないのが何よりの救いか……。

「あんたらコンビニならアパートの近くにあるじゃないか、わざわざココまで来るなよ」

外には光太郎さんの車がある。

車に乗ってまでココに来た理由はなんだ？

「僕達は野望のために来たピヨン」

「野望？」

すると友蔵と光太郎さんがお酒コーナーからビールやワインを手当

たり次第にカゴに放り込んだ。

「酒？野望ってなんだ？」

「とんぼ町にある全てのコンビニの酒を買い溜めすることだピョン」

迷惑な話だ……そして意味不明。

「お前に会社で働くサラリーマンの1日の安らぎを奪う権利があるのか？」

「飲みたいとき飲んでなにが悪いかピョン？前にも一度やったことがあるピョン」

アルコール中毒で死んでしまえ！

……ドン！

……ドン！

と、レジカウンターに次々とお酒の入ったカゴを置く友蔵と光太郎さん。

「はっはっはっ！真面目に仕事をしとるようで関心したぞ完助君」

「そんなに飲んだら早死にするぞジジイ」

「心配無用！ワシは酒と床では死なんわい！」

床で酒飲んで死ぬタイプだと俺は思う。

「父さん……摘まみも買いますか？」

「そーじゃな、この辺で買っておくか？」

光太郎さんと友蔵は摘まみコーナーへ……。

「なんだ？酒の買い溜めはココで終わりか？」

「そうだピョン、前はアパート付近で今回はとんぼ町……次回は市内にあるコンビニを総なめにするピョン」

たぶんそのへんで規模の大きさに絶えかねてギブアップするだろう。

……ピロリンピロリン

「動くな！コンビ二強盗だ！」

ええ〜！！

自らコンビ二強盗を名乗り出るのも驚きだが、覆面はしてないし銃もナイフも持っていない。

強盗する気あるのかよコイツ。

「コレに金を入れる！」

うわあ〜、小さくて可愛いサイフだな。

……しかしコイツも運が悪いな、よりによってピョン太達がいる時に強盗に入るとは。

たぶんピョン太の召喚魔法で終了だな。

「た……助けてピョン！撃たないでピョン！」

ガタガタ震えながら両手を上げるピョン太。

つか銃持って無いじゃん！

ビビり過ぎだぞウサギ……。

「だあああ！」

叫び声とともに光太郎さんが強盗犯の顔面にドロップキック！

お弁当コーナーに突っ込んで倒れた強盗犯を友蔵が押さえ込んだ。

おお！スゴい！

おもわず俺は拍手をした。

「作戦B成功だピョン！」

テメエは何もしてないだろ！

……ピロリンピロリン

「動くな！……あ？この状況はなんだ？」

ウソッ！本日2度目のコンビ二強盗！

しかもまた覆面とかしてないし！

「くっ……よくわからんが金をよこせ！」

強盗犯2号はレジカウンターの前に立ち俺に言った。

俺はレジから金を取り出す。

「邪魔だ！」

強盗犯2号はレジカウンターの上に置いてある酒の入ったカゴを持ち上げて地面に落とした。

……ガシャーン！

「ピョーーン！」

ピョン太の目は真っ赤に光り、体から黄色いオーラが漂う。

「あれは雷魔法のサンダーオーラ！あまりの恐ろしい魔法故に魔法協会で使用禁止された魔法だ！」

光太郎さんのさりげない解説。

「オーラが魔法ツスカ？」

「いや……オーラを利用して魔法を繰り出すんだ！」

光太郎さんの言うとおり、ピョン太の掌に黄色いオーラが集まりだした。

「よくも僕のお酒を！許さないピョン！」

僕達だろ？

「危ない完助君！光太郎！伏せるんじゃ！」

友蔵に言われて俺と光太郎さんはその場に伏せる。

「サンダーボール!!」

ピョン太が放った丸いサンダーボールは強盗犯2号の心臓部分に命中した。

「うぎゃあああああ!」

強盗犯2号はその場に倒れ意識を無くしたようだ。

……あれ?でも焦げてないぞ?

魔法協会が禁止にするほどの雷魔法なのに威力がない感じだ?

「おいピョン太、ソレ本当に雷か?」

「いや……水だピョン」

「は?」

よく見ると強盗犯2号の服が濡れていた。

「サンダーボールは雷と思わせといて実は水魔法だピョン、あまりのギャップの違いにショックで倒れたんだピョン」

確かに痺れると思ったのに急に心臓部分が冷たくなったらビビるな。

恐ろしい‘雷’魔法だぜ……。

しばらくして強盗犯1号2号は警察に捕まった。

翌日、俺達は新聞の片隅に小さく載った。

17話「告白」

頭が痛い……咳が止まらない。

風邪をひいてしまったようだ。

「……兄さん、安静にしててね」

「わかってるよ」

しかしヒマだな、天井を見つめてるだけなんて……。

……ピンポーン

「……はい」

妹が玄関の戸を開けると拳使郎が立っていた。

なんだか最近一撃家の連中ばかりと関わってるな。

……ん？拳使郎が着ているＴシャツに何か書いてるぞ？

‘才色兼備’

才色兼備とは……才知と美しい顔立ちを共にそなえていること。

えっ！家訓Ｔシャツ！

そんなの作ったのかジジイ！？

拳使郎が才知で美しい顔立ち？

顔はともかく才知は無いだろコイツ。

「お……おい女！は、話があるから表に出ろ！」

相変わらず生意気だな、年の割にはガキみたいな性格だし。

「……外じゃないとダメなの？兄さんを看病しなくちゃならないの」

「いいから表に出ろ！」

「……わかったわ」

終羽里ちゃん置いてかないで……。

俺は外に出た二人を這いながら追いかけた。

戸を半分開けて外を見ると、一撃家の玄関前で二人が向かい合っていた。

「頑張れよ！拳使郎！」

……ん？ジジイの声？

上を見上げると友蔵に光太郎さん、愛子さんに恥芽……一撃家一同が集まっていた。

「なんでいるんだよ？」

「ここなら拳使郎が終羽里君に愛の告白をするシーンが見れるベストアングルなのじゃよ」

「だったらウサギの部屋の玄関前から見るよ！……告白？誰が？」

「兄ちゃんが」

こ・く・は・く！

オイオイ……マジかよ？

「なんで？」

愛子さんが答えた。

「拳ちゃんの口から直接聞いたわけじゃないんだけど、終羽里ちゃんみたいな魅力的で強い女の子が好きなのよ」

俺は再び終羽里と拳使郎に目をやると拳使郎は顔を真っ赤にしてみじもじしている、どーやらマジみたいだ。

終羽里は背中を向けているから顔が見えない。

「父さんアレを……」

「わかつとるわい！」

友蔵は袖から一枚の紙を取り出して拳使郎に見せた。

「独断専行」

独断専行とは……自分だけの判断で思うとおりに実行すること。拳使郎は小さく頷いた。

「何してるんですか？」

今回は屋根から顔をピョコッと出して寿さんが現れた。

「シーー！少し黙ってて千鶴ちゃん」

愛子さんの一言で口を塞ぐ寿さん。

ゆっくりと俺に近づき囁いた。

「あの二人は何してるんですか完助さん？」

「拳使郎が終羽里に愛の告白だよ」

「はわわわ……ドキドキですね」

そして拳使郎が口を開いた。

「お……俺は……だな……おれ……オレ……お」

緊張するにも程があるぞ拳使郎。

拳使郎は何度も深呼吸をして瞳孔を大きく開いて終羽里の両肩に手をのせて叫んだ。

「俺と付き合え！」

「……嫌よ」

あっさり！！

そして拳使郎撃沈！！

一撃家の皆様お口が開きっぱなしでございます。

手に持っていたクラッカーを地面に落とした。

告白が成功すれば祝うつもりだったのだろう。

「な……何故だ？他に好きなヤツでもいるのか？」

拳使郎が終羽里に尋ねた。

「……ええ」

なにっ！いるのか？初耳だぞ！？

「光太郎、愛子さん……終羽里君の好きな相手がわかり次第抹殺しに行くのじゃ」

「御意！」

この家族ムチャクチャだな。

「兄ちゃん可愛そう」

恥芽が心配そうに拳使郎を見つめる。

拳使郎は終羽里の肩を揺すりながら問いだした。

「誰だ？誰なんだ！？」

見物組は一斉に息を飲んだ。

「……私は兄さんが好きなの」

「えええ〜！！」

終羽里を除く全員が叫んだ。

……え？僕ですか？

光太郎さんと愛子さんは抹殺のために一瞬だけ俺を見たが、すぐに見るのを止めた。

プルプルと震えながら拳使郎は聞いた。

「愛してるのか？」

「……愛してるわ」

すると拳使郎は狂うように笑いだした。

「はっはっはっ！馬鹿かよお前は！血のつながった兄と妹が付き合えるわけがないだろうが！」

「……無理ね」

「じゃあ何でだよ？」

「……私が認めるくらい兄さんに相応しい女性が見つかるまで私は兄さんを愛していただけよ」

そして周りは沈黙になった。

「……話が終わったなら失礼するわね」

そう言つて終羽里は201号室に戻ってきた。

「……兄さん、ちゃんと寝てないとダメじゃない」

「は……はい！すいません！」

それから拳使郎は……しばらく部屋に引きこもつたらしい。

部屋の壁には‘意気消沈’と書かれた紙が貼られていたそうだ。

意気消沈とは……気落ちして元気がなくなること。

拳使郎の小さな恋は幕を閉じた。

18話「麗華 VS 結衣」

グッドモーニング！

今日も平和な1日でありますように……と、俺は願いをこめてカーテンを開けた。

……ドン！ドン！

「完助さん大変です！姉さんが……姉さんが！」

願いは虚しく散りそうです。

メガネをかけて201号室の戸を開けると、そこには恵理華ちゃん
が立っていた。

「どーしたんだい恵理華ちゃん？」

「姉さんと結衣さんが今にもケンカを始めそうなんです！」

ははは……助けを求める相手を間違えたね恵理華ちゃん。

あの二人を俺が止めれるわけがないでしょうが！

外に出て庭を見ると麗華ちゃんと結衣さんが向かい合って肩で息をしている。

麗華ちゃんの両手には刀、結衣さんの両手にはクナイが握りしめられていた。

周りには手裏剣やクナイが散らばっている。

すでに戦っていたのか！！

「ケンカ……というより殺し合いの原因は何なのさ？」

「姉さんが自分勝手なんです、チャールズさんと良平さんが海外へ

旅行中の間に101号室に転居させろって間様に頼んだんです」

麗華ちゃん、まだ101号室の座を狙ってたのか。

《戦場の庭》

「しつこいですわ結衣、いつまでも101号室の軍人気取りが部屋を譲らないから頼んだだけでしょ！」

「俺が怒ってるのはそんなことじゃないんだよ麗華、キサマの頼み方に文句があるんだ！」

「軽く脅しに刀を抜いただけよ」

二人の全身の血が沸騰しているかのように湯気が出ている。

「結衣、麗華殿……とりあえず武器を置いて冷静に話し合わんか？」

「申し訳ありません間様、その命令には従えません」

「そーですわ！この猛りを静めるには斬るしか方法はなくってよ」
なんとも愚劣である。

それにしても麗華ちゃんが101号室を狙う理由がわからないな、
1の数字が好きなだけとか？

有り得る……彼女は何より1番になりたいのかもしれない。

俺と恵理華ちゃんは1階に降りて間様のもとへ。

「間様……なんとかならないんスカ？」

「麗華殿の頼みはチャールズ殿の了承がないと無理じゃ」

そりゃそうだ、旅行から帰ってきて部屋が変わってたら暴れて銃を乱射するだろうな。

「二人を見守るしかないのう……」

間様は大きくため息をついて言った。

「今回の刀は自信あるのかよ麗華？」

「NO・23『舞蹴流錠弾』……そしてNO・4『鬼鈴』はバリバ

リの戦闘タイプですわ、この刀で斬られた者は決して天国には逝けないのよ！」

恐ろしい！

……が、その刀を使つた麗華ちゃんも決して天国には逝けない気がする。

「いくわよ結衣！」

「来い！」

……キン！キン！

…ガキン！

二人の動きが速すぎて姿がまったく見えない。

「立花流奥義！香埋太薙！（かまいたち）」

……ドス！

麗華ちゃんが投げた鬼鈴を結衣さんは避けてクタビレ荘の壁に刺さる。

ついに刀を投げるのかよ……。

「忍法！火炎手裏剣！」

……シュシュシュ！

「……くっ！」

ギリギリで手裏剣を避ける麗華ちゃん。

恵理華ちゃんは地面に刺さった燃える手裏剣を消火器で消す。

二人の戦いがヒートアップするなか、終羽里がランドセルを背負い2階から降りてきた。

「……兄さん、そろそろ学校へ行かないと遅刻してしまうわ」

今はそれどころじゃない、学校へ行く前に二人を止めないと町に被害が及びかねん！

「このままじゃヤバいッスよ間様！」

「仕方がない……終羽里殿にまかせよう」

ええー！なんでそくなるの！？

「……私にメリツトが無いわ」

……そう！そうだぞ！

すると間様が袖から1枚の券を取り出した。

「阿修羅商店街にある人気焼肉店の割引券じゃ！」

「……二人供殺していいの？」

ぎゃあああ！

妹がやる気満々になってしまった！

「終羽里！絶対それはダメだ！」

「……心配しないで兄さん、少しでも私のをあげるから」

違う！焼肉のことじゃない！

「死なない程度に手早く頼むぞ終羽里殿」

「……そのつもりよ、遅刻したくないもの」

妹は皆勤賞を狙ってます。

「ま……待て終羽里！この戦いを終結させる方法を思いついたんだ！焼肉は諦めてくれ！」

俺は終羽里の前に立って止めた。

「……いくら兄さんの頼みでもそれは聞けない」

俺は必死になつて妹を止めながら恵理華ちゃんを手招きして耳元で伝えた。

「えっ！？それで姉さんが止まるんですか？」

「君が一番よく知ってることだろ……それしかない！お金は後で俺が払うからさ！」

「……わかりました」

恵理華ちゃんは戦う二人に近づき、今までにないくらい大きな声で叫んだ。

「姉さん！新しい刀買ってあげるからやめて〜！」

……ピタッ！

殺人鬼はおとなしくなった。

そして間様のもとへ歩み寄ると一礼して何もなかったように102号室へと戻っていく。

「一件落着……かな？」

俺は大きくため息をした。

「結衣もこれでよいな」

「はい間様……アイツがお辞儀をするなど滅多にありませんし、許すことにします」

しかし、これで安心はできない……いつまた麗華ちゃんが101号室を狙うかわからないのだ……。

‘戦い’は始まったばかりなのかもしれない……。

ちなみに焼肉店の割引券は終羽里が間様からちゃんともらいましてとさ……

19話「尾行」

俺にはすごく気になることが3つある！

間様の年齢、アパート住民の収入源（特に立花家）

そして東野さんのプライベート。

「すいませ〜ん」

小鳥の囀りとともに東野さんの声がアパート中に響き渡った。

天候は曇、どーやら台風が近づいているようだ。

俺は2階から下を見下ろすと、東野さんは103号室の前に立っていた。

手に持っているのは鳥かご。

「待っていたぞ東野殿」

間様は小鳥の入ったかごを手にして笑みを浮かべている、俺は間様に聞いた。

「なんの鳥ですか？」

「海外から取り寄せたロビンという小鳥での、鳴き声が美しいのじや」

間様は最近小鳥の絵を描くことにハマっているようで、いつも庭に出て空をみている。

ついに購入までしたようだ。

東野さんが間様に礼をして帰ろうとした。

「待ってください東野さん！聞きたいことがあるんです」

「なんですか？」

俺は東野さんに歩み寄り聞いた。

「東野さんってプライベートは何をしてるんですか？」

東野さんは一滴の汗を垂らし空を指差して言った。

「あつ！あんなところにみんな大好きア○パンマンが！」

「なにっ！！」

……シュタタ！

俺が空に目を奪われた隙に東野さんは走ってアパートから離れた。

「しまった！別にア○パンマン好きじゃないのに」

「哀れじゃぞ完助殿」

くっ！ますます知りたい東野さんのプライベート！

俺はすぐに東野さんを追いかけた、間様は笑顔で俺に手を振っている。

サンダルを履いてきてしまった、走りにくいが後悔しても遅い。もう少しで東野さんに手が届きそうになった時、死角になっていた横道から自転車に乗った女性とぶつかった。

……ガシャーン！

「どわっ！」

自転車の前輪に足が挟まり倒れた。

「イタタタッ！」

「いきなりビックリするやんか」

おや？この声は？

「あれ？晶子ちゃん？」

「あゝ！完助君やんか、何してんの？学校は？」

「晶子ちゃんこそ？」

「ウチの学校は創立記念日で今日は休みやねん」

ガムを噛みながら晶子ちゃんは自転車を降り、俺に手を差し伸べてくれた。

俺はその手をつかんで起き上がり、ズボンを叩きながら東野さんを確認する。

まだ追いつける範囲だな。

「……で、何してんの完助君？」

「いやゝそれが」

東野さんの日常生活が知りたくて追いかけてるなんて言えないかも。バカバカしい話だし。

「説明しよう！」

ドコからともなく現れた二人の軍人チャールズと鈴木。

「完助ボーイは東野ボーイのプライベートが知りたくて尾行してるのダ！」

「テメエがなんでソレを！？」

「間嬢に聞いたからサ！」

チャールズは俺に向かってウィンクをした。

気持ち悪いわ！

「ふゝん、オモシロそうやなゝ」

あまり関心することじゃないと思うんだけどね晶子ちゃん。

「オモシロそうやけど、今からたこ焼き買いに行こう思ってたしなゝ」

「いやいや、たこ焼き優先してよ」

俺は晶子ちゃんの肩を軽く叩いて誘導した。

「わかった……ほな、あんまり無理したらアカンで」

心遣いありがとう晶子ちゃん。

自転車に乗って去っていく晶子ちゃんに手を振る俺、敬礼する二人の軍人。

「……で、お前らは付いてくるのか？」

「当然ダ、それが間嬢からの命令なのでナ」

「よろしくツス兄貴！」

間様も東野さんのことを知りたかったのだろうが、何故この二人なんだ？

結衣さんでいいじゃないか？

「まかせ口、尾行は得意ダ」

……だろうな。

とりあえず俺たち3人は東野さんが向かったと思われる方向へ走り出した。

電柱などに隠れながら進むチャールズと鈴木。

周りの歩行者にジロジロ見られて恥ずかしい。

「おいおい、完全に見失ったぜ」

「そんな時は鈴木の鼻が頼りダ」

「了解ですチャールズ軍曹！」

クンクンと辺りを嗅ぎまくる鈴木。

犬かよ！

「あつちです！」

鈴木が指差す方に走り続けること10分。

東野さんが研究所のような家に入るのが見えた、ちゃっかりスゴいぞ鈴木。

「よし、フォーメーションBで突入すル」

なにそれ？

鈴木はピストル、チャールズはショットガンを手に取り東野さんの家らしき扉を蹴破った。

……ドン！

そこまでするか普通！？

二人は家の中へ入っていった、後を追う俺が見たものは機械や様々の商品が散乱している光景だった。

「なんだコレ？なんの店だ？」

そーいえば玄関に

「蒼い空豆」

と書かれた看板があつたような？

一応お店のようだが、なんでも売ってるのかな？

DDT（使用禁止にされている強力な殺虫剤）もあるし、つーか以前我が家に黒い悪魔が出た時にコレ欲しかったな。

……ウイーン

「完助ボーイ！何者かが接近中ダ！」

目を凝らして見てみると東野さんが歩いてきた、しかし様子がおかしいぞ？

まるでロボットみたいな動きだ？

ウイーン……ガチャ！

「東野さん？」

「侵入者ヲ排除シマス」

……ドキューン

手を伸ばした東野さんの指が俺目掛けて飛んできた！

「ミサイル攻撃ダ完助ボーイ！」

「ぎゃああー！」

ドカーン！

「撃て鈴木二等兵！」

「ハッ！チャールズ軍曹！」

ズドドド！

チャールズと鈴木も銃を乱射！

この世にロボットは実在したのか？しかも東野さんがロボットだったなんて……。

東野さんの目からビーム、口から火炎放射！

戦場と化した

「蒼い空豆」

……ポチッ

しばらくして東野さんの攻撃が止んだ。

東野さんの背中にあるスイッチらしきものを押した身長約2……3メートル！の男。

「いやあくすまない、すっかり暴走警備モードにしてしまったよ」「誰？」

そらまとめてんちょう

「私はこの店の店長で空豆店長と言いますが、東野の生みの親ですな」

「や、やっぱり東野さんはロボットなんだ？」

「いかにも！私の自信作ですよ」

尾行して得たような損したような、不思議な気分だ。

「どーやう、任務完了のようだな」

「はい！遂行してやりましたよ軍曹！」

二人の軍人は涙を流して抱き合った。

前代未聞のオチだったな……。

プロフィール

なんでも屋

「蒼い空豆」

空豆店長

年齢…… 42歳

蒼い空豆の店長。東野さんの生みの親。笑顔がステキな巨人。

東野さん

年齢……？

普段は普通の人間として『やりすぎ宅急便』宅配員（空豆店長と二人だけで働いてます）。背中スイッチを押すと空豆店長自慢のロボットになるのだ！

20話「危険な来訪者」

台風が近づいていることもあって今日は激しい雨と風がクタビレ荘を襲っている。

そして夜、事件は起きた。

ゴロゴロ

ドカーン!!

鼓膜をつんざくかのような雷がアパートに落ちた。

「ふにやああああ!」

寿さんの叫び声を聞いてアパート住民全員が傘を差して外へ出た。

「うるさいですわバカ幽霊! 私の眠りを妨げるんじゃないやありません!」
麗華ちゃんの怒鳴り声。

空からフラフラと降ってくる寿さんの体は焦げていた。

「大変だ!」

すぐに俺は階段を降りて寿さんを「受けとめる」

「大丈夫ですか寿さん?」

「はうう……私は眠れないから雨さんとお喋りしてただけなのに、いきなり黒い「ふ」ど」を被った人に雷をどか〜んって」

雨との会話は無理があるな。

それを聞いたチャールズは叫んだ。

「侵入者ダ! 厳戒態勢準備にかか〜!」

すると珍しくチャールズに従うアパート住民。

「みんな急いで〜」

愛子さんが光太郎さんや子供達に指示をだし、家から板や釘……かなづちを持ってきてアパートを囲むようにバリケードを張る。俺も手伝った。

雨が募る中、作業は着々と進む。

チャールズと鈴木はもちろん、一撃家も積極的に板に釘を打っている。

友蔵なんて驚くほど手慣れた手つきである。

麗華ちゃんも渋々、扉に南京錠をかけながらブツブツ言っている、恵理華ちゃんも麗華ちゃんを励ましながら手伝っている。

あれれ？先に南京錠かけたら俺たち家に入れないような……？

バリケードの外では口ザリオ片手にピョン太がセメントを板に塗り付けている。

バリケードを一層強化するためだろう。

「どうか神さま助けてくださいピョン、僕だけ、でも助けてくださいピョン」

そしてピョン太は気付いた、自分だけバリケードの中に入れないことを。

「ぎゃああ！呪われる呪われる！みんな呪われるピョン！」

馬鹿ウサギ。

そーいえば間様と結衣さんの姿が見あたらないな？

「間様と結衣さんを知らないか？」

俺は何故かバリケード作業を手伝わない終羽里に聞いたが、終羽里は首を横に振り口を開いた。

「……兄さん」

「なんだ？」

「……寿さんは普段アパートの屋根に住んでいて、屋根の上で黒いフードの人に襲われたのよね」

「……だな」

「……なら黒いフードの人は既にアパート内に居ることになるわね」

みんなの作業がピタツと止まった。

「がっはっはっ！一本とられたの」

大爆笑の友蔵。

「あんたの一言に乗せられた私がバカでしたわ」

ガン！

とりあえず麗華ちゃんはチャールズの頭をかなづちで叩いた。

俺はもしかと思いハシゴを使って屋根に上る。

屋根の上のわずかな平面に間様と結衣さん、そして黒いフードの人が立っていた。

フードのせいで顔はみえない。

「久しぶりだなフェノクロス、まさかこんな所で管理人をしていたとは思わなかったよ」

声からして男のようだ、そして間様のことをフェノクロスと呼んでいるが何者なんだ？

間様は訝しい顔でフードの男に話しかけた。

「お主……まさかキングか？死んだんじゃなかったのか？」

「地獄の底から戻ってきたと言っておこうか」

キングという男が右手を空に掲げると、結衣さんが間様を濡れないようにして持っていた傘が宙に浮き、そのまま空の彼方へ飛んでいった。

超能力か！？

しかし全然話がみえない？俺は結衣さんに尋ねてみた。

「結衣さん、間様と彼の関係ってなんなんですか？」

「俺も詳しく知らないのだが、昔の間様は世界の平和を守る組織『星の姫』のリーダーだったらしいんだ」

世界の平和？星の姫？間様ってなんだかスゴい人のようだが……本当かな？普通に考えると馬鹿げた話だが。

「じゃあフェノクロスって？」

「たぶん間様のコードネームだろう」

コードネーム！？

俺の想像を遥かに超えているぞ。

「私は組織を辞めたのだが……キング、とりあえず意向を聞こうではないか」

間様はキングに聞いた。

「フツ、無論今は亡き我が同士サジタリアスの敵討ちだ！」

「サジタリアスと戦ったのは私じゃないし、死んでもないぞ」

「ええ〜い黙れ！キサマらと戦って負けたのなら死んだも同然だ！」

二人の会話を聞きながら、俺は再び結衣さんに尋ねた。

「キングって人は間様になにか因縁でもあるんですか？」

「間様の組織をパクって『月の王』という悪の組織を作ったのがキングだが」

「なんか強そうな組織名ですね、死人とかでたんですよね？」

「いや……『星の姫』の圧勝、間様の組織は死人どころかケガ人もでなかったらしい」

めちゃくちゃ弱いぞ『月の王』！

めちゃくちゃ強いぞ『星の姫』！

「これは私とお主の問題じゃからアパートの者には手をださんでくれんかの？」

「愚問だな、俺はキサマから大切な者を全て奪いにきたのだ！」

要するに間様と戦って勝てないから知人だけでもと言う訳ですが、でもアパートの住民は皆さん十分すぎるくらい強いと思いますよ。

呆れたように間様は大きくため息をしてから指をパチンと鳴らす。

するとキングの黒い服の腹の部分に赤い丸模様が浮かんできた。

結衣さんが驚きながら言う。

「あれは修羅！」

修羅？よくわからんが間様の技っぽいぞ？

「キングや、もう私からは逃れられんぞ」

すると間様は結衣さんに聞いた。

「結衣、世界で一番寒い場所は何処かの？」

「私が知る限りでは、おそらくイムサ島かと」

「よし決まりじゃな」

間様はニコツと笑ってキングを指差した。

「刹那！」

キングが宙に浮いた。

どーやら刹那とは相手を浮かす技のようだ。

「キサマ！何をする！？」

キングは宙に浮いたままジタバタと抵抗している。

「夜行虫！」

……シュン！

宙に浮いていたキングは一瞬にして消えてしまった。

「間様、何したんですか？」

「そう驚くな完助殿、ちよつとイムサ島まで飛ばしただけだ」
平然とした顔で間様は言った。

いつの間にか雨もあがり静かな夜になっていた。

今回わかったことと言えば、間様はゲームでいう最強の反則キャラ
ということだな。

ところでこのバリエードどーしよう……。

21話「文化祭」

昨日、恵理華ちゃんから文化祭の招待券をもらった。

親からのわずかな仕送りとコンビニでのバイトだけで食いつないでいる俺と妹にとって、今日の文化祭は少しばかり贅沢を堪能する日である。

「終羽里、今日は遠慮しなくていいからな」
妹はコクリと頷く。

たぶん妹の脳裏には

「文化祭の出店食い荒らし計画」
を練っている最中なのだろう。

立花姉妹が通う

「とんぼヶ丘女子学園」

の校門の前で、俺は妹に千円を渡して言った。

「無くなったら俺をさがせばいいからな」

妹はコクリと頷いて俺に手を振り、出店が並ぶ学園のグラウンドへ歩きだした。

「それにしてもスゴいな」

俺は学園の大きさと設備の良さに驚嘆した、すでに文化祭も始まっていて賑やかだ。

とりあえず俺は立花姉妹をさがすことにした。

「校内をウロウロしてみるか」

俺は靴箱にいる数名の教師と客を避けながら、スリッパに履き替えて校内へ。

2階の渡り廊下で恵理華ちゃんを見つけた。

「やあ恵理華ちゃん、招待してくれてありがとう」

ドスッ！

「うぐっ！」

いきなり恵理華ちゃんは素手で俺のアバラ骨を粉碎した。

俺はその場に膝を折りアバラをおさえた。

「まったく、コレで3人目ですわ」

この喋り方は麗華ちゃん！？

右目に眼帯をしているから恵理華ちゃんだと思ってしまった。

すぐに麗華ちゃんは左目に眼帯を付け変える。

「なにしてるのさ麗華ちゃん？」

「文化祭のような特別なイベントには恵理華に声をかける男性客が多いから、私が文化祭委員のパトロールついでに追い払っているんですよ」

「だからって俺も殴らなくても」

「フン、イヤラしい顔付きだったので……つい」

痛みが薄れてきたので、俺はゆっくりと立ち上がった。

「刀で斬られなかっただけでもマシかな」

「私を戦闘狂みたいに言うんじゃないわ！私には争いの嫌いな普通の女子高生ですわ」

うそつけ！

この前、結衣さんと終羽里と三つ巴の戦いになりそうになっただけに。(18話参照)

「ややや？完助君やん！」

ガバッ！

後ろから晶子ちゃんが抱きついてきた。

「あら？晶子、ライブはどうしましたの？」

麗華ちゃんが聞いた。

「ウチのグループ欠席者が多くて中止やねん」

どーやら晶子ちゃんは今回の文化祭でバンドを組んでライブをする予定だったらしい。

「残念だったね晶子ちゃん」

「ウチの学年最後の文化祭やってんけどな、しゃーないしゃーない」
無理しているようにも思えたが、晶子ちゃんはいつもの明るい表情になった。

麗華ちゃんから恵理華ちゃんが喫茶店をやっていると聞いて、3人で行くことにした。

廊下には

「あなたの未来がわかる占い屋」

「歌が好きになるカラオケ塾！」

など様々なチラシが貼られている。

至って普通の文化祭、学園に来る客の数も増える一方だ。

恵理華ちゃんが喫茶店……

もしかして流行のメイド喫茶か！？

恵理華ちゃんがメイドか！？

期待を胸に

「喫茶教室『斬』」

の扉を開けた。

たぶんネーミングは麗華ちゃんだろう。

「いらっしやいませ！」

店員の生徒は皆、学園の制服。

もちろん恵理華ちゃんも普通の制服で、レジ担当だった。

恵理華ちゃんのメイド姿……夢い夢だったな。

「来てくれてありがとうございます完助さん」

恵理華ちゃんは俺に向かってお辞儀した。

「こちらこそ誘ってくれてありがとう」

俺達はイスに座り、俺はコーヒーを注文、晶子ちゃんというと恵理華ちゃんのソワソワした顔に気づいて聞いた。

「どないしたん恵理華？」

「そ、それが」

恵理華ちゃんは俯きだした。

「私、昼から体育館で『とんぼヶ丘女子学園の美少女コンテスト』に出るんですけど……」

「ちょっと！私は聞いてないですわよ恵理華！」

勢いよく席を立った麗華ちゃんを晶子ちゃんが押さえた。

「断りきれなくて……」

確かに恵理華ちゃん性格上では無理だな。

「それでコンテストに出るには体操着がいるんだけど、今朝は教室にあった私の体操着が無くて」

何っ！！

恵理華ちゃんのブルマ……いや、体操着を盗むなんて！
どこのどいつだ！？

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

麗華ちゃんは念仏のように連呼した。
その手には刀が握りしめられている。

しかも目にも止まらぬ速さで抜刀！

「フツフツ、NO.87『朱刺八参摩（あかしやさんま）文化祭の日には鞘から出せない伝説の名刀で恵理華の体操着を盗んだ犯人を解体してやりますわ」

相変わらず意味わからん刀だな。

「ね、姉さん……まだ盗まれたわけじゃ」

「黙りなさい！」

麗華ちゃんの体から久々に夥しいオーラが溢れ出た。

こりゃ文化祭に来た客を全員殺しかねんな。

シュタタタ！

走り出した麗華ちゃんを二人は追いかけた。

俺はというと、麗華ちゃんを追いかけずに終羽里のもとへ。

「終羽里、大変だ！」

終羽里は文化祭の売店に売っている、ありとあらゆる食べ物を抱えていた。

こつちも大変だ！！

つか千円で買える量じゃねーぞオイ！

「……どーしたの兄さん？」

「え、恵理華ちゃんの体操着が盗まれたんだ！」

「……それで？」

「お前の力で鼻の利くヤツを召喚してくれ、恵理華ちゃんの体操着

の匂いを追えるかもしれん！」

「……鼻が大きいヤツでもいいの？」

「なんでもいいから頼む！」

「……わかったわ」

妹に頼んで一安心かと思いきや、恵理華ちゃんが走って来た。

「か、完助さん！ごめんなさい、コンテストのために体育館の倉庫に体操着を入れてたの忘れてました！」

何っ！！

「ス、ストップ終羽里！召喚中止だ！」

「……もう遅いわ兄さん」

バサッバサッバサッ！

ズシーン！！

学園の屋上に緑色のドラゴンが舞い降りた。

鼻どころか全てが大きいヤツを召喚した終羽里に反省の色なし。

とんばヶ丘女子学園は美しく崩壊した。

22話「TVゲーム」

窓からは灰色の雲が見える。

今日も、また雨が降るらしい。

最近は雨が続いている、妹も俺も今日は外に出ないことにした。

ガチャ

「……兄さん、東野さんから小包が届いたわ」

「東野さんから？本人が持ってきたんじゃないのか？」

俺は終羽里から小包を受け取り開けてみた。

中にはTVゲームのソフトとゲーム機本体が入っていた。

普段ゲームをしない俺にとって、ゲーム機本体まで送ってもらうのは嬉しいことなのだが……怪しい。

小包の中から手紙も発見した、『空豆店長と一緒に作ったゲームです、妹さんと楽しんでプレイしてください』と書かれていた……ますます怪しい。

「やってみるか終羽里？」

「……別にいいけど、ゲームは苦手かも」

俺はソフトをセットして本体を起動させた。

『完助の冒険（体験版）』

あきらかに俺専用ゲームだな……

しかも何故に体験版？

ゲームのジャンルはRPG
ロールプレイングゲーム

どうやら二人で世界を救うために魔王を倒す冒険ゲームらしい。

有り勝ちながら、これがまたハマるんだよな。

最初にキャラクターの名前入力画面になった。

慣れない手つきでコントローラーを操り、俺は

「カンスケ」

妹は

「オワリ」

にした。

次にクラスを決める、俺は平均的に強い剣士、妹は攻撃力と防御力がない代わりに魔力が高い魔術師に決まった。

決定ボタンを押してゲームスタート。

ピロリロリロリン

『では頼んだぞ！勇気ある者カンスケ、そしてオワリ！』

王の命令により魔王城へ向かう。

スタート地点である街を出て森へ向かうらしい。

その前に俺はメニュー画面を開いてステータスを見ることにした。

【カンスケ】

クラス・剣士

レベル・1

体力・10

攻撃力・8

防御力・7

すばやさ・5

魔力・0

武器・戦士の剣

【オワリ】

クラス・魔術師

レベル・計測不能

体力・計測不能

攻撃力・計測不能

防御力・計測不能

すばやさ・計測不能

魔力・計測不能

武器・ありとあらゆる武器

待て待て待てゝい！

ふざけてるのか！オワリのステータス！

計測不能……俺は強すぎて計測ができないと解釈した。

冒険の始まりから俺はバケモノと旅をするのか！？

っ！か魔王と旅をする方がマシだ！

武器もなんでも持つていやがる！

俺と比較するのが恥ずかしいわ！

このステータスを見ても終羽里の表情は変わらない、冷静な顔で画面を見つめている。

とりあえず俺はキャラクターを操り、森の中へ入った。

RPGの定番であるモンスターが‘オワリ’から逃げる。

気迫か？

モンスターの気持ち痛いほどわかるぞ、オワリに近づく!! 死! ……
…みたいな。

しかし、イノシシのようなモンスターが1匹、俺のキャラクターに向かつて突進してきた。

ドシーン!

「がはっ!」

カンスケがダメージを受けると、プレイヤーの俺にもダメージが!

まさか!

‘体験版’なのか!?

痛みが伝わるなんて、東野さんと空豆店長め……世界中のゲーム業界もビックリするような物を作りやがって。

しかし、それならオワリのステータスにも納得がいく、プレイヤーが終羽里だからな。

くっ腹が痛い! もう1発ダメージを受けたらヤバいか?

ゴゴゴゴ

ジュワーン

でもご安心あれ、ピョン太を遥かに超えるオワリの魔法詠唱スピード。

ドカーン!

超高等魔法でモンスターどころか森を消滅させた。

俺は笑うしかできなかった。

カンスケとオワリは一直線で魔王城へ……。

度々モンスターが現れるが、すべてオワリにまかせてしまう。

「……めんどくさい」

と言った終羽里、するとゲームの中のモンスターがバタバタと倒れた。

でた！！

シメフクロウの魂を抜く能力！

終羽里の手に掛ければゲームのモンスターの魂も抜けるようだ。

なんやかんやで魔王との対決、プレイ時間はたったの1時間……全国のゲームファンに怒られそうだな、武器もアイテムもセーブポイントもストーリーのイベントも全て無視。
結局、カンスケのレベルも1のままである。
なんか情けない。

「いよいよだな、ドキドキするな終羽里」

「……そう？」

すると、テレビの画面が消えた。

ゲーム機が変形していく。

ウィーン

ウィーン

ガチャーン！

ゲーム機は、チャールズが喜びそうなマシンガンなどを搭載したロボットになった。

「うおおっ！なんじゃこりゃー！」

どうやらコレが魔王ラスボスのようだ、要するに空豆店長は新しいロボットを俺に自慢したかっただけなのだろう。

俺は慌ててゲーム機のコンセントを抜いた。
しかしロボットは動いている。

「コンセントを抜いても無駄なのか？」

ロボットは俺に狙いを定めて右ストレートパンチ！

パシッ！

ロボットのパンチを止める終羽里。

「……兄さんに手を出さないで」

助かったぞ妹よ！

ロボットは透かさずマシンガンを終羽里に向ける。

しかし、弾が発射される前に終羽里のデコピンがロボットに炸裂。

ロボットはバラバラになった。

その後、ゲーム機ロボットを粗大ゴミに出したことは言うまでもない。
ますますゲームに縁が無くなったな。

23話「運動会」

翻弄されれば日本一かもしれない男！

此似手完助！

最近、妹に振り回されている俺に試練がやってきた。

妹からの突然の報告。

「……兄さん、明日学校で‘運動会’があるの」

う・ん・ど・う・か・い

普通は楽しい運動会、しかし終羽里が参加すれば何人の死人が出るのか想像がつかん！

「よし！明日は俺が監視……じゃなくて応援に行くからな！」

「……無理しないで、明日は大学でしょ？」

「いや！休んでも行かしていただきます！」

「……？」

《運動会当日》

冷静になって考えてみれば、去年も一昨年も運動会は平和に終わったんだ。

だったら俺、心配して来なくてよかったかも……。

しかし、妹と一緒にクタビレ荘に住み始めてから暴走してるからな…… 変な方向に。

「ふひゃー！ いっぱい人がいますね完助さん！ すごいです」
そして何故かいる寿さん。

よっぽどヒマだったのだろう。

「他の人には見えていないとはいえ、ウロチヨロしないでくださいよ寿さん」

「はあーい！」

本当にわかっているのだろうか？

「ところで完助さん」

「なんスか？」

「運動会って、どーいった戦ですか？」

この人なにもかもわかって無いじゃん！

説明するのもメンドクサイ。

先に会場に来ているはずの妹を探していると、俺の目の前にもう一つ試験が現れた。

「おおー完助君！ 君も来てたのか！？」

ジジイ!?

嘘だろ……何故に一撃家一同がココに?

も、もしかしたら……もしかして!

愛子さんの後ろでコソコソ隠れている恥芽は体操着を着ていた。
クタビレ荘に居て初めて知った……恥芽って終羽里と同じ学校だったのか!

「恥芽!がんばるんだぞ!」

「うん!」

光太郎さんが恥芽に気合いをいれる。

愛子さんはキョロキョロしながら言った。

「完助君も終羽里ちゃんの応援に来たのね、それで本人は?」

「さつきから寿さんと探してるんですけど、どこにいるのか」

……ん?

拳使郎もいるじゃないか、アイツ学校どーしたんだ?

まあ俺もだけど……つかドコを見てるんだアイツ?

……まさか。

拳使郎の視線の先には何故か赤いジャージを着た終羽里の姿があった。

残念だったな拳使郎、終羽里の体操着姿が見れなくて。

つてか終羽里のこと諦めてない感じだな。

ジャージを着ている終羽里を教師も生徒もツツコまない。

むしろ馴染んでる。

俺は終羽里のもとへ駆け寄った。

「捜したぞ終羽里、体操着姿の女の子ばかり捜していたから気づかなかった、何故にジャージなんだよ」

「……なんとなく作者のノリよ、気にしないで」

とにかく運動会は幕を開けた。

競技は至って普通に進行していき、一撃家も、大人しく、観賞。

光太郎さんは恥芽をビデオカメラに録画する。

感心感心、普通の家族だぞ。

寿さんの興奮も治まらない。

朝早くにシートの場所取りをしていない俺は、運動場の隅の方で座って競技を見ていた。

プログラムを見ると、四年生の恥芽が出る競技は『50メートル走』と『大玉転がし』で六年生の終羽里は『組立体操』と『綱引き』。

終羽里は団体競技しか出ないようだが、注意するべきは綱引きかな？
ヘタすりゃ終羽里だけで勝ってしまう。

妹が綱を引っ張って飛んでいく小学生が目に見えなくなる。

それにしても妙な気分だ、アツサリしていて怪しい。

俺は立ち上がり、一撃家のもとへ向かった。

そこで俺は見た！

競技は四年生の50メートル走、恥芽が走り出した瞬間に友蔵は高速で指を動かしている。

その手には小石が大量にあった。

指弾か！？

マシンガンのように飛ぶ小石が、走る生徒の足に当たり次々と転んでいく。

恥芽は楽々と1位になった。

ズルい……。

「おいジジイ、たかが運動会でナンセンスなことしてんじゃねえよ」「バカモノ！たかが運動会、されど、運動会じゃ……1年に1度の晴れ舞台！フッフッフ、久々に血湧き肉踊るわい」

ジジイが興奮してどーすんだよ。

《昼》

親たちが自慢の弁当を披露するなか、俺と妹は愛子さんに呼ばれて一撃家とともに昼食にする。

「しつかり食えよ恥芽」

そう言つて光太郎さんは弁当箱を開ける。

肉！肉！肉！

肉しか入っていない一撃家の弁当箱。

栄養が片寄り過ぎだぞ。

「お父様がメニューを肉料理だけにしろって、しつこくて……」困った顔の愛子さん。

そんななか肉料理を頼張る拳使郎と恥芽。

残念ながら俺が作った弁当は野菜もちゃんと入っている普通の弁当だ。

終羽里は一撃家の肉料理を少し気にしながら俺の弁当を完食した。

《午後》

終羽里は超手加減して綱引きを終える。

ふう、どうやら目立った問題は起こらなかったようで安心したな。

「……じゃあ兄さん、がんばって」

「はい？」

まだ何かあるのか？

俺は再びプログラムに目をとおした。

『PTA玉入れ競技』

マジかよ、最後になってピンチだ。

「オヤジ！ オフクロ！ これで勝てば優勝だぞ！」
拳使郎が叫ぶ。

よりによって恥芽が紅組で終羽里が白組とは……。

終羽里は意外と負けず嫌いだからな。

パーン！

ピストルの音とともに保護者が一斉に玉を投げ始める。

白組の方が若干多く玉が入っているようだ。

シュシュ……ドス！

痛っ！ イタタタ！

なんだ？赤い玉が大量に俺目掛けて飛んできた。
「がっはっはっ！いいぞ！光太郎！愛子さん！」
友蔵の声で俺は気づいた、一撃夫婦の襲撃だ。

くそっ！このままじゃ負ける。

シュシュ！

うわっ！また飛んできた！

しかし、赤い玉は俺には届かずに何かに弾かれて地面に落ちる。
よく見ると周りには小石だらけ……また指弾か！？

指弾を撃っていたのは終羽里だった。

ナイスだ終羽里！

妹のサポートもあつて白組が見事に優勝。
一撃家は大人しく帰っていった。

《次の日》

アパートに一撃家の姿が見当たらなかった。

「間様、一撃家の人達は何処へ行つたんスか？」

「……ん、修行のために山籠もりだとさ」

そんなに悔しかったのか。

24話「危険な来訪者リターンズ」

秋の真つ直中。

俺は何故か嫌な予感がしていた……。

《クタビレ莊庭》

間様と結衣さん、そして紫色の髪をした少女が何かを話していた。初めて見る子だぞ、終羽里くらいの年齢かな？

メチャクチャ大きな槍を軽々と持っている。

「おや？完助殿」

「どうも間様……この子、迷子ですか？」

少女はムツとした顔になった。

「いやいや、私が『星の姫』に居た時の仲間じゃ」

「えっ！こんな子供が！？」

俺は驚いた。

まさか、こんな子供まで世界の平和を守るために戦っていたとは。少女は呟くように言った。

「私は今年で27だ」

え？

この子、今なんと？

27歳、俺より年上？

「ははは、紹介しよう完助殿……この子の名前はシュバリエ。星の姫を辞めて今は世界防衛指揮官をしており、正真正銘の27歳じゃ」

「ま……まじッスか？」

「7年前に悪魔との契約に失敗して1年に1歳、若返ってしまう呪いにかかってしまったがの」

「え、え〜と……つまり」

「20歳の時に呪いにかかったから、肉体は13歳じゃな」

間様の仲間って、こんな人達ばかりかも。

「フェノ、お前が呪いを解いてくれれば解決することなんだよ。まだ解く気にならんのか？」

「ははっ、もう少ししたら解いてやろう」

たぶん解く気ないな間様、面白いから。

「ところでシュバリエさん何スか、そのデカイ槍は？」

「コレか？これは『天守閃幻』、私の相棒だ」

デカイ相棒だこと……。

「……ん、話の続きだがシュバリエ。この前アパートにキングが来たぞ、サジタリアスの敵討ちとか言ってたな。迷惑じゃたぞ、サジタリアスをボコボコにしたのはお主であろう？」

「確かに昔ボコボコにしたな、恋人になってくれって言ってもんだから……しつこく」

「ほう……サジタリアスがお主のことをの」

「だから私は言ったのだ『弱いくせに私に惚れたお前が悪い』とな」

キツイ！男がヘコむセリフワード3に入るくらいの言葉だな。

俺も加わって平和的に4人でお喋りしているかと思いきや3人は突然、恐い顔になった。

空が急に暗くなり、二度と見たくなかった黒いフードが空から降ってきた。

「フフフツ、復讐鬼は何度でも蘇るのだ！」
『月の王』のリーダーキングの登場である。
嫌な予感が当たってしまった。

「イムサ島は楽しかったかキング？」

「フン！生温いわフェノクロス、あの程度で俺が凍え死ぬとも思
ったか！」

黒いコートから少しだけ『ホカホカ貼るカイロ』が見えてるぞキン
グ、意地を張るなよ。

するとドコからともなく現れるチャールズ。

「侵入者ダ！厳戒態勢準備にかかしく！」

「却下ですわ」

ドスッ

「ぎゃふっ！」

刀の柄の部分でチャールズの脇腹を突く麗華ちゃん。

チャールズはその場に倒れた。

麗華ちゃんの左手には咲夜華が握りしめられている。

「手を貸しますわよ」

「いやいや、私達の問題じゃから麗華殿は刀を収めてくだされ」
戦いたくてウズウズしていたのに残念そうな麗華ちゃん。

ならば！と、ピョン太が現れた。

「なら僕にお任せ下さいピョン！こんなヤツ僕の召喚でイチコロだピョン。ヘルハウンドにグレムリン、ガーゴイルにアース。なんでもOKだピョン」

だから間様だけで十分だっつーの。

それに召喚ならピョン太より終羽里の方が役に立つし。

「フツ！前回の油断した俺だと思ふなよ……今度こそキサマらを殺してやる！」

キングは叫んだ、今回は本気のようなうだ。

「偉そうなことを言うようになったなキング」

シュバリエさんが槍を構える。

「お下がりでください間様、俺の力は間様を奉仕するための力です」

クナイを構える結衣さん。

俺は大きく息を飲んだ。

シュバリエさんは羽が生えたかのように空に飛び上がり轟き叫んだ。

「堕ちろ！閃幻落鷹刃！」
せんげんらくおうは

空からキング目掛けて槍を疾風の如く投げた。

うおっ！めちゃくちゃカツコイイ技だ！

「スカーレットブレイク！」

紅いバリアのような防御魔法でキングはシュバリエさんの槍を防いだ。

言うだけあってなかなかやるなキング！

ピョン太は口を開けたまま放心状態、あまりに自分とのレベルの違いに驚きを隠せないようだ。

「そんなに驚くほどでもないぞピョン太殿、あの程度の魔法なら終

羽里殿が楽々使ってたぞ……な、終羽里殿」

間様の隣に、いつの間にか立っていた終羽里。

「……たしか、ピョン太さんが難しいからって私にくれた本に書いてあったから1時間で会得したわね」

「ガーン!!」

ピョン太はショックのあまり泣き崩れてた。

別に妹はピョン太の弟子じゃないけど、青は藍より出でて藍より青し……みたいな。

魔法の才能無さ過ぎだぞピョン太。

「次は俺だ!」

勇ましく結衣さんが前に出る。

しかし間様が割って入り、結衣さんの腹部を軽くポンッと叩いた。

「結衣、お前の気持ちもわかるがココは私が……」

「しかし!」

「案ずるな結衣」

間様は両手を前に突き出した。

「神無!」

キングの腹の部分に赤い星形のマークが浮かんできた。

「同じ手は喰らわんぞフェノクロス!」

「泡!」
うたかた

ガキーン!

「なにっ!?!」

地面から現れた無数の鎖によって手足を縛られるキング。

なんか前回と状況が変わらないような。

「十六夜！」

指をパチンと鳴らす間様。

「うおおおおおお！」

キングがうめく。

すると、みるみる小さくなるキング。もはや間様の技は何でも有りだな。

「まったく、いつもオイシいところばかり持って行くな……フェノは」

「そう言うなシュバリエ」

間様はキングをビンの中に入れた、間様ってビン好きだな。

「くそく出しやがれ！」

ビンの中で暴れ出すキング、ついでに間様は魔力も奪ったようだ。

「長い物には巻かれろってな、キングよ……」

間様はそう言ってキングが入ったビンを庭の花と一緒に並べた。

キングにとって、これほど屈辱なことは無い。アパート住民の観賞用になってしまったのだ。

こーして再び間様によってアパートの平和は守られた……みたいで
す。

25話「恋愛会議」

女です！

201号室に女性陣が大集合です。
部屋中に女性陣の姦しい声が響いてます。

俺は耐えきれずに外に出ようとするが、晶子ちゃんに引き止められた。

「ドコ行くん完助君？」

「うるさいから外に出るんだよ」

「アカン！部屋の主が出て行つてどないすんねん！」
そう言われて仕方なく部屋に戻る俺。

どーやら女性陣が集合して、会議をするらしい……なんの会議なんだろう？

「見て下さい完助さん！」

寿さんと愛子さんが洗面所から出てきた。

「じゃーん！」

二人に背中を押されて、ひょこつと現れたのは白いカッターシャツに赤と黒のデニムスカート姿の終羽里だった。

「えええええっ！」

俺は妹のスカート姿を見るのは産まれて初めてだった。
いつもジーパンとかだからな。

「私が中学生の時に着てた服なの、終羽里ちゃんに似合ってるって……どーかしら完助君？」
愛子さんが頬に手をあてて聞いてきた。

「い、いいんじゃないっすか」

「ほんと！？よかったわね終羽里ちゃん」
終羽里はコクリと頷いて俺を見つめる。

なんだか気に入ってるようだ、俺は女の気持ちをわかっている方なのだろうか？

この場に居ると、つくづく思う。
っ！か何やってんだよ三人とも……。

「完助！」

麗華ちゃんの怒鳴り声が俺の耳の鼓膜を突き破る。

「な、なに？」

「結衣は話になりませんわ、コレクションNO.79『満斗火氷』
という世界に数本しかない希少な火と氷の属性刀の素晴らしさ……
完助ならわかりますわよね？」

結衣さん同様まったくわからん！

一つ言えるのは火と氷は相性悪すぎることくらいか。

「すいません、俺にもサッパリわかりません」

「なんですって？」

すでに麗華ちゃんの疼く右手は刀を抜こうとしていた。
「わかりますわよね？」

「……いや」

「わかれ！」

「……はい」

「よろしい」

魔性のような麗華ちゃんの笑み、本当にムチャクチャな女子高生だな。

「完助殿、完助殿」

間様はニコニコした顔で手招きしている。

今度は間様が……。

「見てくれ、私が一番好きなアネモネという花じゃ……綺麗じゃろ？」

「……はあ」

我が家のテレビの上に間様によって突如置かれた赤いアネモネの花、確かに綺麗な花だけど。俺が今、気になっているのは花よりも女。コイツら……個人の趣味を部屋に持ち込んで遊んでるだけにしか見えん。

結衣さんも部屋の隅で忍具を一つ一つ丁寧に磨いてるし、恵理華ちゃんもシュバリエさんは勝手にキッチンを使ってチャーハン作ってるし……ついでに言うと、シュバリエさん意外と家庭的だし。

「みなさん食事ができました」

「手を洗ってから食べなさいよ、特に結衣」

なんで私まで部屋に呼ばれたんだ？という顔をしながら、ちゃかりしてるシュバリエさん。

「会議の前に腹ごしらえですね」

寿さんの一言で、俺の堪忍袋の尾が切れた。

「うがぁぁ！あんたらしい加減にしゃがれ〜！！」

寿さんは誰よりもビクツと反応して驚いた。

「怒鳴らなくても完助君のはあるわよ」

「ちが〜いますよ愛子さん！俺は何で会議のために201号室を使うのか知りたいんですよ！」

「なんや、そんなことかいな」

呆れた顔で晶子ちゃんが言った。

「私も詳しく知らないが、何なの結衣？」

シュバリエさんが腕組みしながら結衣さんに聞いた。

「……それは」

シュバリエさん以外の全員が一斉に俺の方を見て一斉に答えた。

「主人公だから」

くっ、俺がいないと始まらないから……好きで悲劇の主人公になったんじゃないのにな俺。

「というのは冗談でして」

冗談ですか恵理華ちゃん……メチャクチャ凝った冗談だね。

「皆さんには私のことで集まって頂いたんです」
俯く恵理華ちゃん。

いったい何だろう？

「じ、じつは……私。好きな人ができたんです！」

なに〜！？

俺か！？

ハハッ、モテる男はツライね。

「おっ！誰じゃ恵理華殿？」

間様は興味津々な顔で恵理華ちゃんに耳を傾ける。
恵理華ちゃんは顔を赤くして答えた。

「良平さんです」

チャールズの唯一の部下の鈴木か〜！！

なんでだ！？

なんでヒョロツとして頼りなさそうな鈴木なんだ？

「恵理華、あんたってあんなのがイイの？」

ナイスな質問だ麗華ちゃん。

「はい……なんだか支えてあげたくなるというか、見守ってあげたくなるというか」

「とりあえず食事が済んだら早速告白じゃな」
ウキウキとした間様が言った。

「え……そんな、今日ですか？」

「当然だ恵理華、こーいうのは早い方がいい」
結衣さんも顔には出していないが、かなり知りたいようだ。

「この手の話が好きだからね、フェノは」
あまり興味の無さそうなシュバリエさんは両手の肘をテーブルに付けて言った。

「楽しみね、若い時に光太郎さんから告白されたことを思い出すわ」
「がんばりや恵理華！」

「は、はい」

ちよつと自信なさげな恵理華ちゃん。

「私が生きてた時には、いろんな人に告白して、付き合ったりフラれたり、したもんですよ恵理華さん」

どうせ寿さんのことだから道端にいたカエルとかカタツムリとかと付き合っていたのだろう。

《101号室前》

「なんでしよう恵理華さん？」

「あの……その」

ちよつと離れた場所で見守る俺達。

恵理華ちゃんが好きな人が俺じゃなかったのは悔しいけど、がんばれ恵理華ちゃん！

「す、好きです良平さん。私と付き合ってください！」

さあ！鈴木の記事は？

「はは……そーいうことはお断りします」

うそっ！！

「俺が愛する人は軍曹ただ一人ですので」

バタツとシヨツクのあまり恵理華ちゃんが倒れた。
チャールズに負けた恵理華ちゃん。

同時に鈴木に斬りかかる麗華ちゃん！

「悶え死にやがれ軍人気取りがああ！！」

しかし麗華ちゃんの刀は、あっという間に燃えて溶けた。

「満斗火氷っ！！」

あっさりと恵理華ちゃんの恋は終わり、女性陣が恵理華ちゃんを慰める。

結果……ますます麗華ちゃんがチャールズ家を嫌いになっただけに終わった。

26話「自衛隊体験」

ある日101号室の鈴木から突然、チャールズと一緒に買い物に付き合ってあげてほしいと頼まれた。

なんでも母親が危篤状態らしく、付き合えないらしい。まあ買い物くらいなら……と、俺はチャールズと一緒に。

日本特殊自衛隊基地に着きました。

軍の訓練1日体験ができるらしく、チャールズに忠誠を誓ったはずの鈴木も去年……死にかけたらしい（後にチャールズから聞いた話）

はい、そうです。

鈴木に騙されました。

え、銃が大量にあります。

まさに軍の危地（基地）です。

終羽里……お兄ちゃんを助けておくれ。

「1年に1度の自衛隊体験の日に母親が危篤とは鈴木二等兵は実に残念だ」

残念だなチャールズ、ヤツは逃げたんだよ。

あ、俺も逃げたい。

落ち込む俺、そんな俺の気持ちを知らずに近づいてくる一人の男。

コイツが教官か……。

いきなり腕立てとかさせられるんだろっとな、いや……その前にストレッチかな？

「1周、約1キロあるグラウンドを20周してもらおうか？」

いきなりグレード高くねえかオイ！？

せめて最初は軽くランニングだろ？

これが軍のウォーミングアップなのか？

「サッサと行かんか！」

くそっ！行けばいいんだろ、行けば……。

スタタタタタッ

俺を一瞬で追い越すチャールズ。

そんなハイペースで体力持つのかよ？

《30分後》

持っとする。

っーか走り終えとる。

俺はまだ10キロも走っていない、すでにへバツている。

「はあはあ……無理、もう走れん」

俺はその場に倒れ込んだ。

汗の流しすぎで、もはや汗も出なくなっている。

「だらしのないヤツだな、仕方ない……次の腕立てを千回から千五百回にするから走らなくていいぞ」

すでにへろへろの俺には意味の無いオマケだな。

鈴木のは俺より体力無いからな、確かに死にかけたのが納得できる。

「さあ休憩無しだ！はじめ！」

「イエッサー！」

意気込むチャールズ。

「イ、イエッサー」

「情けない声を出すんじゃない此似手完助！」

ドスッ！

容赦ない鬼教官のボディーブロー！

「ぐはっ！」

「ヘイ、完助ボーイ！教官に逆らわない方が身のためです」

そう言っただけに駆け寄るチャールズ。

くっ、チャールズに慈善されるとは情けない。

俺とチャールズは横に並んで腕立てを始める。

すでにボロボロな俺は半泣き状態、一方チャールズはペースよく腕立ての回数を増やす。

俺が50回を終えたときには200回を超えていた。

「完助ボーイ、運動不足にも程がありますヨ」

「うるせえよ、俺より運動不足なのは203号室のウサギだろ！」

「見る度に太りやがって……この訓練を受けるべきなのはアイツだろ」

「言われてみれば、そうですね」

すると、教官は俺とチャールズの間に見詰める。

「私語を慎め！」

バシッバシッ！

持っていた竹刀で俺とチャールズの背中を叩く。

「ぐっ！」

「ぐオツ！」

「この後に腹筋や戦闘訓練があるんだぞ、気合を入れていけ！」

マジで生きて帰れるのだろうか？

間様や皆が居るアパートに帰れるのだろうか？

「すみませ〜ん『やりすぎ宅急便』です」

あれ？東野さんだ？

空豆店長もいるぞ？

「おや？完助さんにチャールズさん」

「東野さん、どーしてココに？またロボットになって暴れたりしないでしょうね？」

「ははっ、大丈夫ですよ」

肩を弾ませて笑う東野さんの後ろから、空豆店長が声をかける。

「東野、早く要件を済ませるんだ」

「あ……そうですね、教官どうぞ」

東野さんは教官に一通の手紙を渡す。

その手紙には極秘と書かれていた。
封を開けて読みだす教官。

「なにっ！？日本が戦争を始めるだど？」

ええええええ！？

何で？

平和な国じゃないのかよ日本！

「ついに来たか……時代ガ」

お前は黙れチャールズ。

「よしっ！訓練体験生のチャールズ！そして此似手完助を正式に我が軍の兵士として勧誘しよう！」

「イエス！ありがとうございます！」

興奮するチャールズ。

「ふざけんなコラア！イヤに決まってるだろ！」

狂いだす俺に向かって拍手をする東野さん。

「よかったツスね完助さん」

俺に握手をして涙を流す空豆店長。

「おめでとう完助君！」

意味がわからん！

いゝやゝじゃゝ！！

……

「……さん」

「……兄さん」

「……起きて兄さん」

終羽里の声で目覚める俺。

周りを見ると201号室の布団の上だった。
外はまだ夜中、さっきのは夢だったのか？

「……大丈夫？すぐく魔されてたわ」

「ああ、大丈夫だ……夢でよかった」

リアルな夢だったな。

《午前7時》

ピンポーン

誰だ？こんな朝っぱらから？

ガチャ

ゲツ！……鈴木。

「兄貴、ちょっと頼みたいことがあるんですが……」

あれ？夢で見たときと同じ状況だぞ？

あれれ？

……まさか。

27話「争奪戦」

今日はアルバイトが無い。

大学が終わると直行でクタビレ荘に帰り、普段やらない洗濯物を取り入れる。ガラにもなく学校帰りの妹を単車で迎えに行き、阿修羅商店街のコロッケ屋の前で間様と結衣さんと出会つと皆でコロッケを買って食べた。

こーやって『ほのぼの』とした1日を過ごす。そう！俺はコレを望んでいたんだ。

何のトラブルもなく、毎日楽しく静かに……暮らしたいのに何で来るかな恥芽くん……！

「お、にい……ちゃん助けてえ」

バタツ！

ボロボロの体を引きずり、俺に助けを求めて来た恥芽は俺の目の前で倒れた。

「恥芽！大丈夫か……？」

俺は倒れた恥芽を抱き起こす。

「おは……ぎ」

ガクッ！

おはぎ？

恥芽が「最後」に言った言葉『おはぎ』とは………いつたい？

「間様、結衣さん。恥芽をお願いします」

「ああ」

「任せておけ完助殿」

俺は202号室へと向かった。

「終羽里も間様達と一緒にいろ！」

……俺のバカ、『こんな時は男の俺が』と意気込んでしまった。

保険として妹を連れていけばよかった……と、落ち込んでも遅い。

「でえええい！」

勢いよく202号室の扉を開ける。

筋トレ道具以外は素朴な一撃家の部屋中に響く友蔵の声。

「勘当じゃー！！」

パリン！

ガシャーン！

周りの食器や窓が割れる。

声だけで食器とか割るとは、相当怒ってるな友蔵のヤツ。

もはや現実離れたことを、いちいちツツコンでいられない状況だ。友蔵、光太郎さん、そして拳使郎の3人が輪になって闘志を燃やし今にも殴り合いそうである。

「ちょ、待て待て！こんなことになった理由を説明しろ！」

しかし、その理由は部屋の中央に置かれてある円卓の上を見て理解した。

お・は・ぎ！

丸いテーブルの上に丸い『おはぎ』が1つ置かれていた。
なるほど、恥芽が言っていたのはコレか……。

「ワシの『おはぎ』は絶対にやらんぞ！」

「だから父さんのじゃなくて、それは僕が商店街で買ってきた『おはぎ』なんですよ……だからソレは僕のです！」

「ぜってええにジジイには渡さねえぞ……オヤジにもだ！」

3人とも、どーしようもなくガキだな。

見兼ねた俺は口を開いた。

「あと2つ買えば収まるだろ？ ついでに恥芽の分も買えば……」

「嫌だ（じゃ）！ めんどくさい！」

3人がハモった。

仲良く買いに行けばいいのに。

「こうなったら決闘じゃ！ 行くぞ光太郎！ 拳使郎！ ぬりゃあああ！」

「望むところだクソジジイイ！」

マズい！ 戦いが始まる！

またアパート壊すんじゃないだろうな？

5回目は勘弁だぞオイ。

ドカツ！

バキッ！

ガシャーン！

えゝ、こちら実況を伝えるのは私……此似手完助です。

ついに始まってしまいました『親子おはぎ争奪戦』、場所はとんぼ町クタビレ荘202号室。

1つの『おはぎ』を巡って繰り広げられる今回の死闘、すでに台所が破壊されております。

おっと！ここで光太郎さんのラリアットが友蔵にヒット！

しかし友蔵、体勢を崩しながら光太郎さんの胸倉を掴んで一本背負い！

お見事！

雄叫びを上げる友蔵のチ○コに拳使郎の右ストレートが！

おやおや、さつそくの反則。しかも下ネタですね。

立ち上がった光太郎さんに拳使郎は透かさずアッパーを繰り出した！しかし軽快に避ける光太郎さんは拳使郎の後ろに回り込み首を絞める。

息子の首を絞めるとは、もはやコレは虐待だ！

抵抗する拳使郎。

そこで○ンコの痛さのあまり、もがいていた友蔵が立ち上がり構えた！

「ぐはっはっはっ！血湧き肉踊るわい！」

友蔵の拳が光った。

二人とも巻き込んで殴るつもりだ、ついに出るぞ！友蔵の必殺技だああ！！

「森羅万象！！」

ガチャ

「ただいま戻りました、商店街で『おはぎ』が安かったので買ってきましたよ」

帰って来た愛子さん、その手には『おはぎ』の入った袋が……。

「あ、愛子!？」

驚く光太郎さん、同時に額から汗を流した。

友蔵の手も止まり、辺りを見回す。

原形を留めていないテレビ、倒れたタンス、穴だらけの壁。

愛子さんは怒りをこみ上げた、笑顔で腕をパキポキ鳴らす愛子さん。

「お父様、光太郎さん……拳ちゃん。ついでに完助君」

えっ!?!俺もですか？

「覚悟してくださいね」

「きゃあああああああ!!（4人ともハモる）」

こうして『親子おはぎ争奪戦』は愛子さんの乱入で無効になり……結局、愛子さんが買ってきた『おはぎ』を追加して解決した。

もちろん恥芽の分もある。

痛い思いをした俺も少し『おはぎ』を頂いて、終羽里と一緒に食べた。

アパートが崩壊しなかったのが何よりだった。

今日もビドい1日だったな。

28話「〇鍋パーティー」

寒い季節、なにやら間様が上機嫌だ。

俺は間様に声をかけた。

「なんか良いことでもあったんですか間様？」

「……ん、ああ完助殿はクタビレ荘の冬を知らんからな」

笑いながら間様は103号室へ戻っていった。
なんのことだろ？

《その夜》

201号室にゾロゾロとスーパーの袋やガス焔炉を持って来るクタビレ荘メンバー。

いや、シュバリエさんや晶子ちゃんもいるぞ。

わざわざ間様も結衣さんの力を借りて2階に来るなんて、いったい何が始まるんだ？

ドン！

テーブルの真ん中に鍋を置く友蔵。

パン！

パン！

みんなは持っていたクラッカーを一斉に鳴らした。

「お待ちかねの鍋パーティーじゃ！」

間様の一言で部屋中が盛り上がった。

ポカーンと口を開けたまま突っ立っている俺と終羽里。

「鍋パーティー？」

「そういうことじゃ完助殿、今年の会場は201号室！しかも！」
「闇鍋だ」

結衣さんが仁王立ちでクールに言った。

なぜに……なぜに闇鍋？普通に鍋でいいじゃないか。

「わーい鍋ばーていです」

黙れ寿！

テメエはどうせ食えん！

しかし、恵理華ちゃんや愛子さんが持ってきたスーパーの袋には肉や野菜が入っているぞ。

変な物を持ってきているヤツは………まあ、麗華ちゃんの刀は仕方ないか。

すでに終羽里は大人しく座って鍋が出来上がるの待ってるし、一撃家の子供達も素直に正座。

この三人は何を食っても腹を壊しそうに無いがな。

「アパートの住民では無いのだぞ私は」

ブツブツと文句を言っているのはシュバリエさん。

「細かいことを気にするなシュバリエ、どうせヒマだったのじゃろ？」

シュバリエさんの肩に手をまわす間様。

「仕事はヒマだが、悪魔を手に入れるために奮闘中よ」

「まだ諦めておらんのか？」

「契約に失敗したのは何かの手違いだ、必ず私の物にしてみせる」
「懲りんのお……」

一方、辺りを見回して光太郎さんが気付いた。

「父さん、空豆さんと東野さんが来ていませんが」

「そーいえばそうじゃな、どうする間君？」

友蔵が間様に尋ねた、しかし答えたのは人数が多すぎる上に狭い部屋を居心地悪そうにしている一匹のウサギだった。

「どうせ仕事が忙しいんだピョン」

「そうだ！ピョン太の言うとおり、先に食っちまおうぜ！」

スーパ―の袋に手を入れる拳使郎に注意したのは意外にもチャールズだった。

「いけません拳使郎ボーイ、男は我慢というのが大切です」

と、真面目に注意してるかと思いきや……右手にはリボルバーを構えて脅してたりする。

もちろん一撃家メンバー総出でボコボコにされるチャールズ。

《10 後》

「軍曹……」

「す、鈴木二等兵。私の遺骨はアラビア海にでも流してくれないか？」

「必ず！」

ガクッ！

「軍曹！！」

アラビア海が迷惑だよ。

バカ二人は置いといて、確かに遅いな東野さん達。

「事故とかにあつてないでしょうか？」

心配そうに恵理華ちゃんが言った。

「来ーへんなら前もって連絡するやろ？」

「できない状況かもしれませんわね」

怖いこと言うのは禁止だよ麗華ちゃん。

「いやいや、お待たせしました皆さん」

む？東野さんの声はするが姿は見えず！

上か！？

下か！？

ガシャーン！！

窓からかい！

「迷惑だバカやろう！弁償しろ！」

「まあまあ完助君、今日は楽しい日なのだ気にするな」

「気にするわバカ空豆！」

酒臭い空豆店長……かなり飲んでるな、東野さんが酔っ払った空豆店長を連れてくるのに時間がかかったのだろう。

《終羽里の魔法で窓を修復》

グツグツ……

いつの間にか鍋の中に肉や野菜を入れる愛子さん。

「そろそろかしら？」

愛子さんと眼が合った間様は頷いた。

「では皆の者、鍋に好きな物を入れるがよい」

ポチャーン

ポチャーン

ドボーン！

俺は次々と鍋に入る材料を確認した、恵理華ちゃんはコロツケ。恥芽が入れたのはバナナ、友蔵は……プロテイン！！

マズい！このへんから狂いだすぞ！

ああっ！

今、ピョン太がカエルを入れたぞ！儀式か何かと勘違いしてないかオイ！

餃子！納豆！刺身マグロ！オレンジジュース！？

うおっ！光太郎さん、バニラアイスは無理があるよ！
さらに無理があるのは麗華ちゃんだ。

もちろん入れようとしているのはコレクションである刀、また『鍋に入れるとダシが出る刀』とか言い出すんじゃないだろうな？

くっ……すでに食べそうにないぞコレ。

カエル生きてるし、バニラ色の野菜が浮いてるし。肉と仲良く手榴弾が浮いてる光景なんて、まず無いだろう。

そして、この鍋パーティーに終止符を打ったのは白い翼を生やした悪魔。此似手終羽里……神の過ちにより生まれた人間兵器である。台所から包丁を取り出し、片手でピョン太の耳を掴んだ。

「ピョン？」

「……やっぱり鍋はウサギ鍋」

「うわああ！やめろ終羽里！！」

グチャ

グチュ

ブシュ！

ドボーン！

鍋の中がモザイクになった。

へえー、モザイクってこうしてできるんだ。

「さあ食べ完助」

無茶を言わないでください結衣さん！

「……いただきます」

手を合わせて食べ始めたのは終羽里だけだった。

俺達はソレを見ることができなかった。間様の笑い声だけが部屋中に響いている。

5分後……完食した。

201号室から一匹の男が姿を消した。

今回はかりは帰ってこないのではないだろうか？

29話「がんばれ寿さん」

自称クタビレ荘の癒し系ヒロイン寿！

今日は読者の皆さんと一緒にアパート住民の素晴らしい触れ合い風景を見ていきたい思います。

「うがああああ！！」

おや？さっそく完助さんの叫び声、なにかあったんでしょうか？

《203号室前》

「出せコラアア！」

「僕は諦めないピョン！必ず完助君を黒魔術の生け贄にするんだピョン！」

相変わらず2人の仲は悪いようですね。

ピョン太‘2号’さん（前話参照）に檻に入れられて203号室に押し込まれそうになっている完助さん、これは非常にマズい状況みたいです。

そこに現れたのは完助さんの妹の終羽里ちゃん。

「う……小娘め、また僕の邪魔をするピョンね」

「……兄さんを返して」

「助けてくれ妹よー！」

はわわわ……終羽里ちゃんとピョン太さん一騎打ちです！

「くらえ！アイスビーム！！」

ビビビビッ

カキーン！

た、大変です！終羽里ちゃんが凍らされちゃいました！

バキーン！

はれ？簡単に氷が割れちゃったみたいです。

すると終羽里ちゃんは何も無かったかのような顔でピョン太さんに向かつて指をさした。

「……アイスビーム」

ドキューン！

パキーン！

はううゝ、さきほどのピョン太さんの5倍はあると思われる威力！ピョン太さん、カチコチに凍っちゃってます。

「……兄さん、今日の昼食を手に入れたわ」
「いらん！とにかく助ける」

そんな日曜日の朝に起きた出来事でした。クタビレ荘では、こんなことが毎日のように繰り返されているんです。

《昼過ぎ》

私は今、103号室にいます。

「ゆ、ゆゆ……結衣さんが裁縫！！」

「なんだよ？別にいいじゃねえか？」

「だって何と云うか、‘いめーじ’が」

あの凶暴で金髪で、いつも煙草を吸いながら睨みつけてきて怖くて………ちよつと言い過ぎました。

しかし間様ならともかく結衣さんが裁縫は似合わない気が……。

「結衣は手先が器用でな、知り合いの結婚式用に服を作ってもらってるのじゃ」

「そーなんですか」

「店で買ってもよかつたんじゃがの、結衣がどうしてもって言うもんじゃから」

結衣さん、頬を桃みたいな色にさせて恥ずかしがってます。

やっぱり結衣さんにも可愛いところがあるんですね。

「そろそろ行くかの結衣」

「はい！」

はれ？結婚式って今日なのかな？

「では、出かけてくるぞ寿殿」

「は、はい！いつてらっしゃいます」

結婚式、私も見たいです。こっそり付いて行っちゃいましょう。

庭へ出ると、間様が育てている花達の近くに青い水晶玉が落ちていました。

「はわああ、綺麗です」

「ふん、早く届けてやった方がいいんじゃないか？」

ビンの中に閉じこめられて、すっかり大人しくなったキングさんが

私に話しかけてきた。

「どーいう意味ですか？」

「その水晶玉はフェノクロスが結婚式の時に着る服に付いてたヤツだぜ。それが無いとアイツ困るんじゃないかねえか？」

それは大変です！

早く届けてあげないと、二人を追いかけましょう！

ピューー！

と、言っても何処へ向かったんでしょうか？

空からキヨロキヨロと辺りを見回すものの二人の姿は見えません。とりあえず駅に向かえばいいのかな？

一番近い駅は、とんぼ駅でしょうか？

私は急いで駅へと向かった。

「ワン！ワン！」

はわわわ！こんな時に近所の山田さん宅のメロちゃんに吠えられ追いかけられちゃいました！

「犬は苦手ですう！なんで鎖で繋いでないんですか！」

《とんぼ駅前通り》

ぜえ……ぜえ……幽霊も逃げ回ると疲れるんですね、知らなかった。はうう、どうやら駅には来てないようです。今度は何処へ行けばいいのでしょうか？

「さっきの車椅子の女性、美人だったよな」

「ああ、一緒にいた金髪の人もなかなかだったな」

‘さらりーまん’さんが話している人って……まさか！

「そ、その人は何処へ行きましたか！？」

つて、私の声が聞こえるわけ無いか……

「ああ、とんぼ池に向かつていったよ」

はううゝ、私って本当に幽霊なのでしょうか。

「ありがとうございます」

《とんぼ池》

見つからない。

とんぼ町には居ないんでしょうか？

まさか池に落ちちゃったんじゃない？

いやいや、私と違ってドジじゃないんだし。

でも念のために探しましょう。

グイッ！

「きゃあああ！」

なにになになに？なんなんですか！？

襟元を引つ張られますゝ！

「おや？娘っ子が釣れてしもつたわ」

はううゝ釣り人のお爺さんに釣られちゃいました。

お魚さんと間違えられたのはともかく、どうして針に引っかかるんでしょうか私？

幽霊なのに……。

《再びアパートへ》

ひどい目にあっちゃいました。

ややや！103号室から声がします。

「早いお帰りですね間様、結衣さん？」

「……ん、買い物へ行ってきただけだからな」

「えっ！結婚式じゃないんですか？」

「結婚式は明日じゃぞ、部屋に服を置いていったじゃろ？」

はわわわ、私の勘違いでした。

「とりあえず結衣さん、水晶玉です落ちてましたよ」

「なんだソレは？俺は知らないぞ」

がーん！

キングさんに騙されました。

嘘つくなんて、ひどいですよキングさーん！

「泣くでない寿殿、結衣……せっかく寿殿が拾ってくれたんじゃ。その水晶玉を明日着る服の胸元に付けておくれ」

「よろしいのですか？」

「うむ」

「かしこまりました」

はううゝ結果オーライでよかったです、こんな私でも役に立てました。

次の日、私は間様達と一緒に結婚式に参加しました。

新郎さんも新婦さんも幸せそうで、とても素晴らしい結婚式でした。

30話「妖刀」

ある日、俺は恵理華ちゃんに呼ばれて102号室へ向かった。何でも差出人不明の荷物が届いたらしい。

「間様が出かけてるから相談でへんしな」

おや？晶子ちゃんもいるようだ、麗華ちゃんに呼ばれたのかな？

102号室に入っただけで目に付いたのは例の荷物、かなり細長いダンボールである。

「誰が持ってきたんだい？」

「空豆ですわ」

「……やっぱり」

何で荷物を届けて来るのはいつも『青い空豆』の店員なんだろうか？世の中が狭いというか、世界観が無いというか……。

その時、荷物の中身が気になってしょうがない晶子ちゃんはダンボールを持ち上げて降り始めた。

「何も音せえへんな……」

首を傾げる晶子ちゃんだが、麗華ちゃんだけがハツとした顔で晶子ちゃんから荷物を取り上げて箱の匂いを嗅ぎ始めた。

「クンクン……これは！」

「中身がわかったのか麗華ちゃん!？」

「……刀の匂いしますわ」

麗華ちゃんは目を光らした。

確かに彼女にしかわからない匂いだ……ちょっと無理があるけど。

そしてガムテープで密封された箱を開け始める。

「姉さんダメよ勝手に開けちゃ！」

「刀を目の前にして止まる私じゃありませんわ！」

そんな無責任な！

「せめて間様が帰ってきてからにした方がいいんじゃないの？」

晶子ちゃんも心配になってきた。

もちろん俺もだ。

「なまくら刀だったら承知しませんわよ！」

ココにいる麗華ちゃん以外の全員がそう願った。

ビリッ！

ピカアアア！

麗華ちゃんが箱を開けると同時に隙間から光が漏れた。

「なんやなんや！？」

しばらくして光が収まり、柄の部分が見取れてしまうぐらい美しい紫色をした刀が姿を現す。

それを手にした麗華ちゃんは黙り込み、そして様子がおかしくなった。

いきなり笑みを浮かべて刀を抜き出したのである。

「クツクツクツ、久しぶりに人間が斬れるぜえ」

明らかに口調が変わった！

麗華ちゃんの声じゃないぞ！

「しまった！コレは妖刀や！」

「妖刀！？」

「間違いないで完助君、前に本で読んだことあるねん。妖刀に支配された人間の見分け方は……」

「み、見分け方は？」

「……やたら横にカクカク動くねん」

うわっ！本当だ、カクカク動いて気持ち悪っ！！

カクカクカク

「姉さん！しっかりして！」

「クツクツクツ、久しぶりに肉体を手に入れて気分がイイぜ。この体の持ち主がさっきから心の中で呟いている『101号室のチャールズ』とか言うヤツを斬り刻みに行くかな？」

それはマズい！っ！か何呟いちゃてるのよ麗華ちゃん！

これは男である俺が前に出て止めるべきか……しかし刀持ってるしな、めちゃくちゃ強そうだしな。

すると麗華ちゃん（妖刀装備）が部屋にある大量の刀に気が付いた。

「ほお、これだけ刀があれば懐刀に困ることねえな」

いやいや、懐とかの次元じゃないじゃん！

ブンブン！

大量の刀を所持して闇雲に振り回す麗華ちゃん（妖刀装備）は恵理華ちゃんに襲いかかった。

「きゃあああ！」

「ヒツヒツヒツ！もうチャールズとかどうでもいいや、斬らせろおおお！」

えい！考えても仕方がない、女の子が襲われているのに男が黙って

見ているなんて……

ピーン！

あ……目が合っちゃった、麗華ちゃん（妖刀装備）と目が合っちゃった。

どうしよう、ピタッと止まってコッチ見てる。

カクカク

カクカクカク

ひいひい！怖え！ホラー映画とか比べものにならないくらい怖いよ！

何てったって目の前に殺人鬼いるんだからな！
怖いに決まってるじゃん！

……いかん、シヨンベン漏れそうだ。

「この世の終わりや」

「なんとかならないの晶子ちゃん？」

恵理華ちゃんはあまりにも変貌した麗華ちゃんを見たショックで倒れてるし、頼れるのは晶子ちゃんしかない。

「無理言うなや、あんたは文化祭の麗華を知らんからそんなこと言えるんや」

「……へ？文化祭なら俺もいたけど？」

「問題は妹さんがドラゴン呼んだ後やがな」

「……いったい何が？」

「麗華な、恵理華の体操着を盗まれてないことに気が付かんと文化祭に来た男性客全員に峰打ち力ましょってん。そんな恐ろしい子が妖刀持つて暴走したら死人が出るどころやないで」

カクカクカク

「まずはデメエだ！主人公面したクソガキがああ！」

「ぎゃああああ主人公でゴメンナサイ！」

ピタッ！

う……俺の鼻先から約1センチのところで止まった妖刀。

「完助君、麗華の様子がなんか変やで」

「くっ……な、生意気な刀ですわね」

震える俺の目の前で、いつもの麗華ちゃんの声がした。かなり苦しそうにしている。

「大丈夫か麗華ちゃん！？」

「きいい！精神を持っていかれてたまるもんですか！」

歯を食いしばりながら妖刀と戦う麗華ちゃん。

しばらくして麗華ちゃんの手から刀が離れた。

完全にいつもの麗華ちゃんに戻った。

「はあ……はあはあ」

「すごいよ麗華ちゃん！刀の呪いを解くなんて……」

「苦労しましたわ。でも、これでこの刀は私の物ですわ」

地面に落ちた刀を拾おうとした麗華ちゃんだが

ドキューン！

妖刀は空を目掛けて飛んでいった……っ！か逃げた。俺にはそんな気がした。

「あんな物騒な物が世の中に出ないように処分しようと思ってましたのに」

「うそつけ！絶対にコレクションにしようとしてただろ！」

「まあいいですわ。恵理華、起きなさい買い物行きますわよ」
倒れている恵理華ちゃんの頬を軽く叩いて起こした。

「は……姉さん、いつもの姉さんに戻ったのね？よかった」

泣きながら麗華ちゃんに抱きつく恵理華ちゃん。

「まったく、心配かけよってホンマに……」
ホッとしてため息をもらす晶子ちゃん。

しかし異様な光景だな、空飛ぶ刀って……まあこのアパートにいればあんなのも慣れてしまうけど。

「さあ支度しなさい恵理華、刀ショップ行きますわよ！」
この女、全然反省してないな。

……その夜、部屋に麗華ちゃんがやって来た。

何でも差出人不明の食器皿が入った荷物が届いて、それを手にした
恵理華ちゃんが暴れだしたと言う。

この姉妹、バカにも程がある。

31話「男の背中」

俺は非常に疲れている。

触るな！読者の諸君……絶対に俺に触るんじゃないぞ！筋肉痛だから。

朝から阿修羅商店街で痴漢に間違えられて警察に追われるし、大学とバイトで体はクタクタだし……風にあたるだけで体が痛い。

そして今、俺はとんぼ町から3キロ離れた『強者集い体育館』通称バトルクラブの玄関前にいる。

なぜ俺がこんな血の気の多い場所に來たかと言うと。

《体育館内》

「おお、來たか完助君……ん？どうした、フラフラじゃないか？」

「よう友蔵ジイさん。筋肉痛なんだよ、体に触ったらチヨキで殴るぞ」

そう、こういうイベントには毎度一撃家が関わっている。

なんでも今日は拳使郎の強者集い体育館ボクシングの部でのデビュー戦らしい。

とりあえず俺は友蔵の隣のパイプ椅子に腰掛ける。

「……で、今は誰が戦ってるんだ？」

俺の質問に答えた恥芽。

「見ればわかるでしょ、お父さんだよ」

あゝ本当だ、眼鏡を外してモヒカン頭で悪徳プロレスラーみたいな格好をしている光太郎さんだ。

普段は大人しそうな格好をしてるから気がつかなかったな……ハハッ（疲れているのでローテンション）

「I am・CHAMPION！ハッハッハッハッ！！」

光太郎さん……キャラ変わってるし、ちゃっかり勝ってるし。

「なんでプロレスなんだ？」

「今日のメインは拳使郎の試合なんじゃがな、この体育館では年中無休で様々なジャンルのバトルが繰り広げられているんじゃよ」

「あつそ、あまり俺には縁のない場所だな。なんでジジイと仲の良いピョン太を誘わなかったんだよ」

「誘ったんじゃがな、シユバリエ君の仕事に興味があるから彼女に付いていくそうじゃ（ストーカー）」

「ああ、じゃあ今ごろウサギのヤツ死んでるな（ストーカーだから）」

光太郎さんがタオルで汗を拭きながらリングを降りて俺の席のとなりに座る。

くっ……汗臭い、この臭いによく耐えられるな恥芽よ。

「ところで愛子さんは？」

「愛子なら拳使郎のセコンドですよ」

光太郎さん、いつものキャラに戻ってる。

ジャジャーン！

『赤コーナー！とんぼ町の赤い猛獣！いちげき〜けん〜しろ〜う〜！！』

激しい音楽とともに現れた赤い髪に染めた拳使郎。

おいおい父親が父親なら息子も息子だな。まあ拳使郎は普段茶髪だから真面目な光太郎さんの真っ黒な髪よりマシだけど。

「つーかセコンドの愛子さんのほうがバトルオーラの量が多く見えるのは俺の気のせいだろうか？」

『青コーナー！とんぼ町の殺人マシン』

ドキッ！

まさか東野さんか！？

『ゴリラ〜ン・バナ〜ン〜！！』

誰だよ！

身長めちゃくちゃ高すぎだろ！2メートルは軽く超えてるじゃん！しかもゴリラみたいな顔で筋肉ムキムキ！名前は適当！

「アイツ何歳だ恥芽？」

「13だよ」

マジか！あの顔で拳使郎より年下かよ！

カアアン！

ゴングが鳴り、愛子さんの声が体育館に響き渡る。

「拳ちゃん！がんばって！相手をよく見るのよ！」

ドカドカドカドカドカッ！

確かに拳使郎は相手をよく見て殴られてるな。

フックやアッパーが見事に決まる。まるでサンドバックだ。

確かに拳使郎は強いが相手は大人でもビビるビックゴリラだぞ。

パンチが速すぎて見えないし全部顔面に直撃させている。

大丈夫かよ拳使郎のヤツ？まさかカウンターとか狙ってるんじゃないだろうか？

「マズいですね父さん。相手はゴリラ並のパワーを持っているし、なにより速い」

「うむ、フエイントも完璧じゃ。拳使郎は全てにおいて負けておる……が！」

なんだ？ なんか勝つ見込みでもあるのか？

「なんです父さん？」

「もうすぐ来るわい！」

なにが来るんだ？

「あれ？ お母さんがいない」

恥芽が気づいた、確かにセコンドにいた愛子さんが消えている。

そのとき体育館の大きな扉が開いた。

キィィ……

なっ！！

終羽里！？

愛子さんと一緒に終羽里がいる……どーなってるんだ？ 何でココに終羽里がいるんだ？

「愛子さんに頼んで終羽里君を電話で呼んでもらったのじゃ……これで拳使郎は強くなるぞ！」

強くなる？ 拳使郎に終羽里の姿を見せていつもの「ドキン」状態にさせようというのか？

こんなに多くの人がいるのに終羽里に気付くわけが……

……ミテル

拳使郎のヤツ、殴られながら終羽里の方を、超、見てる。

「うおおお！パワー全開！くらえゴリラ野郎〜！！」

ボッコオオン！！

ゴリラの腹に拳使郎の右ストレートパンチがめり込んだ。

ゴリラは涙を流して悶絶した。

拳使郎の完全勝利である。

カンカンカアン！

『勝者！一撃拳使郎！！』

「ハッハッハッ、見事じゃ拳使郎！今日の家訓は、一触即発、にして正解じゃたな！」

どのへんが正解なんだよ？

「おめでとう拳ちゃん！」

喜ぶ愛子さん、そして未だ状況が飲み込めない終羽里。

「カッコイいな〜兄ちゃん、僕も早くリングに立ちたいな〜」

「ハハッ恥芽には十年早いよ」

才能ないからってソレはヒドいぞ光太郎さん。

「どうだ見たか女！俺の逞しい背中を！ほ……惚れただろ！？」
レイを着けた拳使郎がココで再び終羽里に告白した。

「……誰あなた？」

拳使郎は砂と化した。

もちろん一撃家のメンバーは拳使郎のフラれ姿を悲しんだ。

「終羽里、そいつ拳使郎だよ。髪が赤いからわからなかっただろう？」

「……ふん」

薄い反応、やっぱりダメだな……終羽里に拳使郎を惚れさすなんて。

「……私は兄さんが試合に出るって聞いて来たんだけど」

はい？

「ご、ごめんなさい完助君。そうでも言わないと終羽里ちゃん来てくれないから」

そりゃないよ愛子さん！

「……がんばってね兄さん」

ガァァァン！

この日、俺こと此似手完助は生まれて初めて臨死体験をした。

32話「デート」

クリスマス、それは2匹のトナカイを連れた優しそうな白ヒゲのオッサンが子供達にプレゼントを渡して回る特別な日である。

「……その言い方、回りくどいわ兄さん。キリスト降誕祭でいいのよ」

「コラッ終羽里！勝手に人の心の声を覗くな！」

ピンポーン

ベキッ！

「今日はクリスマススイブだから、その説明は必要無くないっスか？」

「コラッ東野さん！返事してないのに部屋に入るな！しかもドアノブを壊すな！」

おのれ殺人マシーンめ。まあ、何にせよ俺には関係の無い話か……
クリスマスなんて。

「どうぞ手紙です」

「うおっ！オフクロからだ」

終羽里も気になって手紙を見に来た。

『お元気ですか？アパートで元気にやっていますか？私とお父さんは元気すぎて逆に疲れてます、たまには帰って顔を見せに来てくださいね。』

……母より』

相変わらず仕事と遊びしかしてないって感じだな、まあ手紙を寄越しただけでも良しとするか。

『PS・完ちゃんの部屋のベッドの下に隠してあったエロ本は掃除の時に捨てておきました』

余計なことするな糞ババア！

「ついでにコレも」

ん？映画のチケットのようだ、オフクロからのクリスマスプレゼント
トってやつか？

なんかしっくりこないな。

《PM19:00》

「なにいい！完助が間様とデート！？」

結衣さんの叫び声。

最高のクリスマススイブをありがとうサンタさん！さきほどは侮辱し
てスマン、まさか間様が映画『殺戮のクリスマス』を観たかったな
んて思わなかった。

「ホラーなのに恋愛アクションなんて興味があるからの、ちょっと
二人で観に行くだけじゃよ結衣……そう怒鳴るな」

「二人、だから怒鳴るんです間様、何故コイツと……」

結衣さんは俺の頭を鷲掴みタバコを俺の額に押しつけた。

「あつつつ！」

「いいか完助、間様に何かあつたら殺すぞ」

冗談に聞こえないから怖い。

「結衣、終羽里殿にお前を監視させるようにお願いしたからの」

「……う」

「分身の術を使って尾行するのも駄目じゃぞ」

「……うっ！」

結衣さんの考えてること全部、間様はお見通しのようだ。

結衣さんは終羽里の肩に手を置いて言った。

「頼む終羽里、兄ちゃんを止めろ」

「……兄さんとは帰りにケーキを買ってきてもらう約束をしているの、だからその頼みは聞けない」

「食いものに釣られてんじゃねえよ！」

ともあれ俺と間様の「デート」が始まった。

《公園前の道路》

俺は間様の後ろに立ち信号待ちの間、心臓のドキドキが止まらない。アパートの奴らと一緒にいると毎回死にかけるとような事件に巻き込まれるが、間様と二人なら巻き込まれない気がする。

「完助殿、信号が変わったぞ」

「あ……ああ、すみません」

俺は車椅子を押して道路をわたる、間様の鼻歌が聞こえてくる……かなり機嫌が良いようだ。

しかし肩が震えているのが後ろからだとよくわかる。

寒そうにしている間様に俺は巻いていたマフラーを首に掛けてあげた。

「……ん、ありがとう」

「イイ！」

なんかイイ感じだぞ！これで近くにクリスマスツリーとかあったらムードは最高だ！

やっぱりデートって感じかな？周りから見たらお似合いのカップル

にみえるかな？

「完助殿、ちよつとコンビニに寄ってくれないか？」

俺はコンビニへ向かった。コンビニはすでにクリスマス一色、飾り付けもハデだし店員もサンタの格好をしている。

「ふうゝ寒いな」

間様は白い息を吐き出した、確かに寒いが間様の笑顔は絶えない……たぶん実際のところ寒くはないのだろう。

さつき震えていたのも俺と対等であるように気を使ってくれたに違いない。

アパートの住民と一緒に間様も人間離れしたところがあるからな。

「そういえば完助殿はコンビニでアルバイトをしていたの、それだけで学費とかを払っているのか？」

「実のところ、両親に少しだけ払ってもらってます。アルバイトの給料は生活費とかでほとんど消えるツス」

「……そっか」

俺達は二人でホット缶コーヒーを買いコンビニを出た。

「もう今年も終わりじゃな」

「そうですね」

「実家には帰らないのか？」

「母親から手紙がきたんですよ、まあ年明けてから顔出しに行こうかなって思ってます」

「うむ、家族はいいぞ。私にはいないが……」

間様は寂しそうな顔をした、缶コーヒーのフタをあけて飲み始める。

「星の姫で活動していた時は面白いことがなかったが、今はアパートの管理人になって住民と触れ合うことで毎日が楽しいぞ」

「そうですね、一緒にいると疲れるけど……いないと寂しいですね」

「うむ、私にとってアパートの皆は家族じゃ」

缶コーヒーを飲み干し、俺達は映画館へ向かった。

《とんぼシアター》

「完助殿？」

「……はい、涙が出そうです」

『殺戮のクリスマス2』

あのババア、去年のチケットを寄越しやがってええ！

「そういえば去年あたりに『殺戮のクリスマス』のCMがやっていた気がするの……ま、気付かなかった我々も悪いのじゃ完助殿」

「でも、せつかくのデ……映画が」

「レンタルで借りればいいではないか、2も来年レンタルして一緒に見よう……な！」

間様の笑顔が、俺を「ま……いつか」で気持ちにさせる。

「まずは終羽里殿と約束したケーキを買いに行こう、行くぞ完助殿」
こんなことがあってもいいじゃないか。言葉にはださなかったが俺には間様がそう言った気がした。

しばらくして、俺達を優しく包むように……空から雪が降りだした。

33話「旅行く前編」

明けましておめでとう御座います。

今年も『クタビレ荘の生活』をよろしくお願いしたいのですが……寒い、凍え死ぬかもしれん。

今、俺達クタビレ荘メンバーがいるのは……とんぼ町から電車で約2時間、バスで約1時間のところにある雪山。

そう、スキーを兼ねて温泉旅行に来たのだ。

「大丈夫か完助殿？」

「ううゝ大丈夫じゃないですよ、旅館はまだなんスか？」

俺は寒いのが苦手だ……。

「バスを降りたら少し歩かないといけないからの、もう少しじゃよ完助殿」

間様の車椅子を押している結衣さんはムスっとした顔で俺に言った。

「体を鍛えるバカ野郎」

ザッザッザッ

雪に埋もれた道を確かめながら、友蔵が先導する。

「だっはっはっはっ、ワシに付いてこい皆の衆！」

何が楽しいんだよ！

アレだな、雪を見るとハシャグタイプだな……年考えろよ。

しかし、とんぼ町の淡雪とは大違いだな。

「……あれ？なんか1人足りなくないか？」

キングと光太郎さんはアパートで留守番だし、寿さんを含めて14人のハズだが……1人足りない。いや、1匹足りない！

「おい！ドコだウサギ！」

「ココだピョン」

全裸（白い毛皮のみ）で俺の隣に突っ立っているピョン太。

「うぎゃあ！いつの間に隣に、ってか服を着る服を！」

「いや、コレの方が動きやすいんだピョン」

「寒くないのかよ？」

「つかマジで雪と同化して見えない。」

「かろうじて赤い眼が見えるくらいだ。」

キラーン

終羽里の目が今年もギラギラに光る。

「……非常食」

垂れるヨダレを手で拭きながらピョン太を目掛けて走り出した。

「ぎゃああああああ！くるなピョン！」

逃げるデカウサギ。

しばらく好きにさせておこう、2、3分したら肉片と化して帰ってくるだろう……もちろんピョン太が。

それにしても、このコンビはいつ見ても飽きないな。

「あつ！見えましたよ、宿泊する旅館が」

寿さんが指をさした方向に見えるはクタビレ荘に引けを取らないボロ旅館。

「ココまで来て……あんなボロ旅館に泊まるなんて冗談じゃありませんわ」

駄々をこねる麗華ちゃん、そして毎度同じく慰める双子の妹の恵理華ちゃん。

「姉さん、せっかく間様が私達の旅費まで出してくれたのにワガママ言わないで」

「そうだ、なんなら今からアパートに帰れよ」

結衣さんの一言に麗華ちゃんはブチギレ、持っていた刀で快心の一振り。

懐かしきコレクションNO・103『花鳥戦光』

「うおりゃああ！」

ザシュ！

「なんの！変わり身の術！」

変わり身にされたのは結衣さんの近くにいた鈴木。

「がはっ！」

見事に命中。大量の血が噴き出し、白い雪が赤色に染まる。

「死ぬな戦友ヨ！」

チャールズは鈴木を抱き寄せる。

しかし麗華ちゃんの攻撃は続いていた。

「こしやくな！立花流奥義！怒羅魂・土裸射舞！」

「変わり身の術2！」

第2の変わり身被害者はチャールズ。

グサッ！

「ノオオオオオオオ！」

再び変わり身されたものの、麗華ちゃんは満更でもない顔だった。宿敵チャールズだからな。

ヒュッ

ん？空から槍が降ってきたぞ？

ズサツ！

雪上に刺さる槍、そして空から降ってきた1人の少女。

見慣れた紫色の髪、世界防衛指揮官のシュバリエさんだ。

「……フェノ？」

「シュバリエ！お主が何故ココに？」

「今しがた仕事が終わったところよ。何やら騒がしかったので世界の平和を乱す敵だと思い、とりあえず天守閃幻を投げてみた」
とりあえず投げられるのは困るな……さすがに。

「よし、ならシュバリエも参加だな」

「なにに？」

キョトンとした顔で尋ねるシュバリエさん。

温泉旅行に強制参加した。

《旅館内の露天風呂》

チャポーン

《男湯》

「いい湯じゃな完助君、夜空に満月とは絶景かな」

「そうだな友蔵ジイさん、露天風呂も悪くない」

温泉に漬かる俺の足元でチャールズと鈴木は潜水ホフク前進、プールに行った時以来まったく成長しとらんのかコイツらは……。すると木の柵の向こうから女性の喋り声が聞こえる。

すぐ隣は女湯だったのか！？

俺は耳を傾けた。

《女湯》

「いい湯ですね皆さん」

「幽霊がわかるわけないでしょ」

「姉さん！寿さんに謝って、それは言い過ぎです！」

はわわわ……と、寿さんの声が聞こえた。泣いてるのか？

「む……結衣、お主なかなか胸がデカいな」

「お、恐れ入ります閻様」

へえ、結衣さんの胸がデカいとは……。

いつも着ているスーツは膨らみがわかりにくいからな。

「本当に光太郎さんには悪いわねえ……」

「仕事なのだから仕方ないよ、仕事は大事だ」

愛子さんとシュバリエさんの声。

1人クタビレ荘にいる光太郎さん、実は俺も最近知ったのだが光太郎さんはサラリーマンなのだ。

今日は休みがとれなかったらしい。

てつきり現役プロレスラーかと思ったのだが（やっぱり体型的に）

《再び男湯》

「さすがにダメだよ兄ちゃん、女湯を覗くなんて」

「俺達は十分に大人なんだ弟よ！終羽里の裸を……いや、とりあえず馬になれ！」

十分な大人でも覗きはダメだぞ拳使郎。

「てめえ俺の妹の裸を見れると思ってんのか？兄として断じて許さんぞ！」

「じゃあシュバリエの裸を……」

「違っただろ拳使郎！普通、男が見るならなら恵理華ちゃんの裸とか

だろ！もしくは大人のお姉さんの間に間様とかだろ！」

「年上には興味ねえよ」

シュバリエさんはテメエより年上だ！

「なんか飛んで来たピヨン？」

ピヨン太の一言に俺は柵の上を見た。そこから石鹼や刀が降ってきた。

「ギャアアアアアアア！」

《広間》

温泉ではヒドい目にあつた、確か夕食は旅館の広間でカニ鍋だったな。

よし、たらふく食うぞ。

「お母さん、食べ物が無いよ？」

「本当ね恥芽ちゃん」

……あれ？あるはずのカニが無い？

全て食べられている、誰の仕業だ？

俺は女将さんに聞いた。

「ああ、さきほど1人の女の子が広間の方をウロチョロしてましたよ」

そーいえば、温泉から聞こえない女の声が1つ……。

あの食いしん坊はどこに消えた！？

沈黙の中、ただひたすら間様の笑い声だけが広間に響いた。

笑い事じゃないですよ間様！

34話「旅行〜後編〜」

ボロ旅館で1日を過ごして、ゾロゾロとロビーの方に姿を現すクタビレ荘メンバー。

ロビーには暖炉もソファもあるし、それなりに設備も調っている。「うーん、まだ眠いピョン」

目を擦りながらスキーの準備をするピョン太。

「がっはっは、スキーじゃスキーじゃ！ロープウェイに乗るぞ皆の衆！」

老人は早起きだ、友蔵は一人でハシャいている。

周りからは返事がない。スキーのために集まって旅行に来たのだが……正直な話、みんな乗り気じゃなかったりする。

それを見て、一人落ち込む友蔵。

「僕が付き合うピョン！」

仕方ない……って感じな顔でピョン太が一步前に出て友蔵の肩を軽くポンつと叩いた。

ガシッ！

スキーウェアを来た友蔵は、ピョン太の耳を掴んで外へ出た。

「がっはっは！」

「ピョヨヨン！」

さようならピョン太！死んでこい！

俺達も一応着替えてはいたが、スキーは逃れることができた。

ところで昨日の力ニ事件はと言うと、腹を満たした終羽里が近くの海で大量に捕ってきたらしい。

おかげで俺達は飢え死にしないで済んだ。

「そーいえば終羽里、昨日は海で力ニを釣ったのか？」

「……手掴み」

……終羽里は嘘をつかない。

割り切れ！コイツなら何でも有りだ！

《旅館前》

俺達が泊まった旅館とは別の旅館にいた客が一斉に山の上からスキ
ーやスノーボードで下りてきた。

俺達はソレを見てるだけ、あまりボロ旅館から離れたくない……と
思ってたりする。

すると、いつの間にか雪だるまを作って遊んでいる二人の子供。

意外な組み合わせ……いや、ピッタリな組み合わせの終羽里とシュ
バリエさん。

「そつえば、シュバリエさんは今年で12歳ですね、終羽里ちゃ
んより年下になっちゃいますね」

フワフワ飛びながら寿さんが言った。

確かにシュバリエさんは呪いのせいで肉体的には今年で13歳から
12歳になる。

「む……違う、私は今年で28になるのだぞ」

そう言いながら悪魔をイメージした雪だるまを一生懸命作るシュバ
リエさん。

つい俺は少しカラかった口調でツツコミをいれてしまった。

「まるで子供みたいに楽しく雪だるま作りますね」

「……くっ」

シュバリエさん、精神的にも子供になってきているのではないだろ
うか？

その時、横で一緒に雪だるまを作っている終羽里がシュバリエさん
に声をかける。

「……楽しいね」

恥ずかしそうな顔をしながら返事をするシュバリエさん。

「う……うん」

……お似合いの二人である。

「死を招くクタビレ雪合戦!!」

拳使郎の一言で急遽始まった雪合戦。

Aチーム『拳使郎・恥芽・チャールズ・鈴木』

Bチーム『俺・愛子さん・麗華ちゃん・絵理華ちゃん』

「ちょっと待てい!いくらなんでもBチームが不利だろ!っ!か俺は別に雪合戦したく無いし!」

俺は激怒した。

「じゃあ私が入ります」

シユパッと手を挙げる寿さん。

「幽霊に要は無い!」

拳使郎が言った。

「ガン!」

涙を流しながらユラユラとボロ旅館へ帰っていく寿さん。

ちなみに間様と結衣さんは、旅館のロビーにある暖炉の前でソファに座りながら茶を飲んでいる。すでに観戦モードである。

「つべこべ言わずに開始!」

拳使郎の一言で弟の恥芽が気合いを入れる。

「僕ががんばるよ兄ちゃん」

「勝手に始めんな!」

ボッフ!

俺の顔面に雪玉が当たる。

「うぐっ!」

チャールズと鈴木は雪玉乱射攻撃。

「ファイヤー!鈴木二等兵ファイヤー!」

「イエッサー軍曹!」

くそっ！こーなったらヤケクソだ！

俺も雪玉を作って応戦するが、4対1じゃ話にならん。
他の3人は何をしてるんだ？

後ろを振り返ると……。

「きいゝ、また失敗ですわ」

「姉さん不器用ね」

「おだまり！」

何度も雪玉を作り直す麗華ちゃん、麗華ちゃんの雪玉が出来上がる
まで待っている絵理華ちゃん。

グッ……ボロ

「あら？」

グッ……ボロ

「あらら？」

雪玉を作っても自分の握力で握り潰してしまう愛子さん。

役立たずばかりじゃん！

バフッ！

「きゃ！」

拳使郎の投げた雪玉が絵理華ちゃんの頭に当たる。

シャキン！

「うおおおお！腐れ外道がああ！」

「だああ麗華ちゃん！刀はダメ！反則だ！」

「姉さん！私は大丈夫だから！」

必死に麗華ちゃんを押さえる俺と絵理華ちゃん。

「じゃあ反撃するわよ」

愛子さんは考えた。

縦横5メートルの大雪玉を作れば潰れる心配は無いと……。

ヒュッ！

ドシン！

「ぎゃああああああ！」

ナイス愛子さん！

……と言いたいが麗華ちゃんを先に止めてほしいかも。

「くっ、おのれオフクロめ」

「さすがお母さんだね」

立ち上がる一撃兄弟……と、ロケット砲？

チャールズと鈴木が二人掛かりで構えているのはロケット砲。

いくらなんでもソレはやりすぎだ！

「汚ねえぞチャールズ！」

「すいません兄貴」

謝るならロケット砲を下ろせ鈴木！

「戦場では死は付き物だよ完助ボーイ」

ドキューン！

そんなもの知るかバカヤロウ！！

ロケット砲の弾は俺達Bチームを大きく逸れて山の頂上へ……。

助かったが軍人目指してるのに命中率無いなチャールズ。

ゴゴゴゴゴ……

「ん？」

これって……雪崩か？

周りから猛スピードで下山する人々。

ゴゴゴゴゴ……！

「ぎゃあああああああ……！」

……雪崩に巻き込まれたクタビレ荘メンバー（他、一般の人々）

ケガ人…… 0名。

死者…… 0名。

行方不明者…… 0名。

……奇跡が起きた。

35話「餅つき」

クタビレ餅つき大会。

今回の企画は一撃家の美しき主婦、愛子さんが計画したものである……。

なんでも学校へ行っている拳使郎達が帰ってくる前に餅を作りたいそうだと。

「異様な光景ですね」

「ごめんなさいね完助君、手伝ってもらっちゃって」

「いや、今まで餅なんて突いたことないんで俺は別にいいんですけどね」

たまに大学を休む、いい加減な主人公な俺。

ペッタン。ペッタン……と、俺は臼に入った真つ白な餅を杵を使ってリズムよく突いていく。

ちなみにパートナーは暇そうだったチャールズだ。

さきほどから読者が気になっているだろうが……そんな俺の目に写る光景とは。

餅つきを張り切り過ぎて腰を痛め、愛子さんにシップを貼ってもらっている友蔵。

同じく張り切り過ぎて10分間フルで餅を突きまくり、体力を限界まで消耗してしまった光太郎さん。

手伝おうとしたが、幽霊である自分の無力さを実感してイジける寿さん。

「はっ……私、ますこつときやら、なのに」

まだコダわっていたようだ。

その哀れな光景を見て笑う間様（結衣さんは里帰り中）

「あら？何をされているのかしら？」

「あれ？麗華ちゃん学校は？」

「そういうアナタも学校はどうしましたの？」

あゝなるほど、お互いズル休みか……。

「餅を突いているのでス！風邪も引いていないのに学校を休むようなヤツは首を突っ込まないことでス。まあバカは風邪は引かないと言いますけどネ」

コラコラ……そんなことを言うとな大事なパートナーがバラバラに解体されるじゃないか。

シャキーン

ほゝら、人を殺せるような冷たい視線がすぐ隣から……。

グサツグサツグサツグサツ！

「ぐフツ！」

麗華ちゃんの家宝刀『咲夜華』が軍人気取りの男の血で真っ赤に染まる。

「私も昼過ぎから、こんなサスペンス劇場的ことをするのは嫌でしたが。人をズル休みするバカみたいなことを言われると……つい」
その通りじゃないのか？……とツツコミを入れると、この作品の連載が終わる……すなわち俺が死ぬから止めておこつ。

つてか死体に話しかけても意味無いよ麗華ちゃん。

「とにかくパートナーが……」

「手が汚れるので私はやりませんわ」

誰のせいで……。

「僕が手伝うピョン！」

その声は！

最近、黒魔術を研究したり大学の教師だったりするのを読者に忘れられていそうな飛美ピョン太！

「餅に是非ともコレを入れないピョン」

ピョン太の手にはキングが入ったビンが握りしめられていた。

「きつと素晴らしいモンスターが誕生するピョン」

ドラ○エの配合みたいに言うな。

「んな訳あるかぁ！出しやがれ！」

ビンの中で暴れ出すキング。

それを見て間様がポンつと手を叩いた。

「それだけ元気だと凶暴なキングス○イムが生まれそうじゃな」

餅 + キング……間違っていないようで間違っていてほしい！

餅つきが進まないまま、時間だけが過ぎていく。

友蔵にシップを貼っていた愛子さんが歩み寄ってくる。

「お待たせ 私が突くから替わってくれるかしら完助君」

「いや、愛子さんが突くと杵と臼が何回も壊れますよ」

「あら……それってどういう意味かしら？人を怪力女みたいに」

……おっしやる通りです。もゝ本当にその言葉通り！

「うにゃ！もうすぐ子供達が帰ってくるんじゃないんですか？」

もうそんな時間が……。

寿さんの一言に、倒れていた友蔵が体を引きずりながら俺の足を掴んで言った。

「頼む完助君、ワシは孫達の喜ぶ顔が見たいんじゃ!」

ウチに終羽里がいるの忘れてないか?

アイツがいれば手品のように餅が消えて無くなるぞ。

あれだけ食べて太らないのが不思議だ。

「旅行の時は出番が無くて寂しかった僕からもお願いします……あの子達に美味しい餅を」

余計な感想いらないですよ光太郎さん。

「引き受けた以上は最後までやりますけど、なんか嫌な予感がするんですよね」

ペッタン……ペッタン……ペッタン……ゴスッ!

あれ!?

餅が消えた?

つまりヤツが現れたのだ。

ドコだ! ドコにいる此似手終羽里!

「……ただいま兄さん」

「あれ? 終羽里、今帰りか? 餅は?」

「……餅?」

まさかの展開だ、犯人が終羽里じゃないなら他に誰がこんな早技ができるんだ?

名探偵・此似手完助の推理。

まずチャールズは死んでいるから違うな、復活するのも時間がかかる。

麗華ちゃんや間様だと俺の中でのイメージが下がる、つまり違って

ほしいという個人の問題だ。

ピョン太は度胸がないというが無理だな……キャラ的に。

キングはビンの中だし、寿さんは幽霊だ。

それに一撃家の友蔵や光太郎さん、愛子さんと言った達人メンバーも見切れなかったスピードの持ち主。

そして一番疑うべき終羽里ではないと言うと……。

俺が向かった先は202号室。

バン！

俺は勢いよく戸を開けると、部屋にいたのはコソコソと部屋の隅で餅を頬張る一撃拳使郎、そして少ししか貰えなかった恥芽。

「ほぐひふいはなぎゃんふけ。ほへほゆちゅべきげひゅうほおぎ」

ほはえをほのふあほへはふの』（よく気づいたな完助。これぞ一撃流奥義『お前の物は俺の物』）

喋るのはいいから、さっさと飲み込め拳使郎。

「う……ぐおっ！」

「兄ちゃ〜ん！」

お約束のように喉を詰まらせる拳使郎。

「いか〜ん！吐き出せ拳使郎！死ぬぞ〜！」

ドスッ！

拳使郎の腹にめり込む終羽里の腕。

「おぐっ！」

拳使郎はその場に倒れ、口から大量の餅が出る。それを確認した俺は急いで拳使郎の側に駆け寄る。

「よくやったぞ終羽里、拳使郎を助けたんだな！」

「……いいえ。トドメをさしただけよ」

「え？」

拳使郎はピクリとも動かない。

読者の皆さん、独り占めはダメですよ。死ぬ可能性がありますから。

36話「バレンタイン」

2月14日……女性が想いを寄せる男性に何をする日だったっけか？

俺は期待を胸に膨らまさないといけないような気がするが、何を貰うんだったっけ？

「……ハイ、兄さんチョコ」

終羽里が俺にくれたのは、手作りのハート型チョコレート。

「そうか！バレンタインデーか！」

今まで縁が無かったから忘れていた。

俺は終羽里からチョコを受け取るが、何かが変だぞ？

「なんか小さくないかコレ？」

「……作りながら、少し、食べた」

少し??

《終羽里＆拳使郎の場合》

今回はバレンタインデーなので、このイベントを俺が解説を踏まえで見物しようと思う。

まずは、一切の望みもない終羽里と拳使郎だ。

バン！

ガタン！

「女！俺に渡したい物があるんじゃないのか!？」

201号室の戸を破壊して拳使郎が入ってきた。

「……ない」

「そんなことないだろ！」

「……ない」

「そんなこと……」

「……ない」

諦める拳使郎、男には諦めなければならぬ時もあるのだ。

「クソッ！なら、その机の物はなんだ！」

拳使郎は先ほど終羽里が俺にくれたチヨコを指差した。

「……チヨコ」

「俺には！」

「……ない」

「完助にあつて俺には……」

「……ない」

もはや拳使郎は精神崩壊寸前だな。

「……あ」

終羽里がフツと思い出す。

「あるのか！」

拳使郎は雄叫びをあげて期待する。

「……ハイ、借りてたDVD。このアニメ全然オモシロくなかったよ」

ピッピ〜！

……試合終了。

《寿さん＆完助の場合》

部屋の壁をすり抜けて、お騒がせ幽霊が姿を現す。

「完助さ〜ん、愛子さんに頼んで作ってもらった私からの愛の、ちよこれーと、ですよ〜」

「で……どこにあるの？」

寿さんの手にチヨコは無かった。

「いや〜、ちよつと私じゃ持てなくて」

「それは片腹痛いわな」

はぁ、と俺はため息をつく。

「……………無念です」

だったら始めから愛子さんに頼まなければいいのに。
しかし気持ちだけでも貰うとするかな。

《晶子ちゃん＆完助の場合》

コンコン

「はい」

ガチャ……………（なんとか直した玄関の戸）

「オッス完助君、チョコ持ってきたで」

「ありがとう晶子ちゃん」

「義理な！」

「いや強調して言わなくても」

「ウチお菓子屋でバイトしてるから、いろんな人に義理チョコ配って歩いてるねん」

「ご、ご苦労様です」

「気にしなな、ほなバイビー」

晶子ちゃんが持っているサンタの袋のような物、アレ全部チョコなのか？

とりあえず俺はコレで2個目だな。

《愛子さん＆その家族の場合》

一撃家のバレンタインとは。

「お母さん、食べきれないよ」

「まだまだあるわよ恥芽ちゃん」

ニコツと笑う愛子さん。

丸いテーブルに置かれた、‘愛情’、タップリのチョコ。

全長5メートル、厚さ30センチ。
デカすぎる。

「堅いぞ愛子さん」

友蔵の歯はボロボロになっていた。
「ついでに歯も鍛えれると思って」

ガッ！

チョコに手を引っかけてしまう光太郎さん。
グラッ！

「おおお！」

光太郎さん目掛けてビクチョコが倒れ込む。
「ぎゃあああ！」

ドシーン！

圧死すなコレは……。

《麗華ちゃん、結衣さん＆完助の場合》

麗華ちゃんと結衣さん、この二人は非常に気になりますな。

偶然にもアパートの階段にいる二人を発見して話しかける。

「やあ、二人はチョコを作って誰かに渡さないのかい？」

「何を言ってますの完助？バレンタインは男性が女性にチョコをあげる日ですよ、私が作るわけじゃないでしょ」

問題発言だ。てか麗華ちゃんのバレンタインはコレで定着しているのか。

「面倒くさいだけだろ」

結衣さんがボソツと言った。

「何て言いましたの結衣？ハッキリ言いなさい」

「不器用で手作りも作れないし、店で買うのも面倒くさい。もともとチョコをあげる相手もないからバレンタインは意味がないんだろオマエは」

「ハッキリ言うな！」

むちゃくちゃだな相変わらず。

とにかく、この二人には期待できないな。少し残念だけど……。

《ピョン太の場合？》

俺はイヤな予感がして203号室を覗きこんだ。

「ヒョヒョヒョ、ついにできたピョン！バレンタイン専用究極ホレ薬だピョン！」

最近実験室に引きこもってるって話は聞いたが……これが。

あとで間様にチクってコイツの暴走を止めてもらおう。

《間様&シュバリエさんの場合？》

103号室前で異様な光景を見た。

間様がシュバリエさんにチョコを渡しているのだ。

「なんだコレは？ 女の私がもらっても仕方がないだろう？」

「ワイロじゃ」

「ワイロ？」

「だから、もう少しだけ子供のままでいてくれな」

「バカ者！私がチョコをエサに……そんな……」

なんだか雲行きが怪しくなってるないか？

もう一押し……と言わんばかりの顔で間様が言った。

「大人に戻るのは、もっと終羽里殿と仲良くなってからでも良いとは思わんか？」

「……ぬぐ」

これはシュバリエさんの負けだな。

《シュバリエさん＆終羽里の場合？》

先ほどの続きとえばいいのか。シュバリエさんがチョコを片手に終羽里をアパートの庭に呼び出した。

「ツツコミどころ満載だが、何も言わずに受け取ってほしい」

「……うん、ありがとう」

やったねシュバリエさん……と言いたいが。

「間様に言いように遊ばれてないツスか？」

「黙れ完助、もの凄く埋めてやるつか？」

「すみません」

シュバリエさんは赤らむ顔を隠すように小走りで去っていった。

《恵理華ちゃん＆鈴木の場合》

これを見ないと終われないな。

まだ鈴木のことを想っている恵理華ちゃん。

その様子を陰ながら見守る麗華ちゃんが今回の特別解説ゲストだ。

そして今まさに、101号室のインターホンを鳴らそうとした時。

「あれ？」

戸に貼られた紙に気が付いた。

『チョコお断り』

「おちよくるヤツは死あるのみ」

「ストップ麗華ちゃん！もう少し見守ろうよ！」

ココで麗華ちゃんが飛び出したらアウトだ。

「……これくらいじゃ負けません」

恵理華ちゃんはドアノブに手をかけ、ゆっくりと開けた。

「早く帰ってこないかな」軍曹 手作りチョコ、受け取ってくれるかな」

キッチンで楽しそうにチョコを作る鈴木を見て……倒れる少女。
刀を片手に暴れる少女。

見なかったことにして立ち去る俺。

こうしてクタビレ荘のバレンタインは終わった。

後に間様からもチョコをもらった。

間様は何も言わなかったが俺は本命だと信じている。

今年は3つもチョコをもらって満足だ……と思っているのは俺だけかもしれない。

37話「一寸法師」

今思うと俺は油断しすぎたんだ。

昨日の夜……俺は喉が渴いたので、冷蔵庫からジュースらしきものが入ったビンを十分に確かめもせず飲んで眠りについた。

朝目が覚めると体が縮んでいた。

どこかの小さな名探偵と一緒にされては困る。

大きさはゴルフボールくらい縮んでしまっているのだ。

ここまでくると見た目とか頭脳とかのレベルじゃないぞ！

しかしあのジュースらしきもの、俺は心当たりがある。

間様の力……でも小さくはなるが違う。

もつと前にピョン太がシメフクロウを使って俺を鳥人にしようとして失敗。予定変更で黒魔術の生贄にしようとして俺が逃げる際にピョン太にぶっつけたプラスチックに入った黄色い液体……アレだ！何故にココの冷蔵庫に入ってるんだ？

ピョン太の陰謀か！

終羽里にこんな薬が効かないことはヤツが一番良く知っている。となると狙いは俺だ……アイツまだ俺を狙っているのか！

懲りないヤツめ。

しかし、このままだとマズいな。

ピョン太に見つかる前になんとかしなくては……誰かいらないのか元に戻してくれそうな人は？

「……兄さん？」

「うおお！起きていたのか妹よ！」

「……うん、5時くらいから」

老人並に早いな。

しかし終羽里に頼めば魔法とかで元に戻してくれるかもしれん！

「……兄さん、かわいい」

「終羽里！いきなりこんな姿でわるいが、冷静に聞いてくれ！」

「……潰したい」

「あん？」

黒い翼を生やした天使！

眠りから覚めた鬼の子！！

不可能を可能にする戦場の母！！！！

実の兄を心の底から潰したい……そんな眼をしている。

「ぎゃあああ！」

もちろん俺は逃げた！

小学生の頃は体育のマラソンなんて面倒くさい、走るのがダルい。

俺はそーいう男だった。

でも今は走りたい！

このままの人生一寸法師はイヤだ！

『蒼い空豆』に行こう！

あそこなら……東野さんと空豆店長なら何とかしてくれるハズだ！

俺は人体の限界の素晴らしさを、この身で実感した。

玄関から外には出れないのを確認すると、50メートルを3秒で走るくらいのスピードで偶然にも開いていた小窓へ向かい机のイスを踏み台に大ジャンプ！

飛び散る汗、一瞬だけだが俺は空を飛び……落ちた。

「おおおおお！」

下は確か、間様が育てている花達があつたハズだ。
うまく花に飛びつけばいいが……。

ポフッ

肌色の花？

いや……これは手だ！

「ん？空から完助殿が落ちてきたぞ？」

うおっ！ポリュームが！

声がデカくて耳がギンギンする！

「あ、間様！これには訳がありまして、とりあえず元に戻るために『蒼い空豆』に行かなければならないんです！だから協力してください！」

「なるほど……しかしなあ」

「はい？」

「元に戻る前に小さな完助殿を描かせてくれ」

ニコツと笑みを浮かべ、スケッチブックを取りに間様は俺を膝の上に乗せて103号室へ車椅子を漕ぎ始めた。

「うがつ！間様ストップ！」

「なんじゃ？」

俺が目にしたのは2階から降りてくるピョン太の姿だった。

マズい見つかる！103号室まで間に合わない！

「すいません間様！」

俺は間様の膝から飛び降りて走る。

「残念……生きて帰ってくるのじゃぞ」

アパートを出て、商店街を抜けて……そして俺は迷子になった。

「どこだココは？こんな場所あったっけ？」

周りがデカいと世界が違って見える。

「方角はあっているハズだ、踏みつぶされないように隠れて行けば道の端を通り、出来るだけ目立たないように進むと普段出会わない

……毛虫と出会う。

モゾモゾ

「ぎゃあああ！」

あまりのデカさに腰が抜ける俺。

体を引きずりながら、毛虫から逃げようとするが明らかに毛虫のほうスピードがあった。

ピトッ

触れた瞬間に……。

「エンガチョエンガチョエンガチョ！！」

動かない体が嘘のように動きだし、店まで猛ダッシュ。

《蒼い空豆》

「うがああ！到着だコノヤロー！」

「店長！ミニマム完助さん来店です」

東野さんのかけ声で、店の奥から空豆店長が又ツと顔を出した。

「まだまだ私も育ち盛りのようだ、完助君が小さく見えるな」

「アンタの身長が伸びたんじゃなくて、俺が縮んだんだよ」

「……なんと！」

「ピョン太の作った黄色い液体を飲んだらこゝなっただ、なんとかしてくれ店長！」

「あゝあの薬なら大丈夫ですよ、すぐに効果が切れますから」

東野さんが俺の肩にポンつと手を置いて言った。

あれ？東野さんと同じ大きさ？

あれ？俺、元の大きさに戻ってる？

「その薬、実はウチの店で作った薬なんですよ。それをピョン太さんがパクったんですよ」

「あは……あははは」

とりあえずアパートに帰ったらウサギを殴ったらいいのかな。

最終話「そして死に逝く悲しき男」

すでに読者は気づいたかもしれないが、『クタビレ荘の生活』最終話です！

この世界で新年明けてから6話目でまさかの最終話、読者も作者も予想してなかった展開です。

その理由は間様の一言から始まりました。

……

……

「残念ながら完助殿、お主あと12時間で死ぬぞ」

「え」と、何の映画の影響ですか？」

「ん？私が冗談を言っている？」

「間様の体は冗談で出来てますからね」

ズガッ！

俺の心臓目掛けて飛んできた手裏剣を神業のように避ける。

これだけが俺が悲しくも会得してしまった回避能力だ。

「今はまだ死ねないでしょうが結衣さん！」

眼光を鋭くして結衣さんが現れた。

「間様を侮辱するヤツには死を」

正直言うと俺って何回も死んでいると思うのだが……。

しかし、今回の間様はちよつと違う。

目頭に浮かぶ涙……嘘偽りない涙である。

「そうか。ついに死ぬのか完助、送別会でもしてやろうか？」

「コレって、冗談拔きの本当なんでしょうか結衣さん？」

「貴様！間様の泣を見て何とも思わんのか！？」
「いやゝしかし」

怪しまないのはコメディとして失礼だろ。

トトトトトトー！

ん？なんだが騒がしくなってきたな？

無数の激しい足音が俺に向かって来るぞ。

「完助君が死ぬなんてイヤやゝ！」

都合の良い情報網だな本当に。

どうなれば一瞬にして晶子ちゃんにまで「俺が死ぬ」ことが知れ渡るんだよ。

「泣かれても仕方ないよ晶子ちゃん、何かの間違いだよ」

「今更言っても意味ないけど……ずっと完助君のこと好きやってんで！」

さすが最終話！ぶっちゃけ過ぎだろ！

「『蒼い空豆』の常連客もとうとうお陀仏か」

「寂しくなりますね店長」

常連客になったつもりないんですけど。それに別に来なくてもよかったんですけどね東野さん、そして空豆店長。

「俺様の敵は1人でも減った方が助かるがな」

まだくだらないことを考えているようだなキング。

「いい加減にしてくれよ、俺が死ぬなんてどうしてわかるんだよ！」

「はわわわ……完助さん、てれび、見てないんですか？」

寿さんが泣きながら尋ねてきた。

「テレビ？」

俺は201号室へ行きテレビを点けた。

そこに写っていたのは紛れもなく俺の顔だった。

必ず当たる占い師マダム・ポーラの占いの結果、俺は今夜に死ぬらしい。

勝手に人の顔を写しやがって……やっぱり俺って運が無い。

しかしこの占い師、ウソ臭いな。

「さらばだな完助……南無」

「拝まないでくださいシュバリエさん！」

くそ！足掻いて生きること乞わないといけない状況なのかもしれないのだが、まったく死ぬ気がしない。

「妹の幸せは俺に任せる！ハッハッハッ！」

任してたまるか拳使郎！

「もつと完助のお兄ちゃんと遊びたかったな」

そんな悲しい顔しなくても大丈夫だと思うぞ恥芽。

「今まで色々あったわねえ」

あれ……？もう締めに入ってるんですか愛子さん！

「もつと出番が欲しかった」

俺に言っても仕方ないと思います光太郎さん。

「弟子の死に顔は必ず見るから安心せい！」

もともと弟子じゃないから安心できぬわ友蔵！

こりゃコメディ最終話で定番の全員集合だな、次辺りピョン太か？

「完助君、これを受け取るピョン」

予感的中した、手の上に不思議の国のアスを乗せたピョン太が鼻声で言った。

「ア スが何だよ？」

「あの世でパートナーにしてあげてほしいピョン」

「断る！」

ア スの主のくせして、あっさりあの世に送ろうとするな。

「鈴木二等兵、完助ボーイに全霊を込めて敬礼ダ！」

「イエッサー軍曹！そして今までありがとうございます兄貴！」
心なしか笑みを浮かべているように見えるのは俺の気のせいかな？

「君が死を迎える前に僕の研究を全部報告してあげるピョン」
お前はもう何も言わないウサギ野郎！

「皆さんに愛されて幸せ者ですね完助さん」

おっ…… 恵理華ちゃん、良いこと言ってくれてるけど違うんだよね。
「まったく、みんな間違っていますわ」

うおお！ナイスだ麗華ちゃん！

君ならわかってくれていると信じていた、皆の誤解を解いてくれ。

「どうせ死ぬなら、その前に殺すのがベスト」

そう言っただけで手を笑い狂う麗華ちゃん、最後の最後まで止める役の恵理華ちゃん。本当に疲れ様、そして信じた俺がバカでした。

《そんなこんなで此処手完助死亡まで残り1時間》

「コラア作者！ちよつと待てやああ！」

「……兄さん、誰に叫んでいるの？」

「ぬ…… スマン終羽里、どうやら兄ちゃん死ぬようだ」

「……兄さん、あの世でも元気だね」

くそ！気まず過ぎるぞ。しかも死に場所（仮）が201号室とは……
……だんだんマジで死ぬ気がしてきたぞ。

こーいう場合、寿さんと仲良く幽霊コンビをやるべきなのか？

いや……彼女のキャラ位置に降臨するのは嫌なので大人しくあの世へ。

そうと決まれば、いいか……映画や漫画などで世に轟かした作品は感動系が多い、タイタニックとかな。

つまり俺もこの際、読者を泣かせて散ってやるぞ。

抗いながら死ぬのではなく、あした ジョーみたいに燃え尽きて散るのもいいな（実際は死んでないけど）

ドラゴ ボールのクリンみたいに誰かの名前を叫びながら後々残された者がスーパーな気分になれるように散るのも良い。

他には……他には……。

「番組の途中ですがニュースです。先程、詐欺および窃盗の罪により占い師マダム・ポーラ容疑者が逮捕されました。マダム・ポーラ容疑者は数々のインチキ占いで大量の金を騙し取っていた疑いがあり……………」

クタビレ荘の生活。

これにて完！！

最終話「そして死に逝く悲しき男」（後書き）

『クタビレ荘の生活』完結です。同時に旅に出ます、しばらく勉強したりしてヒヨッコリ帰って来ようかと……その時にクタビレ荘²をやるかわかりませんが、とりあえず皆さんに“チラリズム”という名をテキトーに頭の隅っこにでも覚えていてくれれば本望です。たまに短編だけでも書いて載せてるかもしれませんが（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7974a/>

クタビレ荘の生活

2010年10月12日01時56分発行